

# 東方執事記録～絆を紡ぐ者～

豆鉄砲X☆

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある青年…八神シンジは、正体不明の穴(?)に落とされ別世界に迷い込んだ。…そこは妖怪と人間が共存していると言う幻想郷であった。この世界でシンジは、何を見て、何を手に入れるのか？

### ※注意※

- ・ 主は東方の原作は非想天位しかプレイしたことが在りません。
- ・ 文章力がないので、意味がわからなくなる可能性があります。
- ・ 戦闘シーンは丸つきり駄目です。
- ・ 亀更新の可能性あり。

・これは主の趣味的な奴なので、過度な期待等はしないで下さい。  
以上の事が宜しければ、見ていってください。

# 目次

くプロローグく

辿り着いたのは幻想郷

く紅魔郷編く

初異変

氷の妖精

館の門番

知識と日陰の少女

紅魔館のメイド長

紅き館の主、悪魔の妹

紅き月の夜

狂気との対峙

心の奥に…

1

5

10

14

18

22

27

32

38

43

解決

初仕事

ヴワル魔法大図書館

友達

宴会へのお誘い

取材

宴会と後片付け

変な噂

く妖々夢編く

新たな異変の兆し

冥界に向けて…

プリズムリバー三姉妹

半人半霊の庭師

52

57

63

67

72

77

83

92

97

102

106

114

幽霊の主	121
幽々子の過去と新たな恐怖	129
絶望の序曲	137
終わらない闇と絶望	147
光と影、そして絶望の終幕	153
クリスマス特別編―I	163
帰宅	173
正月特別編―I	180
暗躍する影	187
オリ主のスペカ紹介	195
過去の絶望と悲劇	205
失った世界	215
彼の為に来ること	228

バレンタイン―I	237
幻想郷の記憶	251
執事の日常	260
く永夜抄編く	
夢と月	281
主の足がヤバイ……	294
蘇る悪夢	307
狂気の鎮静	324
疑問と真実	332



♪プロローグ♪

辿り着いたのは幻想郷

シン「……………ここは何処だ？」

俺の名前は八神シンジ。気付いたら何故か森の中にいた。

シン「俺の町の近くにこんな森はなかった筈だが…」

一体何があつた…。

…そう言えば突然地面に穴が開いたような気がする。

シン「あの時の穴のせいかな？」

？「あれは穴じゃないわよ？」

シン「…誰だ？」

突然女性の声が聞こえ振り返ると、あの時の穴（？）から綺麗な女性が見ていた。

紫「あら、意外に冷静なのね？私の名前は八雲紫。貴方がさつきから穴と呼んでいるのが【スキマ】と呼ばれているものよ。」

シン「スキマ？あんたは一体何者なんだ？それと此処は一体何処なんだ？」

紫「私はスキマ妖怪よ。それと此処は私の管理する妖怪と人間が共存する世界、【幻想郷】と呼ばれる世界よ。」

スキマ妖怪？幻想郷？成る程、そう言うことか。

シン「つまり、あんたが自身の能力か何かを使い、俺をこの世界に招いたと言うことか。」

紫「あら、理解が早いね。貴方の言う通りよ。」

シン「やはりか。そのくらいしか思い付かなくてな。しかし、何故俺をこの世界に連れて来たんだ？」

紫「わたしが貴方と呼んだのは…貴方が外の世界で忘れられた存在だからよ。」

シン「忘れられた存在？どう言うことだ？」

紫「この幻想郷は、忘れられた者が集まる所。貴方は家族を失い、貴方の事を想ってくれる人は誰もいなくなり、忘れられた存在となったからよ。」

俺の家族……………か

シン「……………俺の事を知っているのか？」

紫「ええ。貴方の名前は八神シンジ。家族は全員事故に遭い死亡。しかし、貴方は奇跡的に助かり一人残らされる。」

シン「そこまで知ってんのか…。」



何故そんな事まで知ってるんだ……。だが其よりも……

シン「あんたは能力があるんだよな？ 一体どんな能力なんだ？」

紫「その事について言っただけでなかったわね。私の能力は「境界を操る程度の能力」、その名の通り境界を操ることが出来る能力よ。空間の境目や生と死の境界なんかもね……。因みに貴方にも能力があるわよ。」

シン「俺にも？」

紫「ええ。貴方の能力は……。【創造する程度の能力】よ。」

シン「【創造する程度の能力】？ 大体どう言う能力かは分かるが使い方は？」

紫「使い方は、貴方が必要だと思うものを思い浮かべることです。自分の手元に想像した物が現れるわ。」

シン「成る程。分かった、後は自分で何とかするさ。」

紫「良いの？ まだ聞きたいことがあったら聞いて良いのよ？」

シン「少しは自分の力で何とかしないと。紫に頼ってばかりだと駄目な人間になっちゃいますからね。」

紫「ふふ、分かったわ。もし困ったことがあれば私を呼びなさい。名前を呼べば基本は姿を現すわよ。」

「基本は」って、来ないときもあるのかよ。

シン「……………ああ、わかった。」

紫「じゃあ頑張つてね♪シンジ君♪」

そう言うと、紫はスキマの中に消えていった。

…それにしてもスキマの中って気持ち悪いな。

シン「そんなことより、此れからどうすつかいな。」

俺は此れからの事を考えることにした…。

つづく…？

く紅魔郷編く

初異変

シン「さて、これからどうするか…。」

紫と別れて、取り敢えずどこで過ごすかを考えているんだが…。

シン「そう言えば能力と言う便利な物があつたな。取り敢えず切れ味の良い刀を思い浮かべて…。」

試しに刀を思い浮かべてみたら…。

シン「ホントに出来たよ。なら、この辺りの木を切つて、家でも建ててるか。」

少年建築中…

シン「よし、こんなもんで良いか。中々洒落た感じに出来たな。取り敢えずここを住居にするか。」

く数日後く

シン「ん？空が赤いがどうしたんだ？仕方がない、紫さくん！」

取り敢えず紫に聞いてみよう。

紫「あらあら、お早い呼び出しだこと♪」

シン「ああ、空が赤いことについて聞こうと思ってな。」

紫「あ、そう言えば言っただけでなかったわね。この幻想郷では、良くこう言った不可解な現象が起こる事があるのよ。私たちはこれを「異変」と呼んでいるわ。」

シン「異変？ どうにかなんないのか？」

紫「何時も異変が起きると「博麗の巫女」と呼ばれる人物が解決しに行くことになっているのだけど……。」

シン「？ どうしたんだ？ 何か問題があるのか？」

紫「…実はその巫女は気紛れで、気分の良いときとかじゃないと自分から動くこうとしないのよ。」

巫女として大丈夫なのか？

だがそれではいつ解決するか分からんな。このままだと太陽が出てないから洗濯と出来ないし。

シン「流石にこのままは困るし、代わりに俺が行くわ。」

紫「でもこれは危険よ。もしかしたら戦闘になる可能性だってあるわ。」

シン「だがこの異変を解決しなければ俺が困るし、誰かが解決しなければならぬのだから、俺が行く。」

紫「……やっぱり危険よ。止めた方が良いわ。」

シン「だが断る」

紫「……はあ。止めても無駄なようね。良いわ、この世界のバトルルールを教えてください。」

シン「この世界のバトルルール？」

少女説明中……

シン「成る程、スペルカードルールか。理解はしたが俺はスペルカードなんて持ってないぜ？」

紫「貴方の能力を使えば良いでしょ。」

能力で作れるのか、俺の能力って結構チートじゃね？

シン「……よし、こんなもんで良いか。ところで、その元凶は今何処に？」

紫「あつちに進めば真つ赤なお屋敷が見えるわ。恐らくはその館主だと思うわよ。」

シン「分かった。……俺の能力で翼とか生やすことは出来んのか？」

紫「そこまでは分からないわ。」

試しにやってみるか。

シン「って、出来たな。」

紫「もしかしたら、武器や道具などの物だけじゃないのかもしれないわね。まあ、自分で色々試してみなさい。私は行くわね♪気をつけてね♪」

そう言うのと紫はスキマの中に戻っていった。

シン「……………行くか。」

こうして俺は赤い館とやらに向かっていった。

く博麗神社く

魔「なあ、霊夢く！」

霊「何よ、素敵なお賽銭箱はそこよ。」

魔「いや、そうじゃなくて。この変な感じは…異変じゃないか？」

霊「かもしれないわね。」

魔「なら早く異変解決しに行こうぜ！」

霊「面倒だからパス」

魔「……異変を解決したらお賽銭を「早く異変を解決しに行くわよ！魔理沙！」（現金な奴だな、まったく）」

続く…と思う

## 氷の妖精

シン「まだ赤い館が見えないな。」

俺は今、この異変の元凶と思われる赤い館へと向かっているのだが…。

?「おい、そこのお前！」

シン「?誰だ？」

急に誰かに話し掛けられ、振り向いたら氷を思わせるような少女と緑髪の大人しそうな少女がいた。

?「あんた、さいきよーのあたいと勝負しなさい！」

?「ちよつとチルノちゃん！初対面の人にそんなこと言ったら失礼だよ！」

チル「大丈夫だよ、大ちゃん！さいきよーのあたいが負けるわけないじゃん！」

…話か噛み合ってねえぞ？それに俺は急がなければならぬんだが…

シン「すまないが、俺は用事があるからまた今度にしてくれないか？」

チル「そんなこと言つて、さいきよーのあたいから逃げる気でしょ！そうは行かないわよ！」

——氷符『アイシクルフオール』



シン「っ！やるしかない…のか？」

チルノがスペルカードを使い俺は身構えたが…何故か弾が自分から避けてるように見えるのだが…

チル「な、何で当たらないの！」

大「あの、チルノちゃん。あの人全然動いて無いよ…」

チル「…へ？」

一体何なんだ？

チル「こうなったら、あたいの取って置きを食らえ！」

——凍符『パーフェクトフリーズ』

お、今度はまともそうだな。カラフルな弾が大量にばら蒔かれて…。流星に不味いか。

シン「ならこちらもスペルを発動させて貰おう。」

——光符『ヘヴンズサンシャイン』

俺がスペルを発動すると、辺り一面に光の波動が放たれて、チルノのスペルが全て消滅した。

チル「なっ!?そ、そんな！」

シン「それじゃ、そろそろ終わらすか。」

そう言う俺は、能力で金属バットを造り出し……

シン「行つてらっしやーい！」

チルノを吹っ飛ばした。

チル「うわあああああああああ!!!!!!」

大「チ、チルノちやあああああおん!!!!」

あつ、やり過ぎた……。大ちゃんと呼ばれてた子が可哀想だな。

シン「……まあいいか。」

気を取り直して俺は、赤い館に向かうことにした。

く例の赤い館く

? 「それで咲夜? 例の計画は順調なの?」

咲「はい。もうすぐである霧は幻想郷全体を覆い、お嬢様の敵は一人もいなくなるでしょう。」

? 「そう、それは楽しみだわ。(早く来なさい、博麗の巫女。私は貴女を倒し、この幻想郷を支配する!)」

怪しげな雰囲気を出している少女に、咲夜と呼ばれた謎の女性。彼女たちは一体何を

企んでいるのか？

そして、この幻想郷の運命は!? 次回につづく! ……だろう。

つづく…といいなあ (ポーヒー

デデー

## 館の門番

シン「ん？あれか？」

あれが例の赤い館か……。赤いと言うか紅いな……。まあいいか、取り敢えず入れさせて貰おう。

？「待ちなさい！」

シン「？あんたは？」

門の前に降りたら、チャイナ服のようなモノを着た女性が立っていた。

美「私の名前は紅美鈴。この紅魔館の門番です！」

紅魔館と言うのがこの館の名前か……。しかし門番か……厄介だな。

美「貴方はこの紅魔館に何の用なのですか？返答次第では容赦はしませんよ。」

シン「俺はこの紅い雲を消してくれるように頼みに来たんだか……駄目か？」

美「駄目です。これは私たちの目的の為に必要な事なのです。」

目的ねえ……。このままでは洗濯が乾かないから困るのだが……。

美「ですが、私に勝つことが出来たのならば中に入れてあげましょう。」

シン「戦いか。また、スペルカードルールか？」

美「いえ、私は少しスペルカードルールが苦手です。なので、純粋な闘いをしましう。 (この人は見る限り普通の人間、格闘戦で私に勝つことは出来ない!)」

シン「……仕方無いか。分かった、その勝負受けよう。」

美「それでは行きますよ。ハアッ！」

シン「ドワア!?! あぶねえな、おい。」

あの距離から一瞬で間合いを詰めて来るとは……。反応が一瞬遅れたらヤバかったな。

美「今のを避けますか。それではこれはどうですか！」

おいおい、今度は連撃かよ……。少しズルいかも知れないが仕方無いかな。

シン「フンッ！」

俺は能力により、双剣を生み出した。

美「っ?! 何故何も無いところから剣が!?!」

シン「それは俺の能力……『創造する程度の能力』だ。流石に不味いと思ったので使わせて貰った。」

美「能力持ち!?! しかし、そんな剣では私に勝つことなど出来ない！」

そう言い、美鈴は拳に気のようなものは込め、波動のようなものを打ってきた。…か

○は○波みたいだな。

シン「だが甘い！」

俺は美鈴の放った技に向かい、突っ込んでいった。

美「わざわざ自滅する気ですか!？」

シン「違うさ。お前の攻撃を……切り裂く!!」

俺は美鈴の技を双剣で切り裂いた。

美「なっ!？」

シン「これで終わりだ!」

美鈴が驚いている内に、俺は美鈴の懐へ潜り込み……。

美「しまっ!？」

シン「……チエックメイトだ。」

喉元に剣の先を突き付けた。

美「……殺さないのですか?」

シン「俺は殺し屋じゃないし、お前を殺しても意味は無いしな。」

美「フフ、完敗です。それでは約束通り中へ通しますが……この館の主は本当に強いですよ。私なんか力が及ばないくらいに……。」

シン「……忠告を感謝する……だか、俺は負けるつもりは無いからな。」

美「そう言えば、貴方の名前をまだ聞いていませんでしたね。」

シン「そうだったな。俺はシンジ。八神シンジだ。」

そう言い、俺は紅魔館の中へ入っていった…。

美「シンジさん…か。」

強い人だった…人間とは思えないほどに。

…また機会があれば闘いたいです。

つと、まだもう二人ほど相手をしなければならぬようですね。

つづく…んじやないかな？

## 知識と日陰の少女

シン「うわあ、中まで真つ赤かよ…。」

紅魔館の中に入ったはいいが、中までこうも紅いと目が痛くなるな。

？「あら？侵入者かしら？」

声が出た方を見ると、紫色のローブを着た少女が立っていた。

シン「君は？」

？「君だなんて失礼ね。少なくとも私は貴方よりも長く生きているわよ？」

シン「それはすまなかった。まだこの世界に慣れてないんだ。」

パチエ「と言うことは貴方は外来人？私の名前はパチュリー・ノーレッジ、この主

…レミリア・スカーレットの友人よ。貴方は？」

シン「俺の名前はシンジ、八神シンジだ。あんたの友人に会わせてくれないか？この紅い雲を消してくれるように頼みにいきたいんだ。」

パチエ「会っても無駄だと思うわよ？貴方ではレミイには勝てないわ。」

シン「…どう言う事だ？」

パチエ「レミイは吸血鬼、でも貴方は只の人間。結果は既に見えているわ。」



確かに…人間と吸血鬼の力の差は歴然だ…。だが！

シン「…：やってみなくちゃ分かんないぜ？」

パチエ「…：門番を倒した実力は認めるわ。でも、あの子とレミイは天と地程の差がある…。あの子は確かに強いけど、あの子を倒したからと言って調子に乗らない方が良いわよ？」

シン「別に調子に乗っている訳ではない。それに、このままあの雲を放置しておく洗濯が干せなくて困る。」

パチエ「（そ、そんな理由なの？）…：はあ、仕方無いわねえ。通って良いわよ。」

シン「良いのか？」

パチエ「ええ、興が冷めたわ。ただし、どうなっても知らないわよ？」

シン「ああ、ありがとう。」

ふう、何とか戦わずに済むか。なるべく戦わずに行きたいからな。

さあ、先に進むか。

パチエ「八神シンジか…。さっきはあんなことを言ったけど、只の人間には見えなかつたわね。」

いったい何者なのかしら？つと、その事を考える前に別の侵入者の相手をしないと  
いけないわね。

つづ…いて欲しい？

尺伸ばしに少し主人公紹介

☆名前…八神シンジ

☆性別…男

☆種族…人間

☆能力…創造する程度の能力

☆説明…容姿は黒執事のセバスチャンで、服装は…（ヤベエ、俺のファツションセン  
スが無いからどんな服が良いか…）…ご想像にお任せします。ただし、まだ執事に  
なっていないのでまだ執事服ではありません。

能力はその名の通り、思い浮かべたものを現実化させると言うもの。使う毎に成長し  
ていき、可能になることが増えて行く。つまり、チートと言うことです。

因みに主人公にはまだ隠された能力がありますが、まだ目覚めてないだけです。それはまた遠くない内に出るでしょう。

## 紅魔館のメイド長

シン「それにしても、この館はどんだけ広いんだ？」

俺は今、紅魔館の中で迷っている。そりゃあ、こんだけ広ければ初めて来た奴は誰でも迷うだろう……。

……せめて案内人が誰かいらないのか？

？「あら、迷子になった侵入者さんですか？」

シン「……何時からいた？」

？「余り驚かないのですね。つい先程からここに来ました。」

驚かない……か。内心ではかなり驚いているつもりなのだがな。まあ、何時も平常心を保つようにしているからな。

シン「それで？お前は誰だ？」

？「人に名前を訊ねるときは、まず自分から名乗るものよ？」

シン「これは失礼した。俺の名は八神シンジ。今回の異変を解決しに来た者だ。」

咲「あら？博麗の巫女が解決しに来たんじゃないのね。私は十六夜咲夜。この紅魔館のメイド長をさせて頂いております。」

メイド長か……。確かにメイド服着てるし、何でも出来そうな雰囲気を出してるな。

シン「それで？俺をどうするつもりだ？」

咲「そうですね……。では、侵入者には侵入者に相応しい、おもてなしをして差し上げましょう。」

っ!?何時の間に周りにナイフが!?これは避けられない!

仕方がない、扱ったことはないが試してみるか。

シン「はあっ！」

俺は能力によりナイフを創造し、全てのナイフを撃ち落とした。

咲「なっ!?貴方もナイフを使うの!?しかも私のナイフを全部撃ち落とすなんて……」

シン「使ったことはないんだがな……。駄目元でもやってみるものだな。」

咲「信じられない……。使ったことの無い武器で私の攻撃をかわすなんて。」

まあ、俺も実際に信じられないんだかな。

シン「じゃあ、ナイフ勝負といきますか。」

咲「……望むところよ！」

そう言い咲夜は、俺に目掛けてナイフを投げてきた。

シン「その程度！」

咲「本命は別よ！」

くっ!? 後ろからだど!?

シン「くっ…。」

っ!?! 少し被弾したか。

咲「まさかあの攻撃をそれだけの傷で済ませてしまうなんてね。普通、人間だったら即死よ?」

シン「生憎と、俺は最近人間を卒業したんでね。」

とは言ったものの、流石にキツいものがあるな。まるで俺の時間が止まってるみたいだ。……? 止まってる? …… そう言うことか。

咲「これで終わりよ!」

先ほどと同じように周りにナイフが来た。

シン「(一か八か、試してみるしかない。)」

俺は大きい布を創造して、それを盾にする。

咲「くっ!?!」

シン「行くぞ!」

咲「(不味い、時間を止めねば!!)」

シン「(今だ!)」

再び時間が止まる。

咲「これで串刺しよ！」

再び時間が動き出す………が、しかし！

咲「なっ!? 残像!？」

シン「これでチエツクだ」

俺は咲夜の喉元にナイフを突き付ける。

咲「………私の負けね。」

シン「ギリギリ俺の勝ちだな。」

でもホントに紙一重だった

咲「でも、あれは何だったの？」

シン「あれは俺の能力によって産み出された残像だ。」

咲「能力? 貴方の能力って?」

シン「俺の能力は、『創造する程度の能力』だ。この能力により、俺の残像を産み出したんだ。出来る確証が無かったから不安だったがな。」

だがこれしか思い付かなかったし、使わなきゃ恐らくやられていたな。

咲「そうなの。ふふ、貴方が人間だなんて思えないわね。」

シン「そう言うお前だって時間を止めるなんて芸当したじゃないか。」

咲「気づいてたの？」

シン「途中からな。確証があつた訳ではないが……。そんなことより、ここの主の所に連れていってくれないか？」

咲「……良いわ。連れていってあげる。でも、お嬢様に失礼な態度をとらないようにね。」

シン「……………分かった。」

さあ、いよいよ主とご対面だな。一体どんな奴なんだ

つづけ！



## 紅き館の主、悪魔の妹

咲「……………ここよ」

シン「……………でかい扉だな」

俺が案内された所は、かなりでかい扉の前だった。

シン「ここにあなたのご主人がいると？」

咲「ええ、そうよ。さっきも言ったけど、お嬢様に失礼な態度をとらないで頂戴ね？」

シン「ああ、分かってる。」

トントントン

咲「お嬢様、咲夜です。お客様をお連れ致しました。」

？「入りなさい。」

咲「失礼致します。」

大きな扉が開き、その奥にいたのは…。

レミ「あら？博麗の巫女じゃないのね。私はこの紅魔館の主、レミリア・スカーレッツ

トよ。お前は？」

何だ、この雰囲気は。すごい威圧だ。今まで会った奴等とは次元が違うな。

シン「俺の名前は八神シンジ。普通の人間だ。」

咲「普通の人間は能力を持っていないと思うのだけど……。」

レミ「それに私の前に立って平然としてるなんて、只の人間とは思えないわ。」

一応普通の人間のつもり何だがな。

レミ「貴方みたいな人材を放置しておくのは勿体無いわ。どう？私の元で働くつもりはない？」

シン「……あんたの人柄や強さが分からない以上、あんたの下につく気はないな。」

レミ「じゃあ、私と戦い私が勝ったら貴方は私の僕になると言うことでどう？」

シン「だが、それでは俺にメリットが無いんだが。」

レミ「では、貴方が勝てば一つだけ言うことを聞いてあげるわ。」

シン「……いいだろう。その勝負、受けてやろう！」

レミ「フフ、気に入ったわ。必ず貴方を従わせて見せるわ。ついてきなさい、外でやるわよ。」

咲「(それでは、私は他の侵入者の相手をしに行きましょう。)」

パチエ「むきゅー。」

魔「何とか勝ったんだぜ。それじゃあ、ここにある使えそうな本を借りるんだぜ。」  
霊夢と別れた私は、ある魔法使いと戦い勝利した。

魔「あれ？こんなところに地下が？」

何か不気味だな…。

魔「だが気になるし、行ってみるか！」

少女移動中…

魔「何だこの扉？」

下まで行くと、大きな扉の前についた。

魔「取り敢えず入るか。」

そう言い扉を開けた。

ギギイ（扉の開く音

魔「あれ？誰も居ない？」

誰かいると思ったが誰も居なく、辺りには壊れた人形達が散らばっていた。

魔「あれは…棺桶？何故ここに棺桶が…。」

私は恐る恐る棺桶を開けてみた。しかし、中には何も入っていないかった。

魔「……ふう。」

私は安心した。たが……

? 「貴女はだあれ?」

魔 「っ!? 誰だ!」

後ろから声があった。私はそれを聞き振り向くと、そこには女の子がいた。

フラ 「私はフランドール・スカーレット。フランでいいよ。貴女は?」

魔 「私は霧雨魔理沙だぜ。お前は どうしてここに?」

フラ 「私はここに495年閉じ込められてるの。人形も簡単に壊れちゃうし、私に近づく人もすぐ壊れちゃうし:。」

危険な能力って事か:。だけど、こんなところに400年以上も幽閉するなんて間違っている!

魔 「なら、私が遊び相手になってやるよ。何がしたい?」

せめて少しは相手をしよう。

フラ 「ホントに!? じゃあね、弾幕ごっこ!」

魔 「弾幕ごっこか。私の得意分野だぜ。」

フラ 「じゃあ簡単に壊れないでね!」

——禁弾『スターボウブレイク』

魔 「っ!?!これは油断できないぜ。」

つづく……………んかなあ？

## 紅き月の夜

レミ「そう言えば聞いてなかったわね。貴方は何故ここに来たの？」

シン「この紅い雲を消して貰おうと思つてきた。」

レミ「雲ではないのだけれど……。私を倒すことができれば、この霧を消してあげるわ。」

シン「霧だったのか。まあ、そろそろ始めようぜ。」

レミ「ええ、そうね。今日はこんなにも月が紅いから、本気で行くわよ。」

レミリアから凄い威圧感が放たれる。正直結構キツイが、ここまで来たんだ、負けるわけには行かないな。

レミ「それじゃあ行くわよ！」

——紅符『スカーレットマイスタ』

くっ…弾幕が多すぎる。デカイのか小さいのどっちかにしろよ。

シン「ならば、俺も使うしかないか…。」

——謎符『ブラッディフォース』

俺の回りが紅く光る。そして…。

ズドーン

レミ「……意外に呆気なかったわね。拍子抜けだわ……。」

シン「それはどうかな？」

レミ「え？っ!?危ない！」

あれを避けるか……流石だな。

レミ「一体何をしたの？」

シン「簡単さ。さっき俺の発動したスペルは、俺の回りにバリアをはり、相手から受けた攻撃を倍にして相手に跳ね返すと言うことだ。」

まあ、跳ね返す時は直線的だから、あまり当たらないんだけどな。

レミ「かなり変わったスペルね。でもこれはどう？」

——神罰『幼きデーモンロード』

今度はカラフルなレーザだな。綺麗なスペルだが、こちらも負けるわけには行かないしな。

シン「次はこれだ。」

——星符『スターライトユニバース』

俺の目の前に魔方陣が展開され、星形のカラフルな弾幕がレミリアの弾幕を打ち消し

て行く。

レミ「っ!? これもあつさり突破しちゃうなんて…。貴方はホントに何者よ。」

シン「普通の人間……で納得してくれないか?」

レミ「ここまで私と戦える奴が普通の人間なわけないでしょ…。でも、次で終わらすわ!」

——神槍『スピア・ザ・グングニル』

デカイ真つ赤な槍を俺に目掛けて投合してきた。なら俺も取って置きのスperlを使わせて貰う!

シン「これで決着だ!」

——天裁『ジャツチメントレイ』

俺のスperlが発動されると、目の前から極太の白く輝くレーザーが一直線に放たれ、レミアのグングニルとぶつかり合う。

レミ「私のグングニルと互角!?!とことん企画外なのね!でも私は負けられないのよ!」

シン「それは俺も同じだ。だからこの勝負は…俺が貰う!」



先程までは50%位の力でやっていたが、流石にキツイので70%位に出力を上昇させた。

レミ「なっ!?!私のグングニルが!?!」

グングニルは消滅し、レミアに俺のスペルが直撃する。

ピチューン

シン「ふう、俺の勝ちだな。」

こうして俺の勝利で終わった。

霊「これで終わりよ!」

——霊符『夢想封印』

咲「しまった!?!」

ピチューン

私はこの異変の元凶と思われる奴の従者と勝負をし、勝利した。

咲「流石に強いわね。」

霊「そんなことより、貴女のご主人様の元に連れて行きなさい。早く異変を解決して

のんびりしたいんだから。」

咲「分かったわよ。でも、先客がいるわよ?」

霊「先客?」

こんなところに客なんて来るの? 一体何の目的で? まあ良いわ。私は異変を解決することが最優先なのだから。

少女移動中…

…私にはあり得ない光景を目にしている。何故なら…。

レミ「なっ?!? 私のグングニルが!?!」

ピチユーン

シン「ふう、俺の勝ちだな。」

謎の人間が元凶元、吸血鬼を倒してしまったのである…。

咲「っ?!? お嬢様!?!」

メイドは直ぐ様主の元へ向かって行った。

それにしても、彼は一体何者なの?

つづく………筈です。

## 狂気との対峙

シン「ふう……。これで異変は解決か……。」

やつと終わったな。少しやり過ぎたか？

咲「お嬢様!」

咲夜が戻ってきたか。ん？もう一人いるな。あれが例の博麗の巫女か？

レミ「咲夜……。ご覧の通り、無様に負けちゃったわ。」

咲「いいえ、無様なんかではありません。少なくとも私には立派に見えます。」

シン「ああ、俺が勝てたのはギリギリだった。」

レミ「ウソ仰い。私の推測ではまだ本気では無いのでしょうか？」

こいつ、意外に鋭いな。

シン「……さあな。」

霊「お話し中悪いんだけど、この霧を消してくれない？いい加減目障りなのよ。」

レミ「全く、失礼な奴ね。この霧の素晴らしさが分からないなんて。」

そう言い、レミリアは紅い霧を消した。今の時間帯は夜だから、吸血鬼も問題なく活

動できるな。

霊「そうだ。貴方に聞きたいことがあるのだけど。」

シン「大体予想はつくが、何だ？」

霊「貴方は一体何者なの？」

正に予想通りの質問だった。答えは一つしかない。

シン「……………只の人間だ。」

霊「……………そう。」

シン「今ので納得したのか？」

霊「これ以上問い詰めても答えは変わらないと思つたのよ。」

意外と冷静なのか？まあ、その方が此方も楽でいいのだがな。

レミ「そう言えば、貴方の望みは何？」

シン「望み？」

レミ「さつき言つたでしょう？私に勝てたら言うことを聞いてあげると。」

ああ、あれか。正直考えてなかつたから何でもいいんだが…。あ、あれにしようかな

？

シン「じゃあ、この館の執事にしてくれませんか？」

「「っ!?!」」

あれ？俺何か変なこと言つたか？

レミ「何故執事になろうと思ったの？」

シン「暇だからかな？」

咲「ずいぶんあっさりした理由ね。」

シン「そうか？」

霊「変わった人間ね。こんなお子様吸血鬼の下につきたいなんて…。」

レミ「誰がお子様よ！」

霊「あんたよ、あんた。」

何か口論を始めちゃったな。だけどその前に…。

シン「皆は待避している。中から何か凄まじい力を感じる。」

「「えっ?」」

そういった矢先、中から白黒の魔法使いのような少女と、紅い服を着た少女が出てきた。

魔「っ!?これならどうだ！」

——恋符『マスタースパーク』

フラ「残念だけど無駄だよ。」

——禁忌『レーヴァテイン』

紅い服を着た少女は、燃え盛る剣のような物で、魔法使いのような少女のスペルを打

ち消した。

魔「なっ!? 私のマスタースパークが!？」

フラ「あれ? もう終わり? まあ、少しは楽しめたからいいかな?」

ヤバイな、あのままじゃ死んじゃまうかもしれないぞ。仕方ねえ…。

——氷壁『ブリザードウォール』

俺のスペルにより、魔法使用のような少女の周りに氷の壁が出来、彼女を守った。

フラ「……貴方は誰?」

シン「俺は八神シンジ。只の人間だ。」

フラ「私はフランドール・スカーレット。この主、レミア・スカーレットの妹だよ。」

レミアに妹がいたのか。だが、この子からは悲しみのような何かを感じる。

レミ「やめなさいフラン! 早く地下室に戻りなさい!」

フラ「また……何だ。」

また?

フラ「また……私から自由を奪うんだ……。」

……自由。

フラ「私だけ……仲間外れにして……酷いよ……お姉さま……。」  
………俺と似ている。皆から突き放され、家族を失い、頼りに出来る友人もない。  
あるのは……孤独だけ……。孤独以上に……悲しい事なんてない。

シン「フランドールだったか？俺が遊んでやる。」

フラ「ホント!？」

レミ「やめなさい！危険すぎるわ！」

咲「そうですよ！例え貴方が強いとしても、流石に妹様には勝てませんよ！」

シン「こいつは、俺に似ている。だから、放っておくことなんて出来ない。」

フラ「ハハハ♪簡単には壊れないでよ♪」

シン「当たり前だ！」

こうして、俺とフランの戦いが始まった。

つづく？



## 心の奥に...

フラ「次はこれ！」

——禁弾『スターボウブレイク』

シン「くっ！」

——光符『ヘヴンズサンシャイン』

予想以上にフランドールは強い。もしかしたら、姉のレミアアよりも強いかもしれない。何とかして話を聞きたい、心の声を聞きたい。何とか救ってやりたい！

フラ「どうしたのお兄さん？もっと私を楽しませてよ！」

——禁忌『レーヴァテイン』

シン「これはさっきの魔法使いを倒したスペルか。」

炎の剣が俺の横をかする。かなり危なかった…。

フラ「へえ、今のを避けるんだ♪じゃあ次はこれだよ！」

——禁弾『カタディオブトリック』

シン「っ!?!何時になつたら収まるんだ…。」

このままではじり貧だ…。こうなつたらあのスペルを使って対話をするしかないか。

### 魔理沙 視点

スゲエ…。あの人間、フランの攻撃を簡単に避けてやがる。

レミ「凄いわね。まさかここまでなんて…。」

霊「只の人間じゃないわよね?」

咲「少なくとも普通の人間はあんな動きは出来ないわ。」

他の奴等も驚いてるぜ。それもそうだろうな。私も驚いているんだ。私や霊夢のよ  
うな人間ならわかるが、何処の誰だか知らない人間がフランと渡り合っているんだから  
な。

霊「そういえば気になつたんだけど、さっきフランが地下に閉じ込めたっていつてた  
けど何で?」

咲「……妹様の能力よ。」

霊「能力？」

咲「妹様の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』よ。」

魔「名前からして危なそうな能力だな。」

レミ「その通りよ。その名の通り、どんな物質でも壊すことが出来る能力よ。それだけじゃないわ。あの子は情緒不安定なのよ。だから自分の力を思い通りに操作出来ないのよ。」

魔「だからって地下に閉じ込めるのは間違ってるぜ！他に方法は無かったのかよ！」

レミ「……無かったわ。いいえ、思い付かなかったわ。」

咲「お嬢様……」

くそ！一体どうしたら……。!?あれは！何をしようとしているんだ、あいつは！

シンジ 視点

仕方が無い、あのスペルを使うか……。

シン「おい、フランドール。」

フラ「？何？」

シン「今からお前の記憶と心を読ませてもらう。少し苦しいかも知れないが我慢してくれよ?」

フラ「? 一体何を言ってるの?」

——追憶『心と記憶の陰』

フラ「っ?! 何……これ……? あたまたが……いた……い!」  
もう少しだ、我慢してくれ!

……見えた!

・ ・ ・ ・ ・

レミ「お父様! 私の妹が産まれたってホント!」

父「ああ、本当だ。ほら、可愛い女の子だろ? な? 母さん。」

母「ええ、元気に泣いてるわ。ホント、レミリアにそっくりね。」

フラ「オギヤー！オギヤー！」

……これはフランドールの産まれたときの記憶か。

レミ「フラン、お父様が貴女に話があるんですって。」

フラ「私に？何だろう？」

少し成長した頃か。

レミ「お父様、フランを連れてきました。」

父「来たか、フラン。」

フラ「私に話って何？お父様。」

父「……実は、お前の能力について詳しくわかったんだ。」

フラ「私の能力？」

父「ああ、お前の能力は危険すぎる。このまま放置しておく、私達にまで危険がおよぶ可能性がある。よって、地下室に幽閉させてもらう。」

フラ「……え？嘘でしょ？お父様！嘘だと言ってよ！」

父「……決定事項だ。」

フラ「そんな……。お姉様も何とか言つてよ！」

レミ「……………」

フラ「お母様！」

母「……………（首を横に振る）」

フラ「……………皆……………」

……………生まれついた能力の性で皆から裏切られ、信じられるものもいなくなる……………か。何処と無く俺に似ているな……………。

フラ「ハアハア……………何だったの？今のの？」

シン「……………そうか、お前はそんなに苦しんでいたんだな。お前の気持ち……………よくわかるよ。」

フラ「ふぎけないで！貴方に私の気持ちかわかるわけ……………」

シン「……………わかるさ。」

フラ「…え？」

シン「だから、お前は好きナだけ俺を痛め付けければいい。恨みをはらせばいい。自分

の気が済むまでな。」

フラ「っ!？」

俺は構えるのをやめた。フランドールの攻撃を全て受け止めるつもりだ。

フラ「な、なめないで！」

——禁忌『カゴメカゴメ』

シン「ぐあ！」

フランドールのスペルが当たると同時に、俺の左腕が消し飛んだ。

フラ「っ!？あ、ああ……。」

シン「……楽しいか？傷つけるのが、壊すのが。」

フラ「うっ、何、この気持ち？目の周りが熱い。」

フランドールの目からは、涙が流れていた。

シン「お前は本当はこんなことしたくないんだろ？皆と仲良くしたいんだろ？」

フラ「う、うん。でも、皆私から離れていつちやうの……。私が怖いから……。化け物だ

から……。」

シン「例え周りが受け入れなくとも、俺はお前を受け入れる。」

フラ「え？」

シン「俺も昔はお前みたいだった。だからお前の気持ちはよくわかる。どんなことがあつてもお前を守る。必ずだ。だから、今は好きにだけ泣いていい。」

フラ「う、ズズー、うわああああああああああああん！」

この時、俺のもう一つの能力が発動されていた事は、あとから知らされることになる……。

レミリア 視点

……驚いたわ。まさかフランを大人しくさせるなんて。

魔「おい、これって……。」

霊「あのフランって奴の狂気が消えてるわね。」



咲「まさか……こんなことが……。」

レミ「でも現実よ。目の前でその光景が写ってるんだもの。」

フツ、まさか普通の人間にフランを大人しくさせることが出来るなんてね。少し悔しいけど、あの男には感謝しなければならぬわね。

続く………と思うか？

## 解決

フラ「うう…グス…。」

シン「落ち着いたか？」

フラ「……うん。」

あれから30分くらい、フランドールは泣き続けた。

シン「さあ、皆の所に行こう。俺の…俺達の仲間を紹介してやる」

フラ「うん！」

そして、皆の前にゆっくり移動した。

レミ「貴方には礼を言わなきゃね。ありがとう。」

シン「俺は大したことはしてない。自分のやりたいことをやっただけだ。」

魔「そう照れるなって！」

シン「……礼を言われるのには慣れてないんだ。」

咲「そうゆうときは素直に受け取っておけばいいのよ。」

シン「……そうか。」

何だか嬉しいな。前の世界ではあんまり無かったからな。

シン「それより、フランドールに皆のことを紹介してくれ。」

フラ「私の事はフランでいいよ！」

シン「……ああ、わかった。じゃあ俺は……。」

フラ「お兄様って呼ぶね！」

シン「……え？」

フラ「私に優しく接してくれたからお兄様！」

シン「あ、ああ。俺は構わないが……。」

そう言い、俺はレミリアの方を見る。

レミ「別に良いんじゃないかしら？少し悔しい気持ちはあるけれどね。」

フラ「わーい！えへへ♪お兄様〜！」

そう言うと、フランが思い切り抱きついてきた。さつきとはえらい変わりようだな。

霊「取り敢えず、私から自己紹介させてもらおうわよ。私は博麗霊夢。博麗神社で巫女

をやらせて貰ってるわ。」

ってことはコイツが博麗の巫女か……。確かに適当そうな雰囲気だな。

霊「何か失礼なことを考えなかった？」

シン「気のせいだろう。」

コイツはエスパーか？

魔「私は霧雨魔理沙だぜ！普通の魔法使いだぜ！これからよろしくな！」  
明らかに女性なのに男口調も混じってるな。

咲「私は十六夜咲夜と申します。この紅魔館でメイド長を勤めさせて頂いており  
ます。これから宜しくお願い致します。」

メイド長つて言うだけあつて丁寧だな。まあ、そうじゃないと勤まらないかもな。

レミ「言う必要は無いかもしれないけど、私はレミリア・スカーレット。フランの姉  
であり、紅魔館の主よ。」

シン「俺は八神シンジ。普通の人間だ。今日からこの館の執事をする事になった。  
これから宜しく頼む。」

レミ「ええ。でもその腕は大丈夫なの？片手が無かったら何もできないでしょ？」

フラ「あつ……。」

シン「何だその事か。心配すんなフラン。」

そう言いフランを撫でて落ち着かせた後、俺の能力を使い腕を再生させた。……つて  
言うか、こんなことまで出来るんだな。

シン「よし、こんなもんか。皆どうしたんだ？」

レミ「……貴方、本当に人間？」

シン「？ああ、そうだが？」

霊「普通の人間はこんなこと出来ないのだけれどね…。」

魔「お前には勝てる気がしないぜ。」

咲「私もお嬢様も勝てなかったですしね。」

フラ「お兄様すごい!!」

フランは目を輝かせてこつち見てるし、他のメンバーは…まあ言わなくてもわかるだろう。

シン「…そんなことより、俺の部屋つてあるのか？あるなら案内してほしいのだが。」

レミ「ええ、ちゃんと用意してるわよ。」

…：…最初から俺を執事にするつもりだったのか。

少年少女達移動中…

レミ「ここよ。」

俺の部屋まで見事に真っ赤だな。

レミ「取り敢えず、今日はゆっくり休みなさい。服はこちらで用意させるから。」

シン「ああ、了解した。」

フラ「じゃあね、お兄様！」

シン「ああ。また明日な。」

霊「私たちも泊まらせてもらうわよ。」

レミ「……勝手にしなさい。」

シン「……………行つたか。もうそろそろ出てきてもいいんじゃないか？紫さん。」

紫「あら？気付いていたの？」

シン「ああ、一応異変は解決したがこれでいいのか？」

紫「ええ、助かったわ。でも貴方があそこまで強かったなんて…。予想外だったわ。」

シン「……………そうか。もう知っていると思うが、俺はここで執事をするこゝになつた。別に構わないだろう？」

紫「ええ、貴方の好きなようにしてもらつて構わないわ。じゃあ私は失礼させてもらうわね。」

紫はそう言うと、スキマの中に消えて行つた…。

シン「……………寝るか。」

俺はベッドに横たわり、眠りについた…………。

## 初仕事

シン「ふあゝ。もう朝か……。」

今日から執事の仕事だったな。てゆうか、これからどうすればいいんだ？

咲「あら、起きていたのね。」

シン「ああ。俺はこれからどうすればいいんだ？」

咲「取り敢えず、この執事服に着替えてちょうだい。そのあと、直ぐに仕事に移るわ。」

シン「……分かった。」

早速仕事か……。気を引き締めるか。

少年着替え中……

シン「着替えました。最初の仕事は何ですか？咲夜さん。」

咲「……………」

シン「どうなされたのですか？」

咲「い、いえ！何でもありません。（言えない……。見とれていた何て絶対に言えない……）」

……どうされたのでしょうか？

咲「そ、それはそうと、その口調はどうしたの？」

シン「執事をするにあたり、先ずは形からと思ひまして。」

咲「別に気にしなくてもいいのに……。」

シン「いえ、こう言うのはちゃんとしておかないといけませんから。」

咲「意外に凝り性なのね……。じゃあ、貴方は料理を作つてちょうだい。私はお嬢様達を起こしてくるわ。」

シン「畏まりました。」

吸血鬼なのに早起きなのですか……。何か矛盾してるような気がします。まあいいでしょう。さて、何作りましょうか？

数分後……

シン「よし、こんなもんでいいでしょう。確かにピングはあちらでしたね。」

少年移動中……

シン「おはようございます。お嬢様、霊夢様、魔理沙様。お食事を用意致しました。」

レミ「ええ、おはよう。咲夜の言つた通り、かなり似合つてるわね。」

シン「ありがとうございます。」

霊「この料理は貴方が作つたの？」

シン「はい。外の世界にいたときは、自分で料理をしていましたので多少は作る事が



出来ます。」

魔「おっ！このスープメチャクチャ美味いぜ！」

霊「ホントね！こんなに美味しいスープは生まれて初めてよ！」

シン「お褒めに預かり恐縮です。」

レミ「……貴女達は少しは遠慮しなさい。」

ガチャ

フラ「お兄様♪」

シン「おっと。フランお嬢様、いきなり飛び付いては危険ですよ。」

フラ「は〜い。それより私には呼び捨てで呼んでよ♪」

シン「いえ、しかし、私は執事という立場ですし……。」

フラ「むー。じゃあ、命令！お兄様は私を呼び捨てで呼ぶこと！」

シン「……わかりました。ご命令とあらば従わせて貰います。」

フラ「うん！」

咲「妹様も変わりましたね。」

レミ「ええ、嬉しい事だわ。」

シン「今食事の準備ができていますので、冷めない内にお召し上がり下さい。」

フラ「は〜い！」

シン「咲夜さんもどうぞ。」

咲「ふふ、ありがとう。それではいただきますわ。」

フラ「いただきます〜す！」

少女達食事中…

レミ「ふう…：：：美味しかったわね。咲夜といい勝負なんじゃないかしら？」

咲「そうですね。もしかしたら、私よりも上かもしれないね。」

フラ「美味しかったよ！お兄様♪」

シン「ありがとうございます。」

霊「じゃあ、私たちはそろそろ帰ろうかしらね。」

魔「そうだな。美味しい飯も食ったしな！」

咲「出口はこつちよ。ついていらつしやい。」

霊「じゃあまたね。異変を解決してくれてありがとう。」

魔「じゃあまたな！」

そう言うと、霊夢さんと魔理沙さんは帰っていった

シン「お嬢様、私はこれから何をすればいいのでしょうか。」

レミ「そうね……。特に縛っているつもりはないから、自分の好きなように仕事をしてもらって構わないわ。」

シン「……畏まりました。」

とは言ったものの、目的が無いのが一番困りますね……。

フラ「じゃあ、私と一緒に散歩しようよ！」

シン「散歩ですか？」

フラ「うん！私地下にずっといたからあまりよくわかってないんだよね……」  
成る程。そうゆうことでしたか……。

シン「分かりました。お供いたしましょう。」

フラ「やったー！」

レミ「外に出るときは太陽に気をつけて頂戴ね？」

シン「承知いたしました。」

フラ「お兄様♪はやくいこ♪」

シン「はい。」

次回へ続く！

## ヴワル魔法大図書館

レミ「ふふ、あんなにも仲がいいと本当の兄弟みたいね。」

羨ましいわね。私にはやつと心を開いてくれたと思つたのにな。

……私のせいなのだけれど。

それにしても、執事姿のシンジってかなりかつこいいわね。……べ、別に惚れたとかじゃないんだからね！……って私は誰と話しているのかしら。

シン「さて、先ずは何処に行きましようか？」

フラ「えつとね……じゃあ図書館って所！」

成る程。確かあそこにはパチュリー様がいらつしやいましたね。場所はフランの部屋（地下室だが、今は咲夜さんの力で女の子っぽい部屋に改装済み。）の近くでしたね。

シン「分かりました。それでは参りましょうか。」フラ「うん！」  
少年少女移動中…

シン「失礼します、パチュリー様。」

パチエ「あら？確か貴方は……。」

シン「昨日は大変失礼いたしました。今日から紅魔館で執事をさせていただくことになりました、八神シンジです。」

パチエ「ああ、そう言えばレミイがそんなことを言っていたわね。まさか貴方だとは思わなかったけれどね。」

フラ「えつと……貴女は？」

フランが私の後ろに隠れながら聞く。地下から出たことがないから初めて会ったのでしようね。

パチエ「妹様？……大丈夫なの？」

シン「はい。今では狂気は完全に無くなっていますので。」

パチエ「そう、私はパチュリー。この『ヴワル魔法大図書館』を管理しているわ。」

こあ「パチュリー様！本の整理が一通り終わりました！」

パチエ「そう、じゃあ次はこれをお願いね。」

こあ「ちよ！30冊ぐらいあるじゃないですか！」

図書館の奥から頭に悪魔の羽みたいなのが生えている少女が出てきた。どうやらパチユリー様の雑用係みたいな方のようですね。

こあ「あれ？見かけない方々ですね。」

シン「私は八神シンジと申します。今日から執事をさせていただきますことになりました。宜しく願います。」

フラ「私はフランドール・スカーレットだよ！レミア・スカーレットの妹だよ！」

こあ「私は小悪魔です！パチユリー様に仕えています。気軽に『こあ』と呼び下さい。」

シン「はい。分かりました。」

パチエ「それで？此処に何か用なの？」

シン「いえ、ただフランと散歩をしていまして、目的地が此処だっただけです。」

フラ「本がいつぱいあって目が回りそうだよ…。」

パチエ「まあ、此処には魔法関連の本か、外の世界からきた本くらいしかないもの。」

魔法の本ですか……。少々興味がありますね。

シン「では暇が出来たときによらせて貰っても宜しいでしょうか？」

パチエ「ええ、構わないわよ。」

フラ「お兄様。そろそろ次に行こ。」

シン「はい、分かりました。それでは失礼します。」

フラ「またね！」

……コアさんが本の下敷きになっていましたが……気のせいでしょう。

へべく………間違えた、つづく！



## 友達

続いて私たちは紅魔館にある庭へやって来た。

フラ「うわー、すごーい！」

目の前には大きな花壇があり、フランは目を輝かせていた。

シン「よく手入れがされていますね。誰の趣味でしょうか？」

美「おや？ 貴方は確か……」

あの方は確か昨日戦った門番の方ですね。

シン「昨日は大変失礼いたしました。私は八神シンジ。これからは執事をさせて頂くことになりました。こちらはフランドル・スカーレット。お嬢様の妹さんです。」

美「あつ、あの時の方ですか。これから宜しくお願ひします。それにしても、お嬢様に妹がいるなんて初耳ですね。私は紅美鈴です。宜しくお願ひ致します、妹様。」

フラ「うん！ 宜しくね、美鈴！」

シン「ところで、この花たちは誰が世話をしているのですか？」

美「ああ、それは私です。門番ばかりしていると暇なので、昼寝したり花の世話をしたり昼寝したり昼寝したり……。」

ほとんど昼寝じゃないですか……。

フラ「美鈴すごいね！こんなにお花たちがキレイに咲いてるもん！」

シン「確かにそれはすごいですね。……あと後ろには気を付けた方がいいですよ。」

美「……………えっ？」

咲「ほう……、仕事をサボって寝るなんていい度胸ね。」

美「さ、咲夜さん!? 何時からそこに!!」

咲「さあ？サボり魔に言うことはないわね。そんなことよりも美鈴？覚悟は出来てるかしら。」

美「ちよ！まつ！シンジさん助けて！」

シン「……………行きましようか、フラン。」

フラ「はい！」

美「……………見事なスルースキルです（ピチューン）」

その後、紅魔館の庭にはナイフで串刺しにされた美鈴さんだけが残されたのだとか……………。

庭を後にした私たちは、近くの湖の畔にきていた。

シン「中々キレイな所ですね。」

フラ「これが湖かく。広くてキレイな所だね！」

フランも喜んでくれているようですね。……なんか寒くなってきましたね。

チル「ん？誰だお前は？」

……どうやらあの時の妖精さんのようですね。

チル「分かった！サイキョーのあたいに挑戦しにきたんだな！」

おや？私のことを忘れてるようですね。試しに頼んでみますか。

シン「いえいえ、私たちは貴女方とフランを遊ばせようと思い、此処にやって来ただけですよ。」

チル「あ、そうなの？じゃあ遊ぼう！」

フラ「いいの？お兄様？」

シン「ええ、いい機会ですから弾幕ごっこ以外の遊びを覚えて、友達を作りましょう。」

フラ「はーい！じゃあ遊ぼう！」

チル「仕方ないわね！大ちゃん！みんなー！新しい友達がきたよー！」

ふふ、微笑ましいですね。やっぱ子供は仲良く遊ぶのが一番ですね。……私より歳上ですが……。

それから私は、フランたちが遊び終わるまで見守っていた。

つづくおー（w、）

## 宴会へのお誘い

フラ「またねえ！」

大「うん！」

チル「また遊ぼうね！」

どうやら遊び終わったようですね。今は昼前ですか……。恐らくフランは寝る時間なのでは無いでしょうか。

シン「どうでしたか？楽しかったですか？」

フラ「うん！いろんな遊びを教えてもらったよ！かくれんぼとか鬼ごっことか！」

シン「それは良かったですね。」

フラ「でも疲れたから眠くなっちゃった……。。」

シン「そうですか……。では早めに帰りましょうか。」

フラ「うん！」

私たちは紅魔館へと向かおうとしたとき、見覚えのある人物がいた。

魔「おっ？シンジとフランじゃないか！」

シン「魔理沙さんでしたか……。どうされたのですか？」

魔「いや、家に帰ろうと思ったんだが、この辺りに珍しいキノコがあったから少し採取してただ。」

………キノコなんて何に使うのでしょうか。

フラ「そのきのこ何に使うの？」

魔「ちよつと実験でな♪つとそうだ！明日異変解決の記念に博麗神社で宴会を開くから来てくれよ！」

シン「宴会ですか？それはまたどうして……。」

魔「異変解決の記念に言っただろ、じゃあまたな！」

そう言い、魔理沙さんは凄い勢いで飛んで行ってしまった。

フラ「行っちゃったね」

シン「一体なんだったのでしょうか……。まあ、一度帰りましょう。」

フラ「ハイ！」

一先ず紅魔館に帰ることにした。

少年少女移動中…

あれ以降、特に何事もなく紅魔館へと辿り着いた私は、フランを寝かせて休憩をしている。

咲「お疲れ様です。」

咲夜さんが紅茶を淹れてくれた。

シン「有り難う御座います、咲夜さん。」

咲「どうでしたか？ 妹様の様子は…。」

シン「問題はありませんでした。それにお友達が出来ましたしね。」

咲「そうなんですか！ それはよかったです。」

シン「あつ、それと帰る途中に魔理沙さんと出会って、明日博麗神社にて宴会を開くのだそうです。」

咲「宴会ですか？ わかりました。では、私がお嬢様に伝えておきます。」

シン「宜しくお願いします。では私も休憩をしたら、仕事の方に戻ります。」

咲「はい。お昼御飯は私が作っておきましたので、お腹が空いていたら食べてください。」

シン「すみません。では、有り難く頂いておきます。」



咲「いえいえ、ではまた後程…。」

そう言うのと、咲夜さんは姿を消した。能力を使ったのでしょよね。

シン「では、咲夜さんが作ってくれた料理を頂きましょうかね。」

少年食事中…

かなり美味しかったですね。流石メイド長ですね。3つ星どころか5つ星レベルの料理でした。

さて、後は掃除でもして時間をつぶしましょうかね。

少年掃除中…

……疲れました。紅魔館が広すぎて三人の分身を作っても三時間近くかかりました。

……四〇の拳ではありませんよ？

シン「さて、晩御飯でも作りましょう。」

後は特に何事もなく一日が終わった。

ツツク!!

## 取材

レミ「さあ、宴会会場に行くわよ！」

フラ「おー！」

……お嬢様方はノリノリですね。特にレミアお嬢様は何時ものカリスマが感じられないのですが…。

咲「お嬢様、そんなに慌てなくても神社は逃げませんよ。」

パチエ「私は行きたくないのだけれど……。」

咲夜さんは何時も子守りみたいで大変ですね。パチユリー様はパチユリー様で、図書館から出たくないようですけど……。あれを差し上げておきまじょうか。

シン「パチユリー様、少々宜しいでしょうか？」

パチエ「ええ、何かしら？」

シン「こちらのお守りをお持ちください。」

パチエ「？これは？」

シン「私の能力で作った、喘息などの症状を楽にする効果があります。」

パチエ「そうなの？わざわざ悪いわね。」

シン「構いませんよ。これが私の仕事ですから。」

レミ「何してるのよ、パチエ！シンジ！モタモタしてると置いていくわよ！」  
全く、お嬢様は落ち着きがないのだから……。

パチエ「少しは落ち着きなさいよ、レミイ。」

私たちはワイワイ言いながら、博麗神社に向かった……。

ホント、今日も忙しいわねえ。何で宴会なんてしなきゃいけないのかしら？しかも、誰もお賽銭を入れるわけでもなく、ただ楽しんで散らかすだけだし……。

魔「どうしたんだ？霊夢？」

霊「別に何でもないわよ。ただこの後『一人で』片付けなきゃいけないと思うと、泣

きたくなるだけよ。」

魔「そ、そうか。今日の霊夢はなんか怖いぜ。」

霊「なにか言った？」

魔「な、何でもないぜ」

はあ、溜め息しかでないわ。

文「清く、正しく、射命丸です！」

……またメンドーなのが来たわね。

文「と言うわけで霊夢さん！今回起こった異変についてお話を伺いたいのですが！」

霊「メンドーだからパス。」

文「ちよ！メンドーだからって、それでも巫女ですか!?!」

霊「ええ、巫女よ。それに今回のことは私よりもうすぐ来る『人』に聞いた方が良いわよ?。」

文「えっ?」

ん？あれが博麗神社のようですね。

フラ「宴会ってどんなことするのかなあ？」

レミ「思いつきり楽しむわよ！」

ホント、レミリアお嬢様のカリスマが感じられないのですが……。

でも、私もこんなイベントに参加するのは初めてなので楽しみですね。

私たちは、静かに博麗神社の前に降りた。

霊「ほら、今来たのが異変の首謀者よ。」

文「なるほど、そうだったのですか！では行って参ります！すみませくん！」

シン「ん？貴女は？」

文「私は『文々。新聞』の射命丸文と申します。早速ですが今回の異変について少し取材をさせていただいても宜しいでしょうか？」

シン「私は構いませんが……お嬢様方はどうしますか？」

レミ「早く終わるなら構わないわ。」

フラ「お姉様がいいなら私も良いよ！」

咲「私も問題ございません。」

パチエ「貴方のくれたお守りのお陰で体調も問題ないから構わないわよ。」

シン「…だそうですね。」

文「ありがとうございます！ではまず、異変の首謀者は誰ですか？」

レミ「それはこの私、レミリア・スカーレットよ。」

文「そうですね。では他の皆さんも協力者と言うことですか？」

咲「いえ、こちらのシンジさんは協力者ではなく解決者です。」

文「え!?でも見た感じ人間ですよ!?どうやって解決されたのですか？」

シン「それは……」

少年説明中…

文「成る程、そんなことがあったのですか…。それで執事服を着ているのですね。」

シン「ええ、そう言うことです。」

文「いやー、これはいい記事が書けそうですね！早速帰って原稿を仕上げなければ！では、楽しみにしていてくださいねえ!!」

そう言うのと、文さんは物凄い勢いで飛んでいった。宴会に参加しないのですね……。

フラ「す、凄い勢いだっただね。」

パチエ「あんな感じのスピードをどこかで見たことがある気がするのは気のせいかしら？」

私は取り敢えず嫌な予感がするのですが……。まあ、今は気にしても仕方ありませんね。そんなことよりも、宴会を楽しみましょうか。

まだだ、まだ終わらんよ！



## 宴会と後片付け

私は今、宴会を楽しんでいる。

シン「この唐揚げ美味しいですね。誰が作ったのですか？」

霊「ああ、それは私が作ったわ。」

ふむ、霊夢さんでしたか。意外と料理が上手いんですね。

魔「私が作った玉子焼きも食べてくれよ。」

シン「では、頂きましょうか。」

うむ、これも美味しいですね。

シン「とても美味しいですよ、魔理沙さん。」

魔「ホントか！嬉しいぜ！初めて料理を作ってみたが、結構楽しいもんだな！」

初めてでこの腕ですか。これは将来が楽しみですね。

シン「では、私も作ってきたのでどうぞ食べてください。」

魔「ホントか！シンジの料理は美味かったからな！メチャクチャ嬉しいぜ！」

霊「今まで宴会で料理を持ってきた奴はいなかったから嬉しいわ。私も遠慮なく頂く

わよ?」

魔「つとそうだ!もう一人友人が来ているんだがソイツも呼んで構わないか?」

シン「ええ、食事は皆で食べた方が美味しいですから。」

魔「サンキュー!おーい!アリスー!!」

アリ「何?魔理沙。」

魔理沙さんが名前を呼ぶと、金髪の可愛らしい女性がやって来た。

アリ「あら?貴方は初めて見る顔ね。今回の異変の関係者かしら?」

シン「はじめまして。私は八神シンジと申します。今はレミリアお嬢様の元で執事をさせていただいております。」

アリ「ああ、例の異変を解決したっていう人間ね?話は魔理沙から聞いているわ。私  
はアリス・マーガトロイド、一応魔理沙の友人よ。」

魔「ちよ!一応ってなんだぜ!」

アリ「だって何時も私を連れ回してるのは貴女でしょ?しかも半ば強引に…」

魔「うぐ、反論できない……」

……アリスさんも苦労人なのです。気持ちは分かりますよ。

霊「ハイハイ、漫才はもういいからシンジが作ったご飯でも食べたら?」

魔「漫才ってなんだぜ!？」

アリ「そうね、じゃあ少し頂こうかしら。」

魔「……無視ですか？」

シン「ええ、遠慮なくどうぞ食べてください。」

そう言い、アリスさんと霊夢さんは私の料理を口にした。……魔理沙さんは少しそつとしておこう。

アリ「……驚いたわ。こんなに美味しい料理は初めてよ？」

霊「相変わらず美味いわね？」

シン「お褒めに預かり恐縮です。」

こうして私たちは、互いの料理を絶賛しあいながら楽しんだ。

……魔理沙さんは暫くしたら元に戻っていた。

私は今、お兄様と別れてチルノたちと遊んでいる。

大「今から何する？」

チル「かくれんぼしよ！かくれんぼ！」

ルミ「チルノは本当にかくれんぼが好きなのかー」

この語尾を伸ばした金髪の子はルーミア。どうやら語尾を伸ばしてしまう癖があるらしい。

レミ「何故私までこんなことを……」

お姉様はチルノたちに強制参加させられたみたい……。まあ、私もお姉様と一緒にの方が楽しいんだけどね♪

因みに、咲夜は少し離れたところから私たちを見守っていて、パチュリーは日陰でお兄様が用意してくれたお弁当を食べながら本を読んでいるよ♪

えっ？私たちが太陽の下にいても大丈夫なのかって？お兄様の用意してくれた特製の日焼け止めクリームを塗ったら、全然大丈夫だったよ♪本当にお兄様は凄いや♪

フラ「じゃあかくれんぼ始めよっか♪」

「「「おー！」」」

そうして私たちは遊び始めた。友達ってこんなに良いものなんだね♪

実際、お姉様はとってもノリノリで参加してたよ？なんか、『ぎゃおー！』とか叫んだ

り、何故か本気出したりと……。見物してた咲夜も苦笑いしてたしね。でも私は楽しかったからいいや♪

ん？もうこんな時間ですか？時が過ぎるのは早いものですね。

霊「さてと、そろそろ片付けなきやいけないわね。」

一人で片付けるおつもりなのですかね？それでは…

シン「私もお手伝いさせて頂きます。」

霊「え？いいの？」

シン「ええ、構いませんよ。食事もいただきましたし、つとそうだ。忘れてましたね。」

霊「？」

神社に来たらお決まりのアレをしませんとね。

シン「千円くらいいいでしょう。」

霊「え!?まさか!」

?何を驚いているのでしょうか?私はただお賽銭をいれただけなのですが?

魔「……初めてみたぜ。霊夢のお賽銭に金入れた奴……。」

アリ「明日は雪が降るのかしらね?」

霊「シンジ!貴方っていい人ね♪」

……何時も酷いのでしょうか?

シン「……そんなことより、後片付けをすませましょう。」

霊「そうね♪さあ、張り切るわよ!」

先ほどとはテンションの差が明らかに違いますね。まあ、喜んでくれたようで何よりです。

ふふ♪ついにお賽銭が入ったわ!しかも何時も一人でやってる片付けも手伝ってくれるみたいだし、今日は良いことばかりね♪

シン「では、私は食器を洗っておくので、霊夢さんは境内の掃除をしていてください。」

霊「分かったわ。」

あつ、因みにレミリアや他の皆はすでに帰ったわよ？時間が飛びすぎ？気にしない気にしない♪

……それにしても、食器を洗うって一杯あるのに一人でできるのかしら？多分二時間くらいかかるんじゃないかしら？

取り敢えず、私は掃除の方に専念させて貰おうかしら……。

少女清掃中……

シン「食器洗いは終了しました。」

霊「はやっ!?まだ30分位しかたつてないわよ!?!」

シン「まあ、慣れてるからとしか言いようがありませんね。」

それにしても早すぎでしょ……。全く、とことん人外ね。

シン「お茶を用意させていただきましたので、後は私にお任せください。」

霊「あ、ありがとう。」

……これからは人間と思わないようにしましょう。

数分後……

それにしてもシンジって顔綺麗よねえ。髪にも艶があつて羨ましいわ。

霊「……それに、カッコいいし。(ボソツ)」

シン「?何か仰いましたか?」

霊「い、いえ。何でもないわ。」

間違つて声に出してたわ。これから気を付けないとね……。

さらに数分後……

シン「ふう……終わりましたよ? 霊夢さん。」

霊「ええ、ありがとう。今度お礼しなくちゃね。」

シン「気にしなくていいですよ。私は私がしたいことをしただけですから。」

霊「なら今度は、私が私の好きなことをやらせてもらうだけよ。」

シン「そうですね。それでは楽しみにさせていただきますよ。では私はこれで失礼させていただきます。」

霊「今日は本当にありがとう。また何時でも来てちょうだい。歓迎するわよ?」

シン「その時は是非。ではまた。」

そう言い残すと、シンジは紅魔館へと向かつて飛んでいった。

霊「あんな人材、レミリアには勿体無いわね。さてと、そろそろ寝ましようかね?」

そして私は自室に戻り、眠りについた……



続  
く  
ん  
だ  
ぜ  
!

## 変な噂

シン「人里に買い出しですか？」

咲「ええ、お嬢様が飲まれる何時もの紅茶が切れそうなのよ。」

紅茶ですか……。確かにいつも飲んでらっしゃいますし、何よりも美味しいですね。私も時々いただきますし……。

シン「分かりました。行つて参ります。」

咲「ありがとうございます。これが紅茶代と人里の地図よ。そのお金で買えるだけ買つてきてください。」

シン「承知致しました。」

少年移動中……

さて、取り敢えず人里には着きましたね。肝心の店は……あちらですね。

「ねえねえ！あの人つてもしかして！」

「ホントだ！」

？何か視線をかんじるのですが……気のせいですかね？

そんなことを思いながら例の店で紅茶を購入した。

シン「さてと、用事も済みましたし、そろそろ帰りますか。」

そろそろ帰ろうかと思っていたところ、一人の女性が大荷物を抱えていた。

？「つしよつと、やっぱり重いな……。」

シン「あのお、手伝いしましょうか？」

？「ん？ shouldn't. 助かるよ。」

シン「いいえ、構いませんよ。」

私は見知らぬ女性の手伝いをした。女性が困っているのに無視などは出来ませんか  
らね。

？「すまない、助かったよ。良ければ名前を教えてくださいませんか？」

シン「私は八神シンジといます。紅魔館という所で執事をさせていただいております。」

慧「私は上白沢慧音だ。それよりシンジと言ったな？」

シン「はい、それが何か？」

慧「もしかしてこの新聞に載ってる人物なのかと思ってるな。」

なんででしょう……凄まじく嫌な予感がするのですが……。

く文々。新聞く

以前謎の紅い霧が起きた異変を解決したのは何と博麗の巫女ではなく、謎の青年だった！しかもその青年は異変を起こした張本人、吸血鬼を打ち負かし、館の執事をしていった！

それだけではなく、沢山の女性に囲まれ正にハーレム状態！この青年は「ハーレム計画」を企んでいるのか！その青年名前は八神シンジ。容姿は銀髪で眼は蒼く透き通った綺麗な瞳であり、白い美肌を持つ綺麗な青年であった。恐らく、誰が見てもイケメンと呼ばれるだろう。

……何ですか？これは…

慧「カラス天狗の奴がまた捏造記事を書いたようだな。何時もの事だから誰も信じてはいなかったが……美形であることは確かかもな。」

シン「……今日は焼き鳥にしましょうかね？」

慧「まてまて、誰も信じてはいないから安心しろ。それよりも、手伝ってくれた礼をしたいのだが……。」

シン「その事については別に構いませんよ？私は私のしたいようにしただけですから。」

慧「しかし……いや、相手の折角の厚意を断つたりしたら悪いな。」

シン「そういう事ですよ。」

慧「すまないが、もう一つ頼みがあるのだが……。」

シン「ん？何ですか？」

慧「私はここで寺小屋をしているのだが、一人では少々キツイものがあつてな……暇な時でいいのだが私の寺小屋を手伝いに来てくれないか？」

シン「ええ、承知致しました。」

慧「何から何まですまないな。では今日は帰るといい。執事としての仕事が残っているのだろうか？」

おっと、そうでした。そろそろ帰らなければいけませんね。

シン「では、そろそろ帰らせていただきます。また今度会いましょう。」

慧「ああ、またな。」

私は別れを告げると、紅魔館へと戻ることにした。

少年帰宅中……

そんなこんなで、無事に紅魔館に到着。

シン「ただいま戻りました。」

咲「あら、意外に遅かったですね？何をされていたのですか？」

シン「ちよつと人の手伝いをしていただけですよ。気にしないで下さい。」

咲「そうだったのですか。あつ、そう言えばお嬢様が何か用事があったと言っていましたよ。」

シン「お嬢様が？分かりました。では行ってきます。」

私に用事とは一体なんでしょうか…。

次回を待つがいい！

く妖々夢編く

新たな異変の兆し

私はお嬢様に呼ばれて、お嬢様の私室の前にいる。

トントン

レミ「シンジ？開いてるから入っていいわよ。」

シン「失礼します、お嬢様。私にご用と言うのは何ですか？」

レミ「貴方のこれからの運命が気になったから少し覗いてみたの。そしたら、もうすぐ起きる異変に貴方も関わることになるというのが見えたの。」

シン「次に起こる異変？それは一体……。」

レミ「そこまでは分からないわ。でも一つ気になることがあって……。」

シン「気になること？」

レミ「ええ。何故か途中で黒いモヤが掛かったみたいになってその先の運命が見えなくなってしまうの……。」

黒いモヤ？少々気になりますが嫌な予感がするのは確かですね。

シン「分かりました。つまりは気を付けて異変を解決しろと言うことですね？」

レミ「ええ。貴方に何かあると困るから…。」

シン「…分かりました。ではこれで失礼します。」

私はそう言うと、ゆつくりと扉を開けて部屋を出た。それにしても次の異変か…：少  
し気を付けて挑むか…。

…：やっぱり正直に伝えられないわね。自分の気持ちは分かっているのだけれど…。  
レミ「でも…：せめてシンジが無事に帰ってきてくれたら…：シンジの事だから大丈  
夫だと思うのだけれど…。」

私は自分に言い聞かせるように、そう呟いた…：自分の大切に思う人が…：無事に  
帰ってきてくれるようにと…。



自室に戻った私は、あの人を呼ぶことにした。

シン「紫さん、少々よろしいでしょうか。」

紫「あら、久しぶりね♪で、何かしら。」

紫さんはスキマから現れると、私に用事を尋ねてきた。

シン「紫さんは次に起こる異変について知っていますか？」

紫「ええ、もちろん。貴方は知らないかもしれないけれど、今の幻想卿の季節は春なのよ。」

シン「春？今はこんなに寒くて雪も降るのにですか？」

紫「だからこそその異変なのよ。霊夢と魔理沙もこちらに向かっているわ。」

シン「霊夢さんと魔理沙さんが？一体何故？」

紫「十中八九、貴方の力を借りたいなのでしょうね。」

私の力？

紫「貴方は人間でありながらも、前回の異変を解決した。だからこそ今回もその力を

借りたいのでしょうね。」

シン「成る程、事情は分かりました。ですが今回の異変の首謀者や目的は分からないのですか？」

紫「目的は分からないけれど首謀者は分かるわ。その人物の名前は【西行寺幽々子】、私の親友よ。」

紫さんの親友？そのような方が一体何故：

紫「不思議に思ってるでしょうね。私の親友が異変を起こすことを……。幽々子の過去にも色々あったのよ……。」

紫さんが悲しい顔をしている……。これ以上は聞かないようにしましょう。

シン「……では、私が霊夢さんと魔理沙さんを手伝って異変を解決すればいいんですね？」

紫「……そう言うことよ。幽々子の能力は危険だから気を付けて頂戴。」

シン「危険？一体どんな能力なんですか？」

紫「【死を操る程度の能力】。その名の通りの能力よ。」

名前からして危険度が分かりますね。これは流石に気を付けなければなりませんね……。

魔「おーーい!!!シンジはいるかーー!!」

紫「どうやら着いたようね。私も見守らせてもらうから、頑張つて頂戴。」

紫さんはそう言い残すとスキマの中へと姿を消した……。

シン「……気を引き締めなければならぬようですね。」

お嬢様が見た運命……私の感じた嫌な予感……。外れてくれればいいのですが……。

次回をお楽しみに！

## 冥界に向けて…

魔「おーい!!! シンジはいるかー!!」

霊「少しは静かにしなさいよ。シンジに迷惑でしよ。」

魔「でも今は異変なんだぜ? あいつの力が必要だろ?」

確かに魔理沙の言う通りなのよねえ…。余り頼りたくはないけど致し方ないのかしら…。

レミ「何よ、喧しいわねえ…。なんだ、魔理沙と霊夢じゃない。察するに、今回の異変を解決するためにシンジを呼びに来たって所かしら。」

霊「その通りよ。って言うか、大体分かるわよね。」

魔「つでレミリア、シンジは何処にいるんだ?」

シン「お呼びでしょうか?」

魔「うわあ!? お、脅かすなよ…。」

シン「すみません、そんなつもりはなかったのですが…。」

…私も気付かなかったわ。シンジは昼夜の能力でも使えるのかしら…。

シン「異変解決ですよ? では参りましょう。」

霊「あ、ありがとう。」

話「早い。しかも理解力まで…。絶対シンジはエスパーか何かよ…。

レミ「つと、待ちなさいシンジ。」

シン「?何でしょうか?お嬢様。」

レミ「咲夜!」

咲「お呼びでしょうか?お嬢様。」

だから急に現れないでほしいんだけど…。一々心臓に悪いわ。

レミ「貴女はシンジと一緒に異変を解決して頂戴。」

咲「しかし、お嬢様のお世話は…。」

レミ「私は一人でも大丈夫よ。それに、少し嫌な予感がするしね。」

咲「…分かりました。と、言うわけでご一緒させて頂くことになりました。よろしく

お願いしますね、シンジさん。」

シン「ええ、こちらこそ。」

…:…なんだか負ける気がしないわね。逆に相手側が哀想になってきたわ。

魔「よし!話が纏まったなら早く行こうぜ!」

シン「そうですね。」

咲「分かったわ。」

霊「ええ、早く異変を解決しましょう。」

少年少女移動中…

シン「冥界ですか？」

私は移動中に自分が集めた情報をシンジと咲夜に伝えた。

霊「ええ。でも死ななくても行けるところだから安心して。」

咲「そうじゃないと困るわよ…。」

そりゃそうよね…

魔「ん？何か人影みたいなのが見えるぜ？」

シン「ホントですね。誰でしょうか？」

気になって近付いてみると、チルノと冬の妖怪…レテイだった。

チル「あんたたち！このサイキョーのアタイ達と勝負しなさい！」

レテイ「…アンタは相変わらずだね。」

本当に相変わらずの⑨ね…。

霊「メンドクサイから私がチャツチャと終わらせるわ…。」

魔「おっと！相手は二人なんだぜ？私も参加させてもらうぜ！」

霊「…足だけは引つ張らないでね？」

シン「ではお二人に任せて私たちは先に行っていきましょう。」

咲「ええ、そうね。」

あの二人なら何の心配もいらないわね。

チル「こらく！アタイを無視して先に行くなー！」

霊「夢想封印！」

チル「うわあ!?!」

ピチューン

あら？もう終わったの？呆気なかったわね。

魔「……鬼だ。コイツ鬼巫女だ…。」

レテイ「……早速私に死亡フラグがたったわね。」

さて、早く終わらせて二人を追いかけましょう。

## プリズムリバー三姉妹

霊夢と魔理沙が戦ってくれている間に、私とシンジさんは冥界に向かっていた。

シン「もうそろそろでしようか？」

咲「多分そうじゃないでしょうか？生物の気配も無くなってきましたし…。」  
冥界は死者が集うところ…存在するのは幽霊ばかりでしょう。

シン「おや？あそこに誰かいますよ？」

咲「本当ですね？」

誰でしょう？こんなところにいるなんて。

アリ「あら？シンジさんと紅魔館のメイド長？」

あの容姿は確か宴会の時の…アリスだったかしら？

シン「アリスさん？こんなところで何をしているのですか？」

アリ「今回の異変が気になったから私も個人で調べてたのよ。」

咲「異変に気付いていたのね。でっ？何処まで調べることができたの？」

アリ「冥界が原因だと言うこと、それから貴方達が異変解決をしていると言うことく



らいかしら。」

咲「中々調べているみたいね。それで？これからどうするの？」

アリ「そうね……。貴方達についていこうかしら？」

私たちについてくる？

シン「何故ですか？私たちに任せてしまっても構わないですよ？」

……シンジさん、それ思いつきりフラグに聞こえるのですけれど……。

アリ「単純に異変が気になるからよ。基本魔法使いは好奇心旺盛なのよ？」

咲「どうします？私はどちらでも構わないですよ？」

シン「咲夜さんが良いのでしたら私も構いません。と、言うわけなので宜しくお願ひしますね？アリスさん。」

アリ「ありがとう。それじゃあ行きましょう？」

『ええ。』

少年少女移動中…

アリ「西行寺幽々子？ソイツが今回の異変なの？」

シンジさんは自分の持っている情報をアリスに教えた。

シン「ええ、今春が来ないのもその方が原因みたいです。」

アリ「目的まではわからないのよね？」

シン「すみません、そこまではわかっていません。」

咲「そこまでわかっていれば十分ですよ。」

アリ「そうね。それにしても【死を操る程度の能力】か……かなり厄介そうな相手ね。」  
確かに、名前からして危険そうな感じが漂ってきますね。

シン「ん？前に誰かいますね。」

前に？今度は誰でしょうか……

ルナ「いたたたたた……」

メル「大丈夫？姉さん？」

ルナ「大丈夫だ、このくらいのケガ……いつ!？」

リリ「無理しない方がいいよルナサ姉さん。ライブはまた今度に変更すればいいんだから……」

ルナ「そ、それはできない!」

そんなことをしたら皆に迷惑がかかってしまう。今日のライブを楽しみにしている幽霊達もいるのだから……。

そんなことを思っていると、向こうから人影がこちらへ向かっているのが見えた。

シン「おや? 怪我をしているようですね? 大丈夫ですか?」

やって来たのは銀髪の蒼い眼をした青年と、同じく銀髪で三つ編みのメイド服を着た女性。それと金髪の人形のような可憐な容姿をした女性だった。

咲「本当ですね? どうでしょうか?」

アリ「残念だけど私は回復魔法は覚えて無いわよ?」

どうやら私の怪我を心配してくれているようだ。

ルナ「私なら大丈夫。いたっ!？」

『姉さん!?!』

うぐつ?! 無茶をしたつもりは無いけれど流石にキツいな…。

シン「……それでは私が何とかしましょう。」  
『えっ?』

大した怪我には無いにしろ、そんな直ぐ治すなんて…。

シン「大丈夫ですよ。直ぐに終わりますから。」

奏符『癒しの鎮魂歌』

ルナ「っ!?これは…。」

リリ「不思議な音色…」

メル「何だか気分が安らいでいくような…そんな感じがする。」

咲「シンジさんって、こんなことまで出来るのね?」

アリ「不思議な人よね。」

あれ? 傷の痛みが癒えていく?

ルナ「痛みが…無くなった?」

『なっ!?!』

シン「ふう…こんなものでしょうかね?」

す、すごい人だ。スペル一つで傷を治すなんて…。

シン「どうですか？大分良くなったと思うのですが……。」

ルナ「え、ええ。もう大丈夫です。ありがとうございます。」

シン「そうですか、それは良かったです。」

ルナ「っ!？」

や、ヤバイ。この人の笑顔を見ていたら顔が熱くなってきた……。

シン「?どうかしましたか?顔が赤いですよ?」

ルナ「い、いえ!なんでもないでしゅ!」

うっ、あわてて舌噛んじゃった……

リリ「ははくん♪さては姉さん、この人のことを……。」

メル「成る程ね〜♪」

ルナ「ちょ!?!ちちち、違うわよ!」

咲「……またライバルが増えたわね。」

シン「?」

アリ「本人は気付いていないみたいだけれどね?」

うゝ、何かお礼がしたいのだけれど……。そうだ!

ルナ「あの〜!」

シン「ん?どうかしましたか?」

ルナ「こ、今度私の演奏を聴いてくれないでしょうか!」

シン「ええ。是非聴かせていただきたいと思えます。」

ルナ「あ、ありがとうございます!」

やった!

シン「つと、自己紹介をしていませんでしたね。私は八神シンジ。紅魔館で執事をしております。」

咲「私は十六夜咲夜。同じく紅魔館のメイド長をしているわ。」

アリ「私はアリス、アリス・マーガトロイド。魔法使いだけれど、基本は人形使いよ。」  
ルナ「わ、私は長女のルナサ・プリズムリバーです。」

メル「私は次女のメルラン・プリズムリバーです。よろしくお願いします。」  
リリ「私は三女のリリカだよ♪よろしくね♪」

シン「はい、宜しくお願いします。では、私は用事がありますのでこれで失礼致します。」

ルナ「はい!」

そう言い、シンジさん達と別れた。

リリ「姉さん、あの人に惚れたんでしょ♪」

ルナ「な、なななに言ってるの!?そ、そんな筈ないでしょ!」

メル「まあまあ、姉さんにも春が来たのねえ。応援してるわよ♪」  
ルナ「だ、だから違うって!？」  
全くこの子達は…。こんな調子でライブできるかなあ……。

続けることを強いられているんだ!!

## 半人半霊の庭師

シン「つと、ここですかね？」

咲「そのようですね。」

私たちは、冥界と思われるところまで辿り着いたのだが……

アリ「長い階段ね……」

本当に長いですねえ。恐らく何百段もの段数があるでしょうね。

シン「では行きましょうか。」

咲「そうですね。」

アリ「そうですね。」

？「待ちなさい！」

階段を登ろうとしたら、上の方から声が聞こえてきた。そこを見ると剣を構えた女性がいた。

シュ。パ！！



シン「つと！危ないですね……。」

私に斬りかかってきた。なぜ私だけ？

シン「貴方は誰ですか？急に斬りかかってくるなんて……。」

妖「私は魂魄妖夢。この白玉楼の庭師です！」

……庭師がなぜ斬りかかって来るのでしょうか？辻斬りの間違いのような気がします……。

アリ「ちよつと危ないじゃない！当たったらどうするのよ！」

妖「当てるつもりでやりました。ですがかわされるとは思いませんでした。」

シン「……私と戦いたいのですか？」

妖「はい。それが私の主……幽々子様の望みですから……。」

主に頼まれて？幽々子さんとやらは私が来ることを知っていたんでしようか？

シン「……いいでしょう。その勝負受けましょう。」

咲「……いいのですか？シンジさん。」

シン「ええ。私に任せて下さい。」

アリ「貴方なら問題ないわね。私たちはゆっくり見物させて貰うわ。」

咲「そうね。気を付けて下さい、シンジさん。」

シン「はい。」

そう言うのと、アリスさんと咲夜さんは離れた所に移動した。

シン「では、早速戦いましょうか。」

私は能力により、双剣を創造した。

妖「私を相手に双剣ですか？ 選択ミスですね。私に剣術では勝てない！」

シン「それは、やってみなければわかりませんよ？」

妖「随分余裕ですね？ では私も、私の二本の愛剣で相手をさせて貰います！」

そう言うのと、妖夢さんは二本の剣を抜刀し……

妖「この楼観剣と白楼剣に斬れぬものなど……あんまり無い!!」

……そこは無いと言い切りましょうよ。

そんなことを考えてる内に妖夢さんが弾幕を放ってきた。

シン「斬撃型の弾幕ですか……。中々の太刀筋ですが甘いですよ？」

ガキン!!

私は自らの剣で弾幕を弾き打ち消した。

妖「それでは此はどうですか！」

妖夢さんは私に急接近し、思いつきり斬りつけてきた。

シン「そんなものでは私は倒せませんよ？」

キン!!

剣と剣が交わる音がした。

妖「くつ、言うだけのことはありますね。でも私は負けるわけには行きません！」

シン「それは私も同じこと…。全力でかかってきて下さい。」

妖「っ!?言われなくても！」

……これは少々楽しみですね。

アリス 視点

アリ「……凄い戦いね。」

咲「……ええ。」

本当に凄い。心の底からそう思う。でも……

アリ「何故か違和感のようなものを感じるの一体……。」

咲「それは多分……シンジさんが本気を出していないからよ。」

アリ「えっ？」

本気を出していない？あれで？だとしたらとんでもない化け物レベルね。

アリ「……シンジさんが味方で良かったわ。」

咲「……同意ね。」

吸血鬼を倒した人間の力……一体どれ程のモノなの？

妖夢 視点

妖「ハア……ハア……ハア……」

シン「……」

くつ、体力がなくなってきた……。この人は強すぎる。先程から何度も剣を交えているのに一太刀も浴びせられず、更には体力が無くなっている様子もない。

シン「もう辞めた方がいい。貴方は既に体力がない。そんな状態で戦っても満足な結果は出ないでしょう……。」

妖「っ!? まだ……まだです!」

シン「……仕方ありませんね。では私も、少し本気を出させて貰いますね?」  
そう言うと、シンジは懐から一枚のスペルカードを取り出した。

妖「スペルカード? いいでしょう。それで決着を着けましょう!」

妖夢も一枚のスペルカードを取り出した。

シン「さあ、行きましょうか!」

妖「望むところです!」

そして同時にスペルカードを発動した。

——劍技『天翔風臥斬』

——人鬼『未来永劫斬』

相手の方は空に跳び、風を纏いつつ私目掛けて剣を十字にして突撃してきた。それに  
対し私は、桜吹雪を舞いながら一直線に切り裂きに行った。

ザシュ!!

最後に立っていたのは…

妖「うっ…ぐっ…」

シン「私の勝ちですね」

相手だった…

## 幽霊の主

シンジ 視点

私と妖夢さんの戦いに終止符が打たれた。

シン「大丈夫ですか？妖夢さん。」

妖「はい、それにしても強いですね。私の完敗です……。」

シン「そうですか……。貴女には足りないものがある。それさえ克服することが出来れば、きっと私より強くなれる。」

妖「私に足りないもの？それは一体……。」

シン「いずれわかる時が来ますよ。」

妖「……分かりました。」

釈然としないのか、妖夢さんは渋々頷いた。

咲「終わりましたね。お疲れさまです。」

アリ「改めて貴方が人外だと思い知らされたわ。」

咲夜さんとアリスさんがゆっくりと近づいてきた。

シン「人外ですか……。確かにそうかも知れませんか。」

……駄目だ。どうしても過去の事を思い出してしまふ。

シン「ところで、そろそろ先に進んでもよろしいでしょうか？」

妖「負けてしまいましたし、仕方ありませんね。えくと……」



シン「自己紹介がまだでしたね。私は八神シンジ、ご覧の通り執事をしております。」  
咲「私は十六夜咲夜よ。紅魔館のメイド長を勤めているわ。」  
アリ「私はアリス・マーガトロイド。訳あってこの人達と異変解決をすることになったわ。」

魔「おーい！シンジー！」

ん？この声は魔理沙さん？と言うことは、あちらも終わったと言うことですね？

魔「お？アリスもいたのか？」

アリ「魔理沙も異変解決を？相変わらず動くのが好きねえ。」

魔「お前が引きこもりすぎなだけだぜ。」

霊「そのわりには全然役にたつてないわよね？」

魔「うぐ……それはお前が鬼過ぎるからだろ！」

何時も通り仲が良いみたいです。

シン「取り敢えず妖夢さんに聞きたいことがあるのですが……。」

妖「何ですか？」

シン「今回の異変……幽々子さんの目的はご存知ありませんか？」

妖「……残念ながら私もわかりません。」

シン「……そうですか」

親友の紫さんも、従者である妖夢さんも知らないなんて……やはり嫌な予感がします。

妖「でも、最近幽々子様の様子が変わります。」

シン「変？ 一体どのような？」

妖「何時もならたくさんのお食事をなさるのに何かかわらず、最近あまり食べないんです。」

……それは変な事なんですか？

シン「……取り敢えず本人の所に連れていってもらえますか？」

妖「はい、分かりました。こちらです。」

さて……どんな方なんでしょうか。

少年少女移動中……

妖夢さんについていくと、怪しげなオーラを出している大きな木と、その前には扇を広げた綺麗な女性がいた。

シン「あの方が？」

妖「ええ、私の主人である幽々子様です。」

霊「いかにも怪しい感じがするわね。」

アリ「それで？これからどうするの？」

シン「……取り敢えず近くに行ってみましょう。」

妖「……分かりました」

私たちは幽々子さんにゆっくりと近づいていった。

妖「幽々子様、客人を連れてきました。」

幽「あら妖夢？負けちゃったの？」

妖「はい、申し訳ございません……。」

幽「全く……ダメじゃないの……ちゃんと始末してくれないと！」

シン「っ?!」

シュ!!

私の頬を扇がかすった。

妖「幽々子様!? 一体何の真似なんですか!?!」

幽「やくねえ、妖夢ったら。真似なんかじゃないわよ?」

霊「ちよつと!いきなり危ないじゃないのよ!」

咲「戦うと言うのなら、容赦はしないわよ?」

アリ「私も戦う準備は出来てるわよ?」

魔「もちろん私もだぜ!」

霊夢さんは札を出し、咲夜さんはナイフを構え、アリスさんは人形を展開し、魔理沙

さんはミニ八卦炉を取り出した。

シン「……皆さん、ここは私にやらせてもらえませんか？」

『なっ!?!』

私は一人で戦いたい……彼女の真意を確かめたい。

幽「あら？まさか貴方は私に一人で勝てると思ってるの？」

シン「……勝てる勝てないじゃない、私には確かめなければならないことがあるのですよ。」

霊「一人じゃ無理よ！やっぱり私も！」

咲「……わかったわ。シンジさんに任せます。」

霊「なっ!?!咲夜！正気なの!?!」

アリ「……私も彼に任せるわ。」

霊「あんたまで何を言ってるのよ！」

妖「幽々子様は私よりも遥かに強いんですよ！シンジさん一人に任せてしまっていていいんですか！」

魔「私もシンジを信じるぜ！あいつのことだから何か考えがあるはずだぜ！」

霊「ま、魔理沙まで……。でも私は、博霊の巫女としての責任が！」

シン「ご心配ありがとうございます。ですが、今は私を信じて見ていてください。お願いします。」

霊「っ!?……わかったわよ。」

霊夢さんは渋々なのか、何とか頷いてくれた。

幽「あら？本当に貴方一人で良いの？」

シン「ええ、構いません。ではそろそろ始めましょうか。」

幽「そうね。それじゃ行くわよお！」

さあ、弾幕ごっこの始まりですよ！

## 幽々子の過去と新たな恐怖

妖夢視点

妖「いいんですか？このまま行かせてしまつて？」

霊「……シンジは自分を信じろと言つた。なら私はあの人を信じるだけよ。」

咲「それにあの人なら負けることは無いでしょうしね。」

アリ「実際人間離れしてるしね。」

魔「あいつは人間じゃないような気がするけどな。」

何で皆はシンジさんをそこまで信じる事が出来るんですか？確かにあの方は強いですが、幽々子様は私なんかよりも遥かに強い方……大丈夫でしょうか？

シンジ 視点

幽 「ほらほら、どうしたの？そのままじゃ勝てないわよ？」

シン 「くっ!？」

流石は異変の首謀者なだけはある……。何とかしなければ……。

幽 「そろそろ行くわよ。」

——華霊 『スワローテイルバタフライ』

スペルカードを使ってきましたか……。あれは、蝶と……。幽霊？何やらこちらにゆっ

くり近づいて……。っ!？まっずい!

ドン!!

ふう……。まさか爆発するなんて……。少し油断していました。

幽 「今のを避けたのは驚いたけど、まだスペルは終わってないわよ♪」

っ!？またきた!？スペルブレイクでもしないと終わらないのですか……。

シン 「くっ、仕方がない！」

——闇符 『ナイトメア・アビスファイア』



スペル発動後、辺り一面が闇に包まれた。

幽「くっ、これじゃあ前が見えないわ。一体どこなの？」

シン「此方ですよ。」

幽「えっ？きやああああ!？」

私は闇の中で、幽々子さんの後ろに回って腕を持って投げ飛ばした。出来れば女性に傷はつけたくありませんから。

幽「うっ、どうして暗闇の中で私の場所が分かったの？」

シン「それくらい出来なければスペルの意味が無いでしょう？」

幽「確かにその通りね。でもこれはどうかしら？」

——亡郷『亡我郷―宿罪―』

今度は弾幕を張りつつ、複数のレーザーを放ってきた。

シン「ならば私も！」

——死花『デストラクト・オブ・ローズ』

赤いバラの弾幕が徐々に花を開かせ、相手の弾幕を相殺していく。

因みにこのスペルを考えたのはお嬢様であり、折角なので創ってみた。中々綺麗なので私も気に入っているが、効果は意外と上げつないものである。

幽「あらあら、これまで突破しちゃうなんて凄いわねえ。貴方が本当に人間なのか疑うわ。」

シン「もうその質問には飽きましたよ。そろそろ貴女が何を考えているのかを聞かせてほしいんですけど？」

幽「そうねえ……。」

幽々子さんが答えるか否かを考えているとき。

紫「シンジ！幽々子！」

スキマの中から紫さんが突然現れた。

幽「あら？紫じゃない？久し振りねえ♪」

シン「紫さん？一体どうしたのですか？」

私は何時もの事なので特に驚きもせず紫さんに問いかけた。

紫「貴方たちの事が心配だったから、それに……本当は幽々子の目的を知っているからよ。」

シン「なんですすつて？」

一体どう言うことなんですか？

紫「私は幽々子の生前の頃の出来事を……思い出したくなかったただけだったんだと思うわ……。」

シン「生前の出来事？」

紫「幽々子は一度死んだわ。妖怪としてではなく、人間として……。それも……自殺だったわ。」

シン「自殺……一体何故ですか？」

幽「私は生前からこの能力を……【死を操る程度の能力】を持っていたわ。最初は村の人も仲良く接してくれた……でも……。」

紫「村の人間たちは幽々子の能力を知ったとたん敵意を持つようになり、石を投げ付けたり嫌がらせをするようになったの……。」

生まれながらの能力で皆から捨てられる……私やフランと同じだったとは……。

シン「それを理由で自殺し、亡霊としてこの世に現れたと？」

幽「ええ、でもその時の私は生前の記憶を失っていたわ……。だから今更だけど生前の記憶を取り戻したいの……私と紫……そして前に私に仕えていた庭師との思い出を……。」

シン「前に仕えていた庭師？」

幽「魂魄妖忌……妖夢の叔父よ。」

その人たちとの記憶を取り戻したい……か。確かに大切な思い出は忘れたくはありません。

シン「でもいいんじゃないですか？今のままでも」

幽「えっ？」

シン「確かに記憶は大切なものです。それがその人にとっての生きた証なんですから……。でもそれ以上に大切なことは、今共にいる仲間たちだと僕は思います。」

幽「今いる……仲間たち？」

シン「ええ、今ここには貴女の大事な親友である紫さんがいる。貴女を慕う妖夢さんがいる。そして……私たちがいる。今いる仲間たちを大切にすることも、必要だと思いますよ？」

幽「今いる仲間たちを大切に……確かにその通りね。ごめんなさい、私が間違っていたわ。」

紫「幽々子……。」

幽「ごめんなさいね、紫。心配かけてしまつて。」

紫「気にしないで、私は貴女と一緒にいられたらそれでいいから。」

幽「ありがとう。シンジ君だったわね？もう春は返すわ。迷惑かけてごめんなさいね。」

シン「いえ、私も構いません。たまには刺激があるのも良いことですしね。」

本当に終わりなのだろうか？まだ何か……恐ろしい事が起こりそうな予感がします……。

幽「それじゃあ……!?!」

シン「どうしたんでs……!?! 一体これは!?!」

紫「何が起こっているの!?!」

急に西行妖が光始めた!?! 一体何が始まるんですか!?!

大惨事大戦だ!

## 絶望の序曲

霊夢 視点

あれは紫？何であいつがここに？

私は突然現れた紫に疑問を抱いた。

魔「おい、何で紫がここにいるんだ？」

どうやら魔理沙も同じことを思っていたみたいね。

咲「紫？一体彼女は誰なの？」

霊「あいつは八雲紫。この幻想郷の賢者と呼ばれている奴よ。」

アリ「賢者？何でそんな人がシンジさんと話しているの？」

霊「知らないわよ……でも少なくとも紫とシンジは知り合いみたいね。」

アリ「じゃあ幽々子と紫は？」

妖「幽々子様と紫様はご友人同士です。」

友人？紫に友人なんていたのね。

咲「あら？どうやら話が終わったみたいよ？」  
幽々子がシンジと紫に謝ってるみたいね。じゃあこれで異変解決？なんか嫌な予感がするんだけど……

魔「ちよっ!?あれは一体なんだぜ!？」

霊「どうしたの魔理s…!?これは!？」

妖「なっ!?西行妖が!？」

アリ「なんなの!?あの木から何かを感じる!？」

咲「これがお嬢様の言っていた嫌な予感!？」

あの木から物凄い妖力を感じるわ……。これはさすがに不味いかも知れないわね  
……。

霊「一先ずシンジたちの所に向かうわよ!」

『ええ(はい)(ああ)！』



その頃、紅魔館では…

パリン

レミ「……………」

美「お嬢様!?!大丈夫ですか?」

レミ「え、ええ……………」

パチエ「どうしたのレミイ?紅茶のカップを落とすなんて珍しいわね。」

フラ「お姉さま?大丈夫?さつきからなんか変だよ?」

レミ「何でもないわよ……………何でも……………(私は信じてるから……………シンジ……………)」

シンジ 視点

あれは一体……………。西行妖に何が起こっているんですか?

霊「シンジ!紫!」

紫「霊夢……………貴女たちも無事だったのね?」

妖「幽々子様！ご無事ですか！」

幽「妖夢……私は大丈夫よ。ありがとう。」

咲「一体これは何が起こってるんですか？」

シン「分かりません……ですがかなりヤバそうな雰囲気があります……。皆さんはここから早く避難してください。」

咲「シンジさんはどうするつもりですか!？」

シン「私は……何とかしてあの西行妖を斬ってみます。」

幽「それは無茶よ！妖夢の白楼剣ですら斬ることはできないのよ！」

シン「ですがこのままでは何が起こるか分かりません……。一か八かでもやるしかありません。」

やる前から諦めるのは私の性には合っていないませんしね。

魔「だったら私も手伝うぜ！」

シン「魔理沙さん？しかし危険ですよ？」

魔「私もシンジと同じ考え何だぜ！それにこのままにしておくとか何が起こるかわかん

ねえしな！」

シン「魔理沙さん……。」

咲「だったら私も手伝うわ。」

アリ「私も手伝うわよ？」

霊「そうね。このまま黙って帰るのは博麗の巫女として失格かもしれないし、私も参戦させて貰うわよ？」

妖「幽々子様には申し訳ございませんが、私も参加させて頂きたいと思います。」

幽「妖夢……。そうね、過去を断ち切るいい機会かもしれないわね。紫？」

紫「ええ、分かっているわよ。私も参加するわ。」

シン「皆さん……。分かりました。ではやりましょうk……。っ!？」

何ですか!?!この頭の奥を抉られるような感触は！

『シンジ(さん)(君)!!』

紫「一体どうしたの!?!」

シン「頭の……。中……。が……。ぐあ!!」

霊「シンジ！」

マズイ……意識が……。

く謎の空間く

シン「ここ……は……？」

一体ここはどこなんでしょう？ 辺り一面真っ暗で何も見えない……。

？「ここはお前の心の中……心の闇を現すところだ。」

シン「っ!? 誰ですか!」

？「いい子ぶんのはやめろよお。シンジさん……いや、我が分身さんよお!」

シン「なっ!」

ば、馬鹿な! 私と同じ容姿をしているだど!?

？「はっ! 俺はお前自信……つまりはお前の影だあ!」

シン「私の影? 一体どう言う……。」

？「わかってんだろお? 俺はお前の闇そのもの……裏のお前ってことだよお!」

シン「……つまり私の心の闇から生まれたもう一人の私と言うことですか？」

闇シン「なんだ分かってんじやねえか。」

シン「ですが私の闇とは一体？」

闇シン「外の世界にいたときのことを思い出してみろよ？人間どもにどんな仕打ちをされたかよお？」

シン「っ!?!やめろ！思い出させるな！」

闇シン「俺はこの時が来るのを待ってたんだ！貴様に代わり、新たな俺として生きていく時をなあ！」

なっ!?!まさか!?!

闇シン「あばよ、八神シンジさんよお。」

シン「ぐっ、ま、待て！」

か、体が動かない!?!このままでは皆が！だめだ、もう……いし……きが……。

・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・  
咲夜 視点

シン? 「……………」

咲 「し、シンジさん?」

シンジさんが苦しみ始めてから少したち、今は治まったみたいですが……

シン? 「……クツクツクツク……」

咲 「え?」

シン? 「あーはっはっはっはっはっハッハッハッハッハッハッハッハ  
!!!!!!」

『?!?』

一体どうしたと言うんですか!?! 明らかにいつもと様子が違います!

魔 「一体どうしたんだぜ! シンジ!」

シン? 「クツクツク、可笑しくって腹痛いわあ〜」

妖「なっ!？」

霊「貴方……シンジじゃないわね？」

シン? 「流石は博麗の巫女、鋭い答えじゃねえか。だが、パーフェクトとは言いがたいな。」

アリ「それは一体どう言う……。」

シン? 「俺はお前たちの知っている八神シンジではない。だが、八神シンジ自身でもある。」

魔「全く意味がわからねえぜ……。」

シン? 「簡単に言うとな俺はあいつの心の闇から生まれた影だつてことだ!」

紫「……つまり貴方は闇のシンジつてことね?」

闇シン「流石は幻想郷の賢者、理解力が高くて助かるぜ。」

紫「……許さない。」

霊「ゆ、紫?」

紫「貴方を絶対に許さない!」

な、何ですか!?!この凄まじいまでの妖力は!?!これが賢者と呼ばれるものの力だと言うの?」

闇シン「ほう? 一体どう許さないと言うんだ?」

紫「貴方を倒して、必ずシンジを取り戻す！」

闇シン「ほう？俺を倒すだと？出来るのか？心は違っても、体はシンジのままなんだぜ？」

紫「それでも！貴方をこのまま野放しにしておくわけにはいかない！」

霊「紫……。そうね、私も手伝うわ！」

咲「あのシンジさんでも、皆でかかればきつと勝てます！」

魔「ああ、そうだな！たとえシンジでも所詮ホンモノじゃないんだ！」

アリ「ええ、あの人を必ず救いましょう！」

幽「シンジ君には借りがある……。今度は私が助ける番ね！」

妖「幽々子様を助けてくださった恩を、今ここで返します！」

闇シン「ハッハッハッハ!!随分と威勢がいいじゃねえか!!いいだろう、俺がまとめて相手してやるよ！さあ、絶望の宴を始めようじゃないか！この俺を……。満足させてくれよー！」

必ず助けますよ……。シンジさん！



## 終わらない闇と絶望

紫 視点

闇シン「クハハハハハ!!その程度かキサマら?もつと俺を満足させろよ!!」

紫「うぐっ!」

なんてこと……。ニセモノの筈なのに強すぎる!

霊「何なのこの強さ!?シンジより強いわよ!」

魔「んなバカな!?そんなことあるわけないぜ!」

アリ「でもこれだけの人数を相手に余裕みたいよ……。」

咲「くっ……私の能力も全く通用しないわ!」

咲夜の能力まで効かないなんて……私の能力で不意打ちをしてもかわされるし……。

一体どうすればいいの?

幽「……………」

妖「どうされましたか?幽々子様?」

紫「幽々子?」

幽「……たぶんだけど、シンジ君はまだ本気を出してないわ……。」

『なっ!?!』

バカな!?! そんなことが……。もしそれが本当なら私たちに勝ち目は……!?!

アリ「だけどどうしてそう思ったの?」

幽「……私と戦つてるとき、シンジ君は何か気を遣つてるように戦つていたわ……。」

霊「つまりその時のシンジは余力を残して戦つていたつてこと?」

幽「……ええ。」

妖「そ、そんな……!?!」

闇シン「クハハ! 流星は西行寺幽々子だなあ! お前の言う通りだ。俺はまだ本気を出

していないぜえ?」

咲「……どうやらハツタリじゃないみたいですね……。」

魔「くそつ! だつたらどうすればいいんだよ!」

闇シン「さあ、そろそろお望み通り本気を見せてやるよお!」

あれはスペルカード!?!

紫「みんな! 気を付けなさい! マズイのが来るわよ!」

霊「わかつてるわよ!」

闇シン「躍れ屑ども! 死のダンスを!」

——死魔『デッドエンド・ビッグバン』

スperl発動と同時に巨大な魔方阵が現れた。

魔「な、何なんだ!?!あの馬鹿でかい魔方阵は!?!」

咲「見るからにヤバそうな雰囲気ね……」

アリ「っ!?!来るわよ!」

闇シン「これが俺のファンサービスだ!受けとれえ!!」

パチン

シンジが指をパチンつとならした瞬間、魔方阵から大量のカラフルな弾幕が嵐のように飛んできた。その数は普通の弾幕どころか、霊夢の夢想封印の比ではなかった……。

魔「ちよ!?!これどうよければいいんだぜ!?!」

妖「半端な数じゃありませんよ!?!受け止めるにしても捌ききれませんよ!?!」

くっ!?!弾幕の隙間が全然ない……。一体どうすれば……。

魔「ちっ!こうなったら一か八か……!」

——恋符『マスタースパーク』

霊「魔理沙!?!」

魔理沙の撃ったマスタースパークによって、なんとかシンジのスペルは治まった。

魔「ハア……ハア……うぐっ?! 全力でやつと相殺か……。やつぱりレベルが違いすぎるぜ……。後は……任せた……ぜ？」

バタツ

アリ「ま、魔理沙!？」

闇シン「中々のパワーだったが、体が持たなかったようだな？」

アリ「許さない!!」

——戦操『ドールズウォー』

咲「私も付き合うわよ！」

——幻符『殺人ドール』

十体近くの人形がナイフのような刃物を持ってシンジ目掛けて突撃していった。さらに、咲夜の投げたナイフが吸い込まれるように、シンジ目掛けて飛んでいった。

闇シン「ほう？ パワーで勝てないのなら数で来ようってかあ？ 確かにいい案だが……それは俺以外が相手の場合だがな」

——魔剣『ダーインスレイブ』

『なっ!?!』

何!?!あの禍々しいオーラを覆った剣は!?!一振りしただけで咲夜とアリスのスペルをかき消すなんて!?!

咲「そ、そんな……」

アリ「私の……人形たちが……」

闇シン「さあ、お前たちは退場だ!」

——魔符『デビルズナイトゲート』

突然漆黒の扉が現れてゆっくりと開いた。その奥からは闇の冷気のようなものを感じ、寒気すら感じた。そして……

ドゴーン

咲・アリ「うっ!?!きゃあああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

急に砲撃のようなモノが咲夜とアリスを吹き飛ばした。

霊「咲夜!」

妖「アリスさん!」

闇シン「所詮、クズはクズなのだ。さあ、次は誰を血祭りにあげようか?」

紫「くっ!?!」

一体……どうすればいいの？

## 光と影、そして絶望の終幕

霊夢 視点

うつ……ぐう……強すぎる。まさか魔理沙だけでなく咲夜にアリスまでやられるなんて……。

闇シン「クハハ！次は誰だあ？」

これだけ暴れてもまだ余裕なんて……本当に化け物ね……。

闇シン「最初の威勢はどうしたよ？幻想郷の賢者さんよお？」

紫「くっ……」

そりやそうよ。ここまで力の差があるなんて例え紫でも予想できないわよ。

霊「……仕方がない、あの技を使うしかないわね。」

余り使いたくなかったけど、仕方ないわね。

紫「貴女まさか!?やめなさい霊夢！今アレを使ったら貴女が!？」

霊「大丈夫よ紫。それよりも貴女は自分の心配をしなさい。」

妖「一体何をするんですか!？」

霊「少し本気を出すだけよ。このスペルをね!」

## ——『夢想天生』

私の回りに7つの陰陽玉が現れ、カラフルに輝き出した。

霊「喰らいなさい！夢想天生!!」

闇シン「な、なんだと!?!ぐあああああああああ!!!」

シンジに向かい直撃した。

霊「ハア……ハア……うぐっ!や……やったの?」

会心の当たりだった。あの夢想天生は私の中の秘奥義の様なもの……。流石に効いたと思うけど……。

それにしても流石にキツイわね。私の霊力がほとんどのなくなっちゃたわ。

妖「や……やったのでしょか?」

幽「だと……いいのだけれど……。」

紫「霊夢!大丈夫!」

霊「私は……平気よ……。シンジは……?」

紫「わからないわ。でもこれなら流石に……。」

闇シン「今のは素晴らしい攻撃だったよ。博麗霊夢?」

『なっ!?!』



闇シン「ですが私はダメージを受けていません。」

そ、そんな……!? 私の夢想天生を受けても無傷だなんて!?

闇シン「お前の攻撃は素晴らしかった。攻撃力も! スピードも! だが、しかし、まるで、全然! 俺を倒すには程遠いんだよねえ!」

霊「ぐっ!?!」

妖「一体……どうすれば!?!」

幽「勝ち目は……無いの!?!」

紫「くっ……ごめんなさい、シンジ……。私は貴方を救えなかった。」

闇シン「さあ、懺悔の用意は出来ているか!」

——終焉『イノセント・零』

突然シンジの周りに禍々しいオーラが漂い始めた。そして……

闇シン「ふんっ!!」

妖「きやあああああ!!」

幽「妖夢!?! そんな……いつの間に背後に……!?!」

いつの間にか私たちの背後にいる妖夢を蹴り飛ばした。

闇シン「さっきのスペルは俺の能力を三倍に引き上げてくれる最凶のスペルなんだよお!」

霊「なっ!? インチキ効果もいい加減にしなさい!」

闇シン「お前が言うかよ。まあいい。今から貴様等全員消し炭にしてくれる!」

霊「うっ!」

もうダメなの? こんなところでこの私が死ぬなんて……。そんな……

咲「待ち……なさい……!」

霊「なっ!? 咲夜!? あんた無事だったの!」

私が諦めようとした瞬間、ボロボロになった咲夜がフラフラになりながらも、何とか立ち上がった。

アリ「私も……まだ……まだ平気よ……?」

霊「アリス!」

魔「お前が諦めるなんて……珍しいこともあるもんだな……? 紫……霊夢……。」

霊「魔理沙!? 貴女まで!」

紫「貴女も……無事だったのね?」

紫は嬉しさの余り涙を流している。紫がこんな表情を見せるなんて……

妖 「まだ……諦めては行けませんよ……?」

幽 「妖夢!? 大丈夫!」

妖 「ええ……ご心配をお掛けして申し訳ございません……。」

妖夢も足がふらついていたが、幽々子の肩を借りて何とか立ち上がった……。

闇シン 「はっ! しぶとい奴等だな? 大人しく寝ていれば痛い目に会わずにすんだもの!」

咲 「貴方との絆があるかぎり……私たちは諦めない!」

アリ 「私たちは知っている……貴方の本当の強さを!」

魔 「ああ、お前は誰よりも強い!」

妖 「貴方は誰にも負けない優しさを持っている!」

幽 「自分の闇何かに負けないで!」

紫 「自分の過去を乗り切りなさい!」

霊 「……お願い! 戻ってきて! シンジ!」

闇シン 「絆? 本当の強さ? 優しさ? そんな小便クセエ言葉を並べられると、イラツとくるぜ! 全員まとめて……っ!」

何!? 一体どうしたの!?

く心の闇の中く

シンジ 視点

シン（うつ……ん……ここは……どこですか？）

私は確か……そうだ！闇の私に心の中へと閉じ込められて……と、言うことは……皆は大丈夫なのですか!? 外では一体!?

咲「貴方との絆があるかぎり……私たちは諦めない！」

咲夜さん!? なぜあんなにボロボロに……!?

アリ「私たちは知っている……貴方の本当の強さを！」

アリスさん……

魔「ああ、お前は誰よりも強い！」

魔理沙さん……

妖「貴方は誰にも負けない優しさを持つている！」

妖夢さん……

幽「自分の闇何かに負けないで！」

紫「自分の過去を乗り切りなさい！」

幽々子さん……紫さん……

霊「……お願い！戻ってきて！シンジ！」

霊夢さん……私は何をやっているんだ……。皆を傷つけて……私を思ってくれる仲間を傷つけて……！

闇シン「絆？本当の強さ？優しさ？そんな小便クセエ言葉を並べられると、イラツとくるぜ！」

このような闇に吞まれて我を忘れてしまうなんて……私は……もう仲間を……傷つけない……失いたく無いんだ！

闇シン「貴様等全員まとめて……っ!？」

シン（これ以上好きにはさせませんよ！もう一人の私！）

闇シン「うぐっ!?!貴様はもう一人の俺だ!?!何故だ!?!なぜ貴様が……!?!」

シン（……もう終わりにしよう……こんな事。）

闇シン「何だ?!? 貴様!?!? 今まで俺たちがどんな目にあってきたか……!?!?」

シン（……わかっていきますよ。でも、彼女らに罪はない。こんな私でも……仲間と認めて下さった方々です……。それに……今は皆をなんとしてでも守りたいんです……。この新しい能力で……。）

闇シン「なっ?!? 貴様!?!? その能力は……!?!?」

シン（「——程度の能力」。フランを助けた時から発動していた能力です……。）

闇シン「……そうか。貴様にも……いや、この俺にも……守りたいものが出来たんだな……。分かったよ。この体をお前に返す……。だが、俺はお前の裏の存在として……影として生きる……いいいな?」

シン（……はい。）

闇シン「ふっ。まさか俺とお前、共に生きるときが来るとはな……。」

シン（これからよろしくお願いしますよ? 相棒?）

闇シン「ふん、俺は相棒何かではない……。だが、不思議と悪い気はしないな……。」

紫 視点

霊「一体どうしたのかしら？」

突然シンジが大声を上げたと思ったら、今度は俯いて呟き始めてしまった。一体何がおきたの？

シン「……………」

魔「し、シンジ？」

シンジがゆっくりとこちらを向いた。そして……

シン「皆さん……………ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。」

咲「……………え？」

アリ「まさか……………貴方!？」

妖「正気を……………!？」

シン「……………はい。」

幽「……………よかった……」

シンジが……元に戻った？……よかった……本当に良かった……。

紫「シンジ……」

シン「……なんでしょうか？」

私は……私たちは……漸く戻ってきたシンジにこう告げた。

『お帰りなさい!!』

シン「……っ!?……ただいま!」

その時のシンジの頬には、大きな涙が伝っていて……どこか嬉しそうな表情だった

……



## クリスマス特別編—I

シンジ 視点

レミ「皆で雪合戦をするわよ！」

霊「……ハッ？」

お嬢様が突然皆さんを集めさせて雪合戦をやろうと宣言した。

……どうしてこうなったのでしょうか？

あれは数時間前……

レミ「シンジ！ 咲夜！ 今すぐ皆を集めて来なさい！」

シン「えっ?」

咲「しかしなぜですか?突然……」

レミ「折角雪が残ってるのに遊ばないなんて勿体無いわ!」

フラ「皆と遊べるの!わくわく♪」

それにしても、お嬢様は遊ぶのが本当に好きですね。まあ、年齢は500歳は過ぎていますが、精神年齢は子供のままですから仕方ないですね。

シン・咲「……承知いたしました。」

フランお嬢様も喜んでいらつしやいますし、断われませんね?

パチエ「貴方たちも大変ね?同情はするわ……手伝わないけれどね?」

そう言い、パチユリー様は図書館に戻っていった。……相変わらずですね。

咲「では別れて集めに行きましょうか?」

シン「そうですね。」

そうして私は博麗神社へ、咲夜さんは白玉楼へと向かった。

〈博麗神社〉

霊夢 視点

霊 「ハア……」

今日もお賽銭が集まらないわねえ。しかも……

魔 「ん〜！この三色団子美味しいな♪」

アリ 「貴女は少し遠慮と言うものを覚えた方が良いわよ？」

……お賽銭もいれない客が二名……。まだアリスは遠慮してるからいいけど、魔理沙は完全にくつろいでるし……。何で何時もここに来るんだろう……

魔 「霊夢〜！お茶をくれ〜！」

霊 「ハイハイ、わかったわよ。」

アリ 「ごめんなさいね霊夢……。魔理沙が迷惑をかけて……」

霊 「いいわよ、あんたが謝らなくても……。あんたもゆっくりしていきなさい」

アリ 「……ありがとう」

まあ、アリスも魔理沙に困らせられてるしお互い様ね……

霊 「はい……。どうぞ」

魔「おつ、サンキュー！ 霊夢！」

全く、この元気は何処から来るのかしら？

シン「ん？ 皆さんお揃いでしたか……」

アリ「あら、シンジさん？」

魔「お？ シンジじゃん！ どうしたんだ？」

霊「いらっしやいシンジ！ 今日はどうしたの？」

魔「つて霊夢!? 私の時と態度が全然違うじゃないか!？」

霊「あんたは家に来てくつろいでるだけじゃない。そのてん、シンジはお賽銭を入れてくれたり、手伝ってくれたり、かっこよかったですから全然問題ないわよ。」

シン「……最後のは良く分かりませんが、今回の用件はお嬢様が皆さんを連れて来いと申されましたので……」

霊「レミリアが？ 貴方も大変ね？ あんなお子様吸血鬼の言うことを聞くななんて……」

シン「私は別に問題ありません。」

魔「でも何か面白そうじゃないか！ 早く行こうぜ！」

アリ「……仕方ないわねえ」

霊「まあ、シンジにはお世話になってるし、わかった。付き合うわ。」

と言うことで私たちはシンジについていった。

く白玉楼く

妖夢 視点

妖「あっ!? 幽々子様! また摘まみ食いをしたでしょう!」

幽「いやくねえ、妖夢く。摘まみ食いじゃないわよおく? 私がしたのはあ・じ・み・よ  
?」

妖「味見のわりには先ほど皿に盛り付けたものが一皿無くなっているのですが……」

幽「気のせいじゃないのく?」

はあく。この人は全く……。あの異変以来元に戻ったと思ったら、何時もの困った人  
になつてしまった。

咲「失礼します。」

妖「咲夜さん? どうかされたんですか?」

咲「お嬢様が皆さんを集めると仰られたので来ました。」

幽「ふあら？ふあなたのふゆひんふあ？（あら？貴女の主人が？）」

妖「……幽々子様……食べながら話すのはお止めください……。」

咲「相変わらず貴女の主人は自由人ね？」

妖「全くですよ……。」

もういい加減慣れましたけどね？

幽「（ゴクン）じゃあ行きましようか。」

妖「ええ、わかりました。」

咲「こつちよ。ついてきて。」

私たちは咲夜さんについていき、紅魔館へと向かった。

シンジ 視点

そして今に至ると言うわけです。まさか雪台戦をすることになるとは……だからこの前主さんが雪をたくさん用意してたんですね？

ちよ!?!シンジさん!?!それはメタ発言なのでやめてくださいよ!?

シン「……ではチーム分けをしましょうか?」

無視はやめてくだs (ピチューン)

レミ「チームはもう決めているわ! 私たち紅魔館チームとその他チームよ!」

霊「……チーム名はおいておくけれど、そつちは戦力過多じゃない!? 特にシンジが!」

レミ「安心しなさい! 皆能力は無しだから!」

霊「そ、それでも身体能力とか色々ヤバイでしょう!?!」

魔「でも、シンジをいれないのは流石に……」

霊「うっ……」

シン「でしたら、私一人対全員で良いのでは?」

霊「え?」

アリ「さ、流石にそれは……」

フラ「お兄様一人でやるの? 私もお兄様と一緒にいい!」

咲「ま、まあそれなら……」

妖「まあ、前回の借りを返したいですしね？」

幽「あらあら、面白そうね？良いんじゃないかしら？」

シン「それでは、それでいきましよう。」

闇シン（ほう？面白そうな事をしてるじゃないか？）

シン（もう一人の私？一体どうしたんですか？）

闇シン（なあ、俺もまぜてほしいと思っただけだ。なあ、俺と変わってくれないか？）

シン（……別に構いませんが、余りやり過ぎないようにしてくださいよ？）

闇シン（ああ、分かっているさ。）

霊夢 視点

シン「……………」

霊「シンジ？どうしたの？」

闇シン「クハハハハ！とうとう俺の出番だな！」

レミ「ああ、これが例の闇シンジってヤツね？」



咲「は、はい。異変の時よりはマシになったらしいですが……  
あらか？これはまさかの死亡フラグ？

闇シン「ハッ！俺が相手してやるよ！さあ、満足しようぜ！  
デスヨネー

そして試合が始まり少ししてから……

闇シン「クハハハハ！オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！」

フラ「フフフ♪まだまだ終わらないよ？」

魔「ちよ!?タンマタンマ！」

アリ「……どうすればいいの？」

幽「あらあら、これは不味いわね。」

妖「よ、避けるので精一杯ですよ！」

咲「これは……どう考えても無理ね……」

レミ「へブツ!?わっぷ!?ちよ!?ぼわっ!?ストツ!!」

これは收拾がつかないわ。勝てる気がしない……そしてレミアが雪だるま状態に

……

後にシンジとフラン以外は雪に埋もれたそうなの……

シン（……交代しないほうが良かったですかね？）

美（……皆楽しそうですね……）

## 帰宅

シンジ 視点

咲「もう……大丈夫ですか？」

シン「ええ、ご心配をお掛けしました。」

靈「本当よ……。闇状態の貴方は強すぎるし、幻想郷自体が終わったと思ったわよ……。」

妖「でも……無事でよかったです。」

シン「皆さん……。」

……皆さんは私の事をそんなに心配してくれていたのですか……。こんな私を……

紫「シンジ……まさかまだ過去の事を……？」

シン「……大丈夫ですよ……大丈夫……。」

私は……もう一人の私に言ったんだ……仲間を守るって……だから、過去を断ち切らなければならぬ……

魔「過去の事？」

アリ「シンジさんの過去に何かあったの？」

シン「……すみませんが、余り話したくないので私がいなくときに紫さんに聞いてください」

幽「……分かったわ……でも辛いことがあったら言っただけいいね？ 私たちはもう仲間なんですから」

シン「ありがとうございます……」

そういつていただけると嬉しいですね……なんだか不思議な感じがします

紫「じゃあ私は帰らせてもらうわね？ 久しぶりに動いたから少し休みたいの……」

霊「まあ、あんたが動くなんて滅多に無いものね？」

紫さんはスキマを開き、姿を消した。

魔「よし！ 異変も終わったことだし、また宴会しようぜ！」

アリ「貴女は本当に宴会が好きねえ……」

魔「いいじゃねえかよ別に！」

霊「そして私の神社が使われると……」

シン「……また私が手伝いますよ」

霊「ありがとう、シンジ（これでシンジと二人つきり！……計画通り）」

今僅かに霊夢さんが微笑んでいたような気が……

妖「そう言えば、闇のシンジさんはどうされたのですか？」

シン「もう一人の私は……私の影として生きています」

魔「影？」

シン「簡単に申しますと、私の心と融合した……と言うことです」

幽「融合？大丈夫なの？」

シン「ええ問題ありません……」

アリ「そう言えば、私と咲夜のスペルをあつさり防いだ剣は一体なんなの？」

シン「あれは外の世界のある神話に伝わる伝説の剣です。」

魔「へえ、伝説って？」

シン「ええ」

妖「……会話になってませんよ？」

咲「では私たちも帰りましょうか？」

シン「ええ、そうですね……」

幽「たまにはここにも来てちょうだいね。最高のおもてなしをさせていただくわよ？主に妖夢が♪」

妖「やっぱりそうなりますよね……。でも元からそのつもりですので、何時でもいらしてください」

シン「それでは遠慮なくよらせていただきます」

それにしても、紅魔館に帰るのも……。久しぶりに感じますね？

アリ「私も帰るわね？流石に疲れたわ……」

霊「そうね……。私も帰るわ。今回の異変はいろんな意味で厳しかったからね」

妖「それではまた……」

これが……。仲間と言うものですか……。居心地のよいものですね……

私はそんなことを思いながら紅魔館に向かっていった……

レミリア 視点

レミ「そんなことがあったのね？」

咲「はい……シンジさんの過去に何があったかは分かりませんが、私は彼の力になってあげたいと思いました……」

シンジの過去に一体何が……？それに闇のシンジか……兎に角二人が無事に帰ってきてくれてよかったわ

レミ「それにしても、貴女がボロボロになってたのにはビックリしたわ……」

咲「ご心配をお掛けしました……。つと、そう言えば明日また博麗神社で宴会が開かれるみたいですよ？」

レミ「また？あいつらも本当に宴会が好きなのねえ……。分かったわ、下がっていい

わよ？」

咲「それでは失礼いたします。」

……シンジの過去……。私の能力でも運命を覗くことは出来なかった……。一体何故？

フラン 視点

皆！ひさしぶり♪フランだよ♪

さつきお兄様と咲夜が帰ってきたんだけど咲夜がボロボロになってたのにはビックリしたな。お兄様に聞いたら「私のせいで皆さんに迷惑を掛けてしまいました……」って言うってたけど何があつたんだろ？

シン「フラン？一体どうしたんですか？」



フラ「んくん、なんでもないよ♪」

今気にしても仕方ないね？二人とも無事に帰ってきたし、今はお兄様に遊んでもらお

♪

シン「では次は何をしますか？」

フラ「じゃあ……U・N・Oがいい！」

シン「分かりました。では用意をしますね？」

また詳しいことは今度聞こうかな？お兄様が無理してなければいいんだけど……

## 正月特別編—I

シンジ 視点

3

2

1

『明けまして、おめでとうございます！』

レミ「今年も終わってしまったわね」

フラ「でも楽しかったよね♪」

咲「ええ、色んな事がありましたからね」

美「シンジさんと出会ったり、皆で遊んだり……」

パチュ「私は何時も通りだったけどね？」

シン「そうですね、私も皆さんと出会えて嬉しかったです」

本当、色んな事がありました……。紫さんに幻想郷に連れてこられたり、お嬢様たちと戦い執事として雇われたり、もう一人の私が現れたり、かなり変わった一年でしたが、私としてはとても充実した一年でした……

小「私は……何時も通りパチュリー様に無茶振りをさせられましたけど……」

パチュ「それが貴女の仕事でしょう？それに、シンジよりはマシよ？シンジはこの仕事だけじゃなく、寺小屋で子供に勉強を教えたり、霊夢のところで手伝いに行ったり、妖夢の修行相手に行ったり……」

小「……すみません、私はまだまだでした……」

シン「いえ、私は全然構いません」

今ではこの生活も楽しく感じてきましたしね

レミ「たまには休憩をとつてもいいのよ？」

フラ「倒れないでね？お兄様……」

シン「ええ、ありがとうございます。お嬢様、フラン」

やはり仲間がいると言うのは嬉しいものですね……

美「では私にも休息を！」

咲「貴女はシンジさんを見習って働きなさい」

美「……はい」

……咲夜さんがナイフをもって含みのある笑顔をしている。流石にこれは反論できませんよね？

レミ「さて！では皆は去年はどんな一年だったか……単語にして表して見ようじゃない！」

フラ「あ！なんか面白そう！」

ふふ、二人とも楽しそうですね。まあ、姉妹二人揃って正月なんて、今までしなかったでしょうし、当然ですかね？

レミ「よし！じゃあまず私からね！私はやつぱり『運命』ね！この幻想郷に来てシンジと出会って、フランや皆と楽しい時間を過ごせる……そんな運命になって私はすごく嬉しいわ！」

咲「ええ、これがお嬢様の望んだ運命でしたものね……」

ふふ、お嬢様らしいですね……

フラ「次は私だね♪私は『初めて』かな？お兄様と出会って、私は色々な事を経験してきたもん！お姉様とも一緒に仲良く過ごせるとても嬉しいし♪」

フランは地下にずっと閉じ込められてましたからね……よほど嬉しいのでしょね

咲「次は私ですね？私は『願い』ですかね？お嬢様と妹様の仲が元に戻ってくれる事

を願っていたので、それが叶った今、私はとっても幸せです」

レミ「ありがとうございます、咲夜……」

フラ「咲夜も私の大切な家族だよ♪」

咲「ありがとうございます、妹様……」

咲夜さんは優しい方ですね……これこそ正に従者の鏡です。私も見習わないといけませんね

美「私は『強者』ですね。私よりも強い方が現れて、武道家の心が燃え上がりましたからね！未だにシンジさんには勝てませんが……」

咲「当然でしょう？それに貴女のその氣力を仕事の方にも回してほしいのだけれど……」

……：武術は明らかに美鈴さんの方が強いのですけれどね？私も武器を持たなければ確実に勝てませんしね……

パチュ「私は取り敢えず『面倒』かしら？レミイが起こした異変以来、魔理沙が本を盗もうとしてやって来るのよね……」

小「そうですね、でもそのたびにシンジさんが追いついていますが……たまにひどい追いつき方をしますよね？」

パチュ「この前は魔理沙のマスタースパークをスペルでコピーして跳ね返したりね？」

レミ「なにそれ、酷い……。つて言うか貴方はそんなことまでできるの？」  
フラ「お兄様スゴイ！」

シン「まあ、私の能力が能力ですし……」

本当、私の能力ってチート過ぎると何時も思いますね……

小「私はパチュリー様と同じなのでパスします！」

パチュ「まあ、何時も私に付き添いで仕事しているだけですものね？」

シン「では最後は私ですか。私は……『仲間』ですね。」

レミ「仲間？」

シン「ええ。私は皆さんと出会い、仲間の大切さを知った……。そして……もう一人の私も……」

咲「そう言えばシンジさんの過去は……」

シン「おっと、それ以上はいけませんよ？咲夜さん。まだ本編では話してないんですから……」

咲「そうでしたね」

まあ、読者の皆さんも大体は予測できているでしょうが、真相は本編を楽しみにしておいてください。

レミ「さて、と。これで皆発表し終わったし、本日の締めと行きましょう。」

フラ「それじゃあ皆♪」

咲「今年も皆さんにとって……」

美「素晴らしい一年でありますように！」

小「心から」

パチュ「願っているわ」

シン「今年も私たち紅魔館一同と本小説を」

『ヨロシクお願いしますー！』

今年も

皆さんにとって

素晴らしい

一年で

ありますように……



## 暗躍する影

〽  
???  
〽

? 「ふん……奴はこれを突破したか……」

? 「まあ、このくらいはクリアしてもらわないとね。キヒヤハハハハ！」

? 「それにしてもまさか、こんなところにいたとはな……」

? 「……………」

? 「どうしたんだい？ さっきから黙っちゃってさあ？ キヒヒヒ！」

? 「何でもないわよ……」

? 「レイ、バクヤ……次の行動に移るぞ……」

バク 「ハイハイ、わかりましたよ。全く、テメエは真面目すぎるぜ、キヒヒヒ！」  
レイ 「……ええ」

待っているよ、お前は必ず俺の手でブツ壊す……八神シンジ！

紫 視点

紫 「……………」

——「大丈夫ですよ……………大丈夫……………」

シンジはあんなことを言っていたけれど、本当は辛いでしょうね……………  
それに……………《彼ら》も動き始めたようですわね

？「紫様？一体どうなされましたか？」

この子は藍、私の式であり、九尾と呼ばれる大妖怪よ

紫 「……………ついに彼らが動き始めたわ……………」

藍 「……………ついに始まりますか……………」

紫 「ええ、明日皆にはあの事を話すわ」

藍「彼の事ですね？」

紫「ええ、彼の……八神シンジの過去を……」

シンジは新たな能力の覚醒に気付いていたみたいだったし、その事も話しましょうか

……

シンジ 視点

シン「……」

私は今、紅魔館の屋根の上にいる……

シン「……私は何故あんなことを……」

私は後悔している……皆を傷つけ、苦しませてしまったことを……

闇シン（けっ！なあにしよげてんだよお？らしくねえなあ）

シン「もう一人の私ですか……何の用ですか？」

闇シン（おいおい、つれねえこと言うなよお？）

シン「元はと言えば、貴方のせいなのですがね」

闇シン（クハハ！言うじやねえか！あの程度の闇に呑まれるテメエもテメエだがなあ？）

シン「……分かっていきますよ。私の意思が弱いせいで……過去を断ち切れなかった私のせいだつてことは分かっている……でも……」

闇シン（まあ、テメエは自分の信じる道を進めばいいんだよお。その先に答えがあるだろうさ）

シン「答え？それは一体……」

闇シン（いずれわかるさ。いずれな）

それだけ言うと、もう一人の私は姿を消した

シン「言うことだけ言って消えましたか……全く、何考えてるんでしょうか……」

さて、そろそろ寝ましようか……

（翌日）

レミリア 視点

レミ「よし、博麗神社に行くわよ！」

シン「お待ちください、お嬢様……」

レミ「？どうしたの？シンジ」

シン「少し人里に用事があるので、先に行つてもらえませんか？」

人里に用事？何の用事かは気になるけれど……

レミ「わかったわ。じゃあまた後でね？」

咲「シンジさんお気を付けて」

フラ「お兄様も早く来てね？」

シン「ええ、分かりました」

美「よし！今日は思いっきり飲みますよー！」

咲「貴女は仕事をしなさい……と、言いたいけど、シンジさんの分身がいるから問題

ないわね？」

ホント、シンジの万能さには毎回驚かされるわね……

そうして私たちは博麗神社へと向かった

く博麗神社く

レミ「よし、ついたわね」

咲「……?あの集まりは?」

パチエ「何かしらね?」

フラ「何かあつたのかなあ?」

…?  
あれは咲夜が言っていた八雲紫かしら?それともう一人知らない奴がいるわね  
……

霊「あつ!皆やつと来たのね?」

魔「なんか紫から話があるみたいだぜ？」

紫「シンジはいないみたいね？」

パチエ「シンジがいないと都合悪いの？」

紫「いえ、むしろ都合よ？なんせこれから話をするのは……シンジの過去の事なのだから……」

『っ!?!?』

ユユ「あら〜？もう話してくれるの〜？」

紫「貴女は大体わかっていたでしょう？」

ユユ「まあね〜♪」

妖「だからシンジさんがいない方が都合が良いって事だったんですね？」

紫「多分シンジも気付いてると思うのだけれどね？」

シンジが気付いてる？そこまで勤がいいといよいよチートね？

アリ「ところで、そちらの貴女は誰？」

藍「私は八雲藍。紫様の式であり、九尾だ。」

九尾ねえ……また珍しい種族を式にしているものねえ……

紫「じゃあ話すわよ？彼の……八神シンジの悲痛な過去を……」

……過去のシンジに……一体何があったのかしら？



## オリ主のスペカ紹介

と、言うわけで清く正しい文さんと一緒にシンジさんのスペカを紹介していきたいと思えます！

文「どうも♪清く！正しく！射命丸です！今回は宜しくお願いします！」

はい、宜しくお願いします。

文「それにしても、何故私を呼んだんですか？」

やっぱり情報集めといったら文さんでしょ！っと思ったからです

文「へえ、そういうことですか。分かりました！ではこの射命丸文！全力でこの任につかせていただきます！」

そう言って貰えて嬉しいです♪ではもう一人のゲストをお呼びします！

文「え？もう一人いるんですか？」

はい！この方です、どうぞ！

フラ「はい！フランだよ♪宜しくね♪」

文「あややや、ゲストってフランさんでしたか。で？なぜフランさんと呼んだんですか？」

それはモチロン……フランちゃんが一番好きだからだ！

文「……それだけ？」

それだけです！

フラ「えへへへ♪ありがとうね、主さん♪（ニコツ）」

ふう……俺は後百年は戦える……

文「……では最初のスペカ紹介をします！まずはこちら！」

光符『ヘヴンズサンシャイン』

発動後周りに光の波動を放ち、相手のスペルを強制終了する

文「これは余りにも鬼畜じゃないですか？」

まあ、主人公補正ですよ

フラ「お兄様はかつこよくて一番強いもん！」

フランちゃんはいいい子だな

文「では続いてはこちらです」

謎符『ブラッディフォー』

自身が赤く光り、相手のスペルから身を守り相手に倍の威力で跳ね返す。ただし、跳ね返すときは必ず直線のレーザーなので、当たる事は殆どない

文「これの使い道はどんなときなんですか？」

咄嗟の防御法ですね。シンジさんのスペルを思い返してみると、防御系のスペルが多いじゃないですか

フラ「確かにそうだね」

本人もあまり戦いたくないみたいですね

文「なるほど、では次！」

星符『スターライトユニバース』

前方に複数の魔方陣を展開し、全ての箇所からそれぞれ色の違う弾幕を放つフラ「このスペルってお星さんみたいにとつてもキレイだよね♪」  
名前の通り、宇宙に輝く星をイメージしたスペルですからね

文「それは私も是非見てみたいですね♪では次！」

天裁『ジャッジメントレイ』

光輝く極太のレーザーを一直線に放つ。威力はかなりのもので、全力でやると並の妖怪では消し炭になるかもしれない

文「確かレミアさんのグングニルを跳ね返しましたよね？」

ええ。威力は説明でも書いた通りで、上手く調整しないと相手が不味いことになるかもしれません

文「さらつと言ってますけど、それって凄まじいことですよね？」  
フラ「さすがお兄様だね♪」

次のスペルは……

氷壁『ブリザードウォール』

氷の壁を造り仲間を相手の攻撃から守る。力は余り消費しないが、強度もそこまで高くない

文「これはなぜ創ったんですか？他のスペルがあれば十分な気がしますよ……」  
シンジさん曰く、少し魔法っぽいのも使ってみたかったみたいですよ？

フラ「最近だとパチュリーに魔法を教えて貰ってるよね？」

文「意外とロマンチストなんですかねえ？」

次のスペルです！

奏符『癒しの鎮魂歌』

癒しの波動を含む音色を奏で、周りにいる者の傷を癒すスペル

文「これまた変わったスペルですね？」

戦闘用ではありませんからね？仲間を傷付けたく無いと思いいこのスペルを創ったそうです

フラ「じゃあ次だね！」

## 劍技『天翔風臥斬』

大きく上に飛び上がり、風を纏いつつ相手へと向かい切り裂くスペル。ただし、武器によつて攻撃方法が多少異なる

フラ「武器によつて違うつてどうゆうこと？」

作中で使つたのは双剣でしたので、剣を前にクロスさせそのままの勢いで相手を斬ります。他には例えば、居合の場合でしたら風を纏うのは全武器共通なんですが、攻撃方法は相手に近付いた時に一瞬だけ刀を抜いて相手を斬り再び納めると言う方法です。

文「やつぱり人外ですね……。他にもいろんな武器が使えるんでしょう？シンジさんには勝てませんよ」

次のスペルはこちら！

## 死花『デストラクト・オブ・ローズ』

蕾状態の花が、徐々に薔薇の花を咲かせ当たつた生物以外のものを死滅させる。だが効果とは対称的に、キラキラと輝いてとても美しく幻想的である。

因みにこれは彼の主人であるレミリア・スカーレットが考案したものである

文「あややや、これはまたえげつないスペルですね……」

シンジさんも自覚しているみたいですね？

フラ「じゃあ次！」

闇符『ダークネスアビスファイア』

辺り一面を暗闇で覆い、相手の視界を奪うスペル。ただし発動中は他のスペル・弾幕及び能力の発動を行うことが出来ない

フラ「効果は強いけど制限が多いね？」

文「シンジさんにとっては大したことが無いように思えますが……」

そりゃ、物理で攻撃するなり出来ますからね？

では、次のスペルです！

死魔『デッドエンド・ビッグバン』

前方に巨大な魔方陣を展開し、隙間なく高威力の弾幕を放つ。避けることはほぼ不可能であり、威力も桁外れである。

文「……なんですかこれは？」

俺にもわかりません♪あっはっはっはっ！

フラ「でも作中じゃあ、魔理沙のマスタースパークで相殺してたよね？」

なんだかんだ言ってシンジさんも本気じゃありませんでしたしね。それに、本気出すと幻想郷が壊れかねませんよ？

文「そんなに!? スペルカードルールとは一体……うごごごごご」

フラ「次のスペルはこれだね♪」

魔剣『ダーインスレイブ』黒く漆黒のオーラを纏いし悪魔の魔剣。モデルは、北欧神話に出てくる伝説の魔剣である。攻撃と防御とでは効果が変わる。

攻撃⇒斬りつけた際、相手の傷口から血を吸い取り能力を上昇させてゆく。

防御⇒振りかざすことにより、相手のスペルや弾幕を一瞬でかき消す。

文「また随分と桁外れなスペルを創りましたねえ〜？」

まあ、創ったのは闇シンジさんですし仕方ないかと……

フラ「一度闇のお兄様とも戦ってみたいなあ〜」

シンフラは世界の終焉とかゆうタグが貼られそうなのでやめてください……

文「次のスペルはこれですね？」



魔符『デビルズナイトゲート』

発動後に巨大な暗黒の門を出現させ、闇の覇気を相手に発射する。この門の前に立つだけで足がすくみ、寒気さえ感じる。

文「怖いスペルですね？門の中に何かいるんじゃないですか？」

それは俺にもわかりませんよ。でも、闇シンジさんしか使えないんですけどね……

フラ「ふーん……じゃあ次がラストだよ！」

終焉『イノセント・零』

自らがどす黒く禍々しいオーラを纏い、自身の能力を三倍にまで引き上げる。

文「……ここまで来たらスペルカードなんて無かったって言いたくなるのですが……」

俺もそう思います

フラ「こうして見てみると、お兄様のスペルって強いのはつかだね？」

あの人自体能力がおかしいですし、今さらですよ

文「取り合えず、シンジさんに勝てないのはよくわかりました」  
今回は2人ともありがとうございました！

文「いえいえ、こんなことでよろしければまた呼んでください♪」  
フラ「またねえ♪主さん♪」

………フランちゃんは可愛いなあ♪

## 過去の絶望と悲劇

（過去）

八神シンジの幼少時代。今彼は父が運転する車の中にいる

父「シンジ！お前は大人になったら何になりたいんだ？」

シン「コックさん！コックさんになってお父さんよりもスゴい料理を作るんだ！」  
彼の父は有名な料理人であり、5つ星レストランの店長を務めている

父「はっはっは！言っただろ？」

母「貴方ならすぐにお父さんを超えられるわよ？」

シン「本当!？」

父「おいおいお母さん、冗談はやめてくれよ」

母「あら？本当の事だと思ったのだけけれど？」

父「全く……お母さんは手厳しいなあ」

シン「ハハハハ♪」

何時も通りの風景。何時も通りの時間。そんな楽しい日常を過ごしていた彼らであつたが、この後に悲劇が襲つた……

父「ん？あれは何だ？」

目の前から光る何かが近付いてきた。そして姿がはつきりとした瞬間、危険が分かつた

父「ま、まずい!？」

近付いてきたのは、居眠り運転をしていたトラックだった。シンジの父は直ぐ様ハン

ドルを切るがその先は運が悪く……

シン「うわあ!!」

母「きやああああ!!」

父「ぐあああ!!」

ドガン!!

ガソリンスタンドスタンドに激突してしまった……

「お、おい!?車がガソリンスタンドに突撃したぞ!」

「直ぐに救急車と消防車だ!急げ!」

その後、シンジたちは病院に運ばれていった……

「先生……この家族は助かるのでしょうか……」

「……残念ながらムリだ。彼らはすでに……」

シンジたちは既に死んでいた。身体にも火傷を負い、心肺停止の状態だった。だがしかし……

シン「うつ……んん……」

シンジの体に反応があった……なんと、奇跡的に復活したのだ

「なっ!?ここ、子供が生き返った!?!」

シン「(っ)……(っ)は……?」

「(っ)は病院だ。君は事故にあい、一命をとりとめたんだよ」

シン「事故……?っ?!?そうだ!お父さんとお母さんは!?!」

「……(っ)めん」

シン「そ、そんな……嘘だよねえ？嘘だと言つてよ！お医者さん！」  
「……………」

シン「お父さん……お母さん……うわあああああああああ!!!」  
これが、彼の一つの絶望……それからシンジは、笑顔と言うものを忘れた……

〈数年後〉

あの事故以来、シンジは自らの手で生きてきた。しかも不思議なことに、事故にあつてから何故か人間の能力を超えていたのだ。そして中学に入ったのだが……

「お前気持ち悪いんだよ！あっち行けよ！」

「あいつつて人間じゃないよなあ？」

「あの身体能力もそうだけど、見た目とかもねえ？」

「蒼い目に銀髪つて、絶対日本人じゃないよねえ？」

「分かるわあ。アイツ絶対厨二病だぜ？」

あらゆる人から罵られ、同級生だけでなく、先輩や後輩、更には先生までもが嫌って来た……。だがそんなある日、彼が授業をサボって屋上で寝ていると……

シン「……………」

？「貴女はそこで何をしているんですか？」

シン「……あんたは？」

？「私はレイ。白雪レイです。貴方は？」

シン「……シンジ。八神シンジだ」



レイ「シンジさんですか。いい名前ですね？」

シン「……お前は俺を軽蔑しないのか？」

レイ「何故ですか？ 貴方を軽蔑する理由は私にはありませんよ？」

シン「……不思議な奴だな」

レイ「ところで、今は授業ですよ？ 受けなくていいんですか？」

シン「俺は皆から嫌われている。いてもいなくても変わらない存在……寧ろいない方がいい存在だ。そう言うお前は？」

レイ「私は今日編入してきたばかりなので授業は受けなくてもいいと言われたんです」

シン「……そうか」

そんなことを話していると、レイはシンジの横に座った

シン「どうした？」

レイ「貴方の事をもっと知りたくなったのです。教えてくれませんか？」

シン「……つまらないかもしれないぞ？」

レイ「構いません」

シン「……変わった奴だな」

レイ「よく言われます」

それからシンジとレイは話し合った。シンジは自分の過去など、辛い人生についてを

語った。レイはその話を真剣に聞いていた。二人はそんな話をずっとしていた。時が経つのを忘れるほど……

レイ「そうですか……ご両親が無くなってしまったのですね……」

シン「ああ。だが気にしないでくれ。今は大丈夫だから……」

レイ「……シンジさん、私と友達になってくれませんか？」

シン「何？」

突然の誘いだった……。彼に友人など出来たことが無かったからだ。

シン「……俺みたいな奴でいいのか？」

レイ「はい。貴方だからこそです。私には貴方の気持ちが分かる。貴方は本当は心の中では誰かと仲良くなりたいたいと思っっている。」

シン「……………」

シンジは嬉しかった。彼にはこれまでこんなに親密に接してくれる人などいなかったからだ……

レイ「どう……でしょうか？」

シン「……お前は本当に不思議な奴だな。だけど……ありがとう。これからよろしく頼む、レイ」

レイ「こちらこそ♪」

こうして彼らは友達となった。これで再び彼に笑顔が戻ってくれる……そう思った。だが……再び彼に絶望が訪れ、更に変えることになるとは誰も思わなかった……

## 失った世界

シンジ 視点

さてと、皆さんは恐らく私の過去の話を聞いているでしょうね。それが終わるまでは人里で時間を潰しましょうか……

慧「む？シンジか？」

私がブラブラと歩いていると、後ろから声をかけられた

シン「慧音さんですか。どうしましたか？」

慧「やっぱりシンジだったか。聞いたぞ、また異変を解決したみたいだな」

シン「どこでその情報を？」

慧「風の噂だよ。ところで今度お前に会いたいと言う奴がいるんだが時間はとれるか？」

シン「別に構いませんよ？でしたら明日でも構いませんが……」

慧「そうか、ありがとう。彼女にはそう伝えておくよ。ところでシンジはここで何をしていたんだ？」

シン「それは「あつ!?あの方は!」……えっ?」

「本当だ!シンジ様〜!」

「シンジ様を捕まえるわよ!」

「ええ!!」

シン「な、なんですか!?!これは!?!」

慧「す、すまない。言い忘れていた。実は最近、お前の噂が広がったせいで《八神シンジファンクラブ》って言うのが設立されたんだよ」

シン「の、呑気に解説している場合ですか!? 取り敢えず私は逃げます! また明日会いましょう!」

くっ?! 取り敢えず今は全速力で逃げることを考えましょう!

慧「……シンジも苦労人だな」

私はこの時、あの事を思い出してしまった。私の大切に思っていた……ただ一人の女性……私の事を好いてくれた、ただ一人の女性の事を……

く再び過去へく

あれから俺は、レイと共に過ごしてきた。そして時は過ぎ、高校生となった。

レイ「ねえねえシンジ君！」

あれからレイは俺の事を君付けで呼ぶようになった

シン「どうした？」

レイ「私たちそろそろ付き合ってもいいんじゃない？」

シン「……何？」

こいつ……本気で行っているのか？

レイ「だって私シンジ君の事好きだし！それとも私じゃイヤ？」



レイは俺と比べるとかなり可愛い部類だ。俺と違い、周りの奴等からかなりの人気がある

シン「そんなことはない。だが俺はお前とは違い皆から嫌われている。そんな俺がお前と付き合うなど……」

レイ「別にいいよ！私はシンジ君以外には興味ないし！」

シン「レイ……」

正直俺はレイの事が好きだ。こんな俺でも優しく接してくれて、好きと言ってくれた。こんな奴は今までいなかった……だからレイの事を好きになったのかもな……

シン「……本当に俺なんかでいいのか？」

レイ「何度も言わせないでよく。私はシンジ君の事が好きなの！」

レイは頬を少し赤らめて言ってきた。俺は嬉しかった。初めて俺の事を好きと言ってくれて……俺の初めて好きになった女性……初めて大切に思った女性……そんなレイを俺は……

シン「ありがとう、レイ……。俺もお前が好きだ。こちらこそよろしく頼む」

レイ「っ!? うん！」

レイは涙を流していた。嬉しそうに微笑んでいた。そんなレイを見て俺はとても愛らしく思えた。彼女がおれの唯一の希望となった

俺達が付き合い初めて暫くが過ぎた。そんなある日……一通の手紙が届いた

シン「またレイからか? 今度はなんだ?」

レイは毎日のように手紙を送ってくる。今回も同じだろうと思った。しかし、その手

紙を見た瞬間、俺は目を疑った

——白雪レイは預かった。返して欲しくば一人で廃工場に来い……

シン「……………」

俺には殺意が湧いてきた。ここまで人を殺したいと思ったのは初めてだ

シン「……………今すぐ行く。無事でいろよ……………」

俺は急いで廃工場へと向かった……………

〳 廃工場 〳

シン「言われた通り一人で来たぞ！」

「やっと来たか……」

シン「……レイはどこだ？レイに何をした？」

「おいおい、挨拶くらいしろよ？因みに、お前の探しているレイさんはここだ」

シン「!?レイ！」

そこにはロープで縛られ、ボロボロのレイの姿があった……

レイ「ごめんね……シンジ君……」

「俺達が好きだったレイさんがお前と付き合って俺達の相手をしてくれなかったから罰を与えていただけだ」

「もしレイさんを返して欲しければ、おとなしく俺達にボコられる！」

シン「……それでレイは返してくれるのか？」

「もちろんだ！俺達は貴様がムカつくだけだからな！」

シン「……分かった」

レイ「シンジ君!？」

「はっ！いい返事だ！」

シン「グハツ!？」

レイ「うっ……」

「はっはっはっ！まだ始まったばかりだぜ？」

シン「うぐっ!？」

それから俺は、ボロボロになるまで何度も何度も暴行を受けた……

シン「うっ……ぐはっ……」

「クツクツク、こいつ血まで吐きやがったぜ！」

「ここまでやれると気持ちがいいな！」

「さて、そろそろトドメをさすとするか！」

シン「なん……だと……」

男たちは懐からナイフを取り出した

シン「……最初からレイを返すつもりなどなかったってことか……」

「理解が早くて助かるぜ。前からお前の事はムカついていたしな？ じゃあな……」

レイ「このままじゃシンジ君が……私のせいで死んじゃう……私がいなければ……」

レイは足元をふらつかせながら立ち上がった

シン「レイ!?!」

レイはゆっくりと大きな地割れへと向かった。この廃工場は地盤が弱いため、地割れが多いのだ

レイ「シンジ君……今まで一緒にいてくれて……ありがとう」

シン「ま……まさかお前!?!やめろ!」

レイ「……さようなら」

レイは別れを告げて地割れの中へと飛び込んでいった……

シン「っ?!? くっ……レイいいいいいいいいいい!!!」

そんな……こんな事って……!?

俺を愛してくれる者も、俺が愛すべき大切な人も……皆俺の前から消えていった……

「なんだと!?! しまった!?! レイさんが……」

「くっ……貴様のせいだぞ! シンジ! 貴様がいるからレイさんは!」

シン「……黙れよ」

『!?!』

シン「俺はもう……唯一の希望を失った。貴様等全員……クロス」



『なっ!?!』

シン「覚悟しろよ? 屑ども……」

『う、うわあああああああああ  
!!!!!!』

その後廃工場には、沢山の屍があり、その中心には……全身が返り血で真っ赤に染まった“化け物”の姿があった……

そしてその化け物の顔は……

薄く微笑んでいた……

## 彼の為に出来ること

霊夢 視点

紫「今話したのが、彼が味わった絶望……シンジの過去よ」

あのシンジにそんな辛い過去があつたのね……正直信じられないわね。あの誰にも優しいシンジが外では嫌われていただなんて……

魔「酷すぎるぜ！家族だけが事故で死に、周りの奴等から嫌われ、更には好きな奴まで失ってしまうなんて！」

アリ「シンジは正気を失わなかったの？」

紫「もちろん正気を失つたこともあつたわ。その証拠に、シンジは自分を妬み嫌うものを殺していった」

妖「そ、そんな!?あのシンジさんが!？」

紫「シンジは後悔していたのでしようね……。愛してくれるものも、愛すべきものも守れなかったのだから……」

紫は悲しげな顔でそう言った。紫も似たような経験があつたから気持ちはわかるのでしようね……

紫「それ以来、シンジは笑顔だけでなく、愛さえも忘れてしまった……」

咲「確かに……シンジさんの笑顔を見ることは少ないですね」

藍「だからこそ紫様は、シンジさんをこの世界に連れてこれば、彼を救えるのではないか……と思つたのだ」

幽「幻想郷は全てのものを受け入れる……拒むものなどないこの世界ならば、彼の居場所を作ることが出来るかもしれないわね」

確かにその通りね。シンジからしたら、この世界は理想郷であり、文字通り幻想郷かもしれないわね

レミ「……八雲紫、シンジを救うにはどうしたらいい？」

霊「レミリア？」

レミリアが怒ってる？シンジは今自分の家族も同じだから、嫌われていたのに腹がたつたのかもね

紫「……私の推測ではあるのだけれど、シンジは心のどこかで愛される事を望んでるのかも知れないわ」

霊「愛されること？」

紫「ええ、シンジは今まで愛されることがなかった……だからこそ、彼を愛することが何よりも救いになると思うわ」

シンジを愛する……か

フラ「だったら大丈夫だよ！」

レミ「フラン？」

フラ「だって皆お兄さまの事大好きだもん！」

レミ「……そうね。シンジは私の家族だもの、愛さない訳がないわ」

パチュ「レミイと妹様の言う通りね。もう何も問題ないわ」

美「シンジさんは大切な家族です！絶対に傷ついたりなんかしません！」

咲「貴女の言うことには同意するけど、その気合いを仕事の方にも回して欲しいもの  
ね？」

美「うっ……」

紫「もう一つ、シンジの事で伝えることがあるわ」

妖「もう一つ？まだ何かあるんですか？」

紫「ええ、それは……彼の新たなる能力よ」

なっ!?新たなる能力!?シンジには2つの能力があるって言うの!?

魔「シンジの能力は【創造する程度の能力】じゃなかったのか!？」

アリ「落ち着きなさい、魔理沙。つまりシンジにはもう一つ隠された能力があるって  
ハ)とっ。」

紫「隠されたと言うよりは、目覚めたと言った方が正しいかしらね」

咲「その能力と言うのは？」

藍「……【絆を紡ぐ程度の能力】」

レミ「絆を……」

パチュ「紡ぐ？」

紫「今までに不思議に思ったことはないかしら？彼の回りには様々な妖怪や人間が集まっている……それは皆の絆を彼の能力で繋いでいるから」

絆を繋ぐ？かなり変わった能力ね？紫の口調からして、シンジは無意識にこの能力を使っていたって事かしら？

フラ「確かに私の時にも不思議な温かい感じがしたよ」

幽「私の時にも不思議と落ち着く感じがしたわね」

霊「今までシンジは無意識にその能力を使っていたのね？」

紫「その通りよ。今はこの能力に気付いているみたいだけどね」

霊「所で、肝心のシンジは今何処に？」

レミ「シンジなら人里に行ってるわよ」

魔「人里に？一体なんで……」

シン「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

美「ん？今シンジさんの声がしたような……」

フラ「お姉さま！あっち！」

レミ「どうしたの？フラ……ん？」



階段の下の方に人だかりが……ってあれはシンジ!? ものすごい勢いで登ってきてるわよ!?

シン「誰か助けて下さい!」

アリ「……一体何があつたのかしら?」

妖「さ、さあ……」

咲「引き連れてるのは皆女性ですね……」

……これはまさかチャンス!?

霊「はいその人たちストップ!」

紫「霊夢?」

霊 「このお賽銭箱にお賽銭を入れた人は、シンジと握手が出来ますよ♪」

シン 「えっ？霊夢さん？」

「入れるわ！」

「私だって！」

「これでどうよー！」

幽 「なんか商売を始めちゃったわね〜」

紫 「……あの子は相変わらずみたいね」

「これは儲かるわね♪」

## バレンタイン—I

霊夢 視点

今日はバレンタインの日、ここには男子なんていないから普段はチョコなんて作んな  
いんだけど……

霊 「今年からはシンジがいるから気合いをいれて作らないとね」

主 「良妻アピールですね？わかります」

霊 「ち、違うわよ!?!私はまだ日頃のお礼を……」

つて、私は誰に言っているんだろう……

魔 「霊夢〜!」

霊「魔理沙？一体どうしたのよ？」

魔理沙が箒に乗ってやって来た

魔「チョコの作り方を教えてくれよ！」

霊「……そのくらいは自分でやりなさいよ」

魔「だって作ったことないからわからないんだぜ！」

霊「力一杯言うことじゃないでしょう……。はあ……。仕方ないわねえ。分かったわよ、基本的なことだけは教えてあげるわ」

魔「ああ！助かるぜ霊夢！」

なんで何時もこうなるのかしら……

妖夢 視点

さてと、今年はシンジさんがいますし、チョコレートを作らなければなりませんね

ユユ「とか言って、本当はシンジ君が好きなんですしょう？」

妖「な、ななな何言っているんですか!?ただ私は何時もお世話になっているお礼を  
……」

紫「まあ、シンジは皆からの人気者だから仕方ないわねえ♪」

妖「紫様まで何を!？」

幽「頑張りなさいね？妖夢♪」

妖「だから違う!?!……………訳では無いかもかもしれませんが……………」

主「なあにい？聞こえんなあ〜？」

今何か聞こえたような気が……………気のせいでしょうか？

藍「妖夢も苦労しているな」

ルナサ 視点

ふう……………やつと出来た……………。出来るまでに何度失敗したことか……………

リリ「20回以上は失敗したね？」

メル「姉さんは意外に不器用なものね？」

ルナ「うっ……」

この子達結構正直にものを言うわね……

リリ「取り敢えずこのチョコでシンジさんの気を引ければいいね♪」

ルナ「わ、私は別にそんなつもりは……!?!」

メル「このチョコならきつと大丈夫よ。思いつきりアタックしたら？」

ルナ「アタック!?!そそそそそそんな事できにやいわよ!?!」

主「そうですか、嘸み方凄いですね？」

ルナ「嘸んでない、嘸んでない！」

メル「どうしたの？姉さん？」

ルナ「な、なんでもないわ……」

気のせいかな？

リリ「じゃあ、幽々子さんにシンジさんの居場所を聞きに行こうか？」

ルナ「そ、そうね」

うう……緊張してきた……上手くいくかなあ？



レミリア 視点

さてと、シンジに渡すチョコレートを作らなきゃね

レミ「と、言うわけで咲夜？ チョコの作り方を教えて頂戴ね？」

咲「承知いたしました」

フラ「私も作る〜！」

咲「では3人で作りましょうか」

レミ「ええ、そうね」

フラ「よろし！お兄さまに喜んでもらうぞ〜♪」

数時間後……

レミ「……やっと出来たわね」

咲「お二人とも何度も失敗なさりましたものね」

フラ「お姉さまの作ったチョコはやたらと苦かったもんね？」

レミ「フランだってチョコ作ってる時に何故か爆破したじゃない……」

フラ「うー……」

咲「兎に角、お二人とも完成なさったので問題はないかと……」

……チョコ作りがここまで難しいと思わなかったわ

レミ「でもこれで……」

主「シンジさんのハートを掴むんですね？分かります」

レミ「ちよっ!?!何言ってるのよ!」

主「愛してるわ、あ・な・た♪を所望する!」

レミ「い、言わないわよ!そんなこと!」

咲「ど、どうされました?お嬢様?」

レミ「えっ?」

フラ「何かおかしいよ?お姉さま?」

レミ「な、何でもないわ」

きつと気のせいよね?

レミ「それより咲夜？客がたくさん来たみたいよ？」

咲「そのようですね？」

シンジ 視点

何でしょうか、咲夜さんが突然やって来て広間に来てって言い残して行きましたが

……

シン「咲夜さん？お待たせいたしました……」

『バレンタイン・FOREVER！』

シン「皆さんどうしたんですか？それにバレンタインって……」

レミ「今日はバレンタインの日よ？チョコを渡さないわけじゃないじゃない？」

皆さん……私のためにわざわざ作ってくださいたんですか……確かレイも作ってくれていましたね

霊「はい、シンジ！バレンタインのチョコよ♪」

コだ 霊夢さんのチョコはハート型のシンプルなチョコだが、見るからに美味しそうなチョコだ

魔「少し失敗しちゃったが、味には自信があるぜ」

形は少し崩れているが、色は淡いきれいな色でいかにも甘そうな感じだ

アリ「私も一応作ってきたわよ？」

アリスサンのはやたらとクオリティが高く、上海人形の形を型どったチョコだ。食べるのが勿体無く感じる……

妖「わ、私も作ってきました！」

妖夢さんのは小さいチョコが複数入っていて、それぞれ形や色が違い美味しそうだ

ルナ「わ、私からはこれです！」

妖夢さんのチョコと同じく複数入っていますが、少し形が崩れてしまっている。だが、何度も失敗し、努力したのはよく伝わる

パチュ「私からはこれよ？」

これはまたクオリティの高い……自分を型どったチョコを作るとは……。食べるの

に躊躇してしまいますね……

咲「私からはこのチョコを渡します」

ハートのチョコの真ん中に私の名前が書いてありますね？まさかこんな渡し方をされるとは……

レミ「最後に私たちの作ったチョコよ！」

フラ「受け取って！お兄さま♪」

お嬢様のチョコには「ありがとう」と、一言感謝の言葉が入っていて、フランのには「お兄さま大好き！」と書かれている。こう直接書かれると少し恥ずかしいですね？

シン「皆さん……ありがとうございます。次は私がお返ししますので、どうか楽しみにしててください」

霊「どんなのが返ってくるか楽しみね？」

妖「チョコのお返し……」

ルナ「シンジさんからチョコ!?!」

レミ「楽しみにしてるわね? シンジ」

シン「ええ、任せてください」

さてと、どんなのを作るか考えなければなりませんね……

主「どうぞお幸せに♪」



## 幻想郷の記憶

シンジ 視点

や、やっと終わった……いつの間にか握手会みたいになってて余りにも皆さんの迫力が強いものですから私も疲れました……

霊「お疲れ様♪珍しく儲かっちゃったわ〜♪」

……霊夢さんは嬉しそうですね

レミ「シンジ……さっきのはなんだったの？」

シン「人里でできた私のファンクラブ……だそうです」

『ファンクラブ!?!』

皆さんが同時に声を上げた。それはそうでしょうね、私が一番驚きましたが……

咲「なんでそんなのが出来たのですか？」

シン「私も知りませんよ……」

寧ろ私の方が知りたくらいですよ……

フラ「きつとお兄さまがカッコいいからだよ！」

シン「私がカッコいいから……ですか……」

私はかつこよくなんかない……あれだけの罪を犯したのだから

妖「……私も入ろうかな」

シン「？何か言いましたか？妖夢さん」

妖「い、いえ!? なんでもありません!」

ユユ「うふふく♪妖夢つたらく♪」

顔を赤らめる妖夢さんを見て、幽々子さんが微笑む。どうしたんでしようか?

魔「そんなことより、早く宴会を始めようぜ!」

シン「そ、そうですね」

そうして私たちは前回と同じ様に宴会を楽しみ、後片付けをした。今回は妖夢さんと紫さんの式である藍さんと言う方に手伝ってもらったので、前よりも早く片付いた。

く翌日く

私は慧音さんとの約束のため、人里にやって来ています。

慧「む? シンジか。来てくれたようで嬉しいよ」

シン「すみません、お待たせしましたか？」

慧「いや、私も今来たところだ。気にしなくていいさ」

私に気を遣ってくれたんでしょうね。やはり出来た女性だ。

慧「早速だが君に会いたいと言っている人物……稗田阿求殿の元に向かおう」

シン「稗田阿求？どんな方なのですか？」

慧「どんな方と聞かれると難しいが……簡単に言えば、幻想郷の記憶かな？」

幻想郷の記憶？この世界の事を全て知り尽くしているとでもいうのでしょうか

慧「シンジは『幻想郷縁起』を知っているか？」

シン「それでしたら一度紫さんから聞いたことがあります」

慧 「ん？紫だと？まさか幻想郷の賢者である八雲紫と知り合いなのか？」

シン 「ええ、そうですね？」

慧 「まさか彼女と知り合いだったとはな……驚いたよ」

紫さんってかなり有名何ですね？流石と言った所でしようか

慧 「話を戻すが、その『幻想郷縁起』は昔あらゆる妖怪に会った時の対処法等を載せた人間だけの書物だったのだが、今では妖怪と人間が共存するための妖怪の凶鑑でな……それらを描いているのが先程言った稗田阿求殿なのだよ」

あらゆる妖怪のデータを記録していると言うわけですか……凄い方なのですね

慧 「つと、話をしている間に着いたようだな」

これが稗田阿求さんのお宅ですか……とても立派なお屋敷ですね

「これは慧音殿！お待ち申し上げておりました。阿求様は此方です」

慧「分かった。案内してくれ」

甲冑を着た人が警備をしているとは……紅魔館のよりも厳重な警備ですね

「どうぞ、この部屋です」

慧「うむ、ありがとう。阿求殿！上白沢慧音です！例の人物をお連れして参りました  
！」

阿「慧音さんですか？どうぞ入って下さい」

慧「失礼します。此方が例の……」

シン「八神シンジです。この度はこのような立派な御屋敷にお招きいただき、誠に有り難う御座います」

阿「いえいえ、ご用があつてお呼びしたのは此方なのですからもちと楽にして頂いて構いません」

シン「お氣遣い有り難う御座います。早速ですが私にご用と言うのは？」

阿「貴方の噂は予々聞いております。人間でありながら、吸血鬼の元で執事をしていたり、異変を解決していたりといったことを……」

シン「因みにどちらからその情報を？」

阿「鴉天狗です」

シン「……………」

やはり焼き鳥にした方が宜しいでしょうか？

慧「と、所で阿求殿。そろそろ目的を仰られた方が宜しいのでは？」

阿「そうですね。実は貴方の事をこの『幻想郷縁起』に載せたいのです」

シン「私をですか？しかし私は人間ですが……」

阿「この『幻想郷縁起』は今となつては幻想郷の記憶に残る者を載せていますし問題はありません。いかがですか？」

私を書物に載せる……ですか……。余り気乗りはしませんが頼まれた事は断れませ  
んね

シン「……分かりました。ご協力させて頂きます」

阿「ありがとうございます！では早速ですが質問の方をさせて頂きます」



少女質問中…

阿「成る程……この度はありがとうございます！必ず良い記録となるように全力を尽くします！」

シン「ええ、宜しくお願いします」

慧「では我々はそろそろ失礼するとしよう」

シン「そうですね。では私たちはこれで……」

阿「はい。気を付けてお帰り下さい」

余り目立つのは好きではありませんが、少し楽しみです

## 執事の日常

どうもお久しぶりで〜す♪皆のアイドル、文ちゃんですよ〜♪

現在私は何か特ダネでもないかな〜つと思つてあちこち飛び回つていますが

……

「何か無いですかね〜」

そんなことを考えながら飛んでいると……

「……………」

おや？あれはシンジさんじゃないですか。……はっ！シンジさんあるところ特ダネあり！こっそりと追いかけましょう！

少女追跡中…

「ここは白玉楼ですか？こんなところに何をしに……取り敢えずは観察をしておきましよう」

「妖夢さん？いらつしやいますか？」

「あつ！シンジさん！今日も来てくださったんですね？ありがとうございます！」

「いえいえ、気にしなくていいですよ。それでは早速修行の方に移りましょうか」

「はい！宜しくお願います！」

「どうやら妖夢さんとの修行のようですね？これはちよつと気になるので見学させて  
いただきますよう♪」

「では何時でも構いませんよ？」

「それでは……いざー！」

妖夢さんは床を思いつきり蹴ってシンジさんに接近してゆく

「はあー！」

そして充分に間合いが詰まった瞬間素早く木刀を切り上げる

「甘いですよ」

シンジさんはそれをなんなく切り払い妖夢さんの後ろに回り込んだ

「くっ！まだまだ！」

妖夢さんはすかさず振り向き斬りつける

「つと、今のは流石にヒヤッとしましたね」

シンジさんはバックステップでかわしながら距離をとった

「そんなこと言っても全然余裕そうな顔してますけどね……」

「ふふふ、たとえ顔には出てなくても言ったことは本心ですよ？」

「そうですか……それは光栄です……ね！」

妖夢さんは再び接近する。そして……

「せいー！」

木刀を振りかざしシンジさんはそれをとめる。だが……

「これで終わりです！」

一瞬の間隙についてシンジさんの後ろに回り込み斬りつける。だがそこには……

「なっ!？」

シンジさんの姿は無く、木刀は空を斬った

「チェックですよ……妖夢さん？」

「っ!？」

気が付いたときには妖夢さんの背後にシンジさんが回り込んで、木刀を妖夢さんの頬

に突き付けられていた

「ふう……今回も完敗です。流石ですね？」

「いえいえ、妖夢さんこそ以前よりも確実に成長していらつしやいますよ？自信を持つてください」

「ありがとうございます」

「あら？終わったのね」

妖夢さんとシンジさんが話していると幽々子が会話に入ってきた

「あつ、幽々子様！何時からいらつしやったのですか？」

「えくと……最初から？」

「そうですね。最初からいらつしやいましたよ?」

「……本当ですか?」

「ええ」

「全く気付きませんでした」

「あららく、妖夢もまだまだ未熟者ね?」

「うっ……申し訳ありません」

私も全く気付きませんでした……亡霊だからでしょうか?

「ところで幽々子様はどうしてこちらに?」

「シンジ君が来ると聞いてこの前教えてもらった将棋つてやつの相手をしてほしくて



ね。お願いできるかしら？」

「ええ、勿論構いませんよ？」

「ではその間私はご飯の支度をして参ります」

「じゃあ行きましょう」

「畏まりました」

修行の次は将棋相手ですか……忙しい方ですね。私的にはバッチ来いですが♪

「これで詰みですね」

「あらら……負けちゃったわね」

「それでも先程私も一度負けましたしおあいこですよ」

「それでも負けるのはやっぱり悔しいわね」

……息の詰まる攻防でしたね。シンジさんが優勢だと思つたら幽々子が逆転してさらにシンジさんが逆転をするなど……2人とも化け物級ですね

え？何で見えてるのかって？それは私の相棒であるこの双眼鏡のおかげですよ♪いや、いつもお世話になってますね♪

「幽々子様、食事の用意が出来ましたよ」

「あらく、ありがとう妖夢♪」

あややや、スゴい量ですね……。とても一人で食べる量じゃありませんね

「シンジさんもご一緒にいかがですか？」

「いえ、私は別の用事があるのでこれで失礼いたします」

「そうなの？残念ね」

「いずれまた来ますよ。それではこれで失礼します」

「本日はありがとうございます！」

「何時でも待ってるからね」

「どうやらシンジさんは帰宅するようですね？では再び尾行を続けましょう」

少女尾行中…

あや？次は人里ですか？一体何をしに来たのでしょうか…

「慧音さん？いらつしやいますか？」

ここは寺小屋ですか？まさか先生までやってるんですかね？

「む？シンジか！今日も来てくれたのか？」

「ええ、今日も時間が空いていたので手伝いに来ました」

「助かるよ。これから午後の授業があるから頼めるか？」

「お任せ下さい」

まさか本当に先生までしていたとは……体の方は大丈夫なんですかね？

「皆、今日もシンジ先生が来てくれたぞ！」

「皆さん、こんにちは」

「あつ！シンジ先生だ！」

「シンジ先生！今日も面白い遊び教えて！」

「ええ、構いませんよ。ただし、勉強をちゃんと聞いてたらですよ？」

『はく！』

「ふふ、これは私よりも人気だな」

「そんなことはありませんよ。この子供たちからは慧音さんへの信頼が感じ取れますから」

「そうだといいな」

ふむ……流石シンジさんですね。ここの子供たちからも慕われているなんて……これは記事にせざるおえません！

「であるからして人間と妖怪は……」

授業の内容は人間と妖怪の共存についてだった。子供たちは興味津々にシンジさんの話を聞いていた。シンジさんは紙芝居を見せながら人間と妖怪の関係、この世界の仕組み等を詳しく説明していた

「……………と言うわけです。分かりましたか？」

『はーい！』

「うん、いい子達ですね。では約束通りに新しい遊びを教えてください」

『わーい！』

その後、シンジさんは子供たちと一緒に遊んでいた。

「では私はそろそろ失礼します」

「うむ。今日も助かった。感謝する」

「私は子供たちの笑顔が見れるだけで満足です。ではまた」

「ああ、気を付けてな」

おっと、あちらの方角は紅魔館ですね？遂に帰宅ですか……本当に忙しい方ですね

少女追跡中…

「只今戻りました」

「お疲れ様です。紅茶でも淹れましょうか？」

「いえ、この後はパチュリー様の元へ行く予定ですので」



「そうですか。では私はお嬢様に呼ばれてますので失礼いたします」

咲夜さんは一礼すると一瞬で姿を消した。シンジさんは特に気にする様子も無く図書館の方へと向かう。では私も密かに着いていきましよう♪

「パチュリー様。少々よろしいでしょうか？」

「何？今日も魔法を学びに来たの？」

そう言うとパチュリーさんは読んでいた本を置いてシンジさんの方を見た

「ええ。もう少しで何かが掴めそうな気がするので……」

「いいわよ。付き合ってあげるわ。こあ？何時もの魔導書をお願いね？」

「はい！パチュリー様！」

……  
シンジさんは魔法まで習っているのですか？ 一体何を目指しているのでしょうか

「パチュリー様！ お待たせいたしました！」

「ありがとうございます。じゃあ始めましょう」

「はい」

シンジさんは返事をする目と目を閉じ、精神を集中させた

「……………」

緊張感が漂う中、魔導書が浮かびページがひとりでに開かれる

「そう……………そのまま集中力を切らさないように呪文を唱えて……………」

パチュリーさんの言った通りにシンジさんは呪文を唱える……すると……

「……っ!?ゼロ・スプラッシュ!」

床に魔方陣が現れ、縦方向に水の柱が出現した……

「ふう……」

「流石ね。この短期間でここまで魔力を高めることが出来るようになるなんて……」

「これもパチュリー様のお陰ですよ。さてと……」

シンジさんはホッと一息つくと、こちらの方に目を向けた

「そろそろ出てきたらどうですか?」

げっ!?ば、ばれてる!?

「どうしたの?」

「侵入者が一匹いるようなのでね」

「まさかまた魔理沙が?」

「いえ、今回は泥棒ではないようですね」

うっ……ここは大人しく出た方が良さそうですね……

「はははは……バレてましたか?」

「ええ、それはもう。まさか私の事をとことんストーキングしてくるなんて思いませんでしたけどね?」

うっ……全部バレてる……

「……貴方ストーキングされてたの？」

「そうですね。別に私をストーキングするくらいなら構いませんが、それを記事にしたり、ましてや進入してきたとあっては……黙っていられないでしょ？」

シンジさんがすごい黒い笑みで返してくる。正直怖いですがここで退いてはジャーナリストの名折れ！シンジさんに勝負をいd「スターライトユニバース！……へ？」

ドゴーン!!

「あやあああああ!!!」

突然シンジさんがスペルを発動し、私は豪快に吹っ飛ばされた

「……容赦ないわね」

「ストーカーと侵入者には当然の報いです」

その後私は捕らえられ、今日の出来事を記事に載せないことを約束した(させられた)

くっ……ジャーナリストが敗北するとは……不覚!!

く永夜抄編く

夢と月

——クソツッ！一体なぜなんだ！

——お前に答える義理はない

——待て！俺は知らないんだ！

——うるさい！嘘をついても無駄だ！

——どうしてだ！どうして親友の俺を信じてくれない！

——親友か……お前の事を親友など思っていた俺が馬鹿だった……

——本当に俺は知らないんだ！

——命乞いはすんだか？最後に親友である俺に殺されるんだ。これも……せめても  
の情けだ……

——そんな……な……

——サヨナラだ……

——う、うあああああああああああああああ  
!!!!

「!!?!」



ハア……ハア……なんだったんだ？今のは……

「夢……だったのか？」

しかし夢にしては余りにもリアル過ぎる……

「あれは一体……」

……考えても仕方ありませんか

「少し外の空気でも……おや？」

窓から外を覗いてみるととても大きな月が浮かんでいた

「あの月はあまりにも不自然だ。もしかやこれは……」

異変……そんな気がした。一度お嬢様たちに相談した方がよろしいですかね

「あの月……」

明らかに怪しい。私は吸血鬼……夜を支配する帝王なのだから月の力を感じ取るくらいは容易い。しかしあの月からは月の力を感じない

別にプルートツ波が足りないとかではない。そもそもプルートツ波自体が知らないのだが……

まあ、そんなどうでもいい話は置いておいて……あの月をどうにかしないと目障りで仕方がない

「咲夜」

「お呼びでございますか？お嬢様」

「休み中に呼び出して悪いわね」

「気になさらないでください。慣れてますから」

「そ、そう……」

「この子には少し休暇を与えた方がいいかしら……」

「お嬢様、ご用件の方は？」

「あの月……怪しいと思わない？」

「あの月ですか？確かに不自然では御座いますが……」

「あの月からは月の力を感じない……偽物の可能性が高いわ」

「つまり異変である……と?」

咲夜の問いかけに私は軽く頷いた

「それでは如何いたしますか?」

「……私が自ら解決するわ」

「お嬢様がですか?しかし……」

「大丈夫よ。元凶を見つけたら完膚なきまでに叩きのめせばいいんでしょ?」

「……私も同行します」

咲夜が苦笑いしながら答える。何か間違っていたかしら?

トントントン

「ん？誰だ？」

「シンジです。入ってもよろしいでしょうか？」

「ああ、シンジか。いいわよ」

「失礼します」

シンジがゆっくりと扉を開けて入ってくる

「夜遅くに申し訳ありません。どうしても伝えておきたい事がございます」

「もしかしてあの月の事？」

「……気付いていらっしやいましたか」

「ええ。それで私と咲夜で異変を解決するわ」

「それでしたら私も」

「……ダメよ」

「?何故ですか?」

「貴方にはフランの面倒を見ていて欲しいの。あの子を一人にさせるわけには行かないし……」

「しかし……」

「シンジさん」

シンジが食い下がろうとしたとき、咲夜がシンジに呼び掛ける

「私たち執事やメイドはご主人であるお嬢様の命令に従ってればいいの。分かりました？」

「……承知しました」

シンジは渋々といった感じで納得してくれた

「では私はこれで失礼します」

「ええ、お休みなさい」

シンジは一礼をするとそのまま部屋を後にした

「では我々は異変解決に向かいますか」

「そうね」

さて……初めての異変解決ね。月で遊んだ罪は重いわよ？

ではこれからどうしましょうか……実を言うと先ほどの夢のせいで目が覚めてしま  
いましてね……眠れないんですよね

「どうしましょうか……」

私がそんなことを考えていると……

「あっ！」

「ん？」



「お兄様だ！」

「おっと、フランでしたか。まだ起きていたのですか？」

突然フランが私目掛けて飛んできた。少し痛いです……

「私は吸血鬼だよ？本当は夜に活発になる種族なんだからね！」

「っと、そうでしたね」

時々忘れますね。こんな（外見が）幼い子が吸血鬼だなんて思ってませんでしたから。私のイメージでは……

——俺は人間をやめるぞ！ジ○ジ○！

だったんですが

「お兄様は何をしていたの？」

「ああ、私は今回の異変についてお嬢様にご相談を……」

「お姉様に？ 異変っていつもお兄様が解決してるやつだよね」

「ええ、まあ」

間違っではないんですけど、霊夢さんが聞いたら泣きそうですね……

「私も異変解決やってみたい！」

「……………えっ？」

これは予想外な答えが返ってきました。どうしましょうか……

「お兄様がついていれば安心だよね♪」

フランが笑顔でこちらを見る。ここまで言われたらさすがに断れません

「……分かりました。でも無茶だけはしないでくださいね？」

「ハイ！」

まあ、何とかなるでしょう……

主の足がヤバイ……

「お嬢様、1つよろしいでしょうか」

「何？ 咲夜」

私はお嬢様に1つの疑問を尋ねる

「……どちらへ向かわれているのですか？」

「元凶のところよ？」

「私には適当に飛んでるだけの様な気がします……」

お嬢様はどう見ても宛もなくさ迷っているようにしか見えません……

「分かってないわねえ。私は吸血鬼よ？月に関する事なら誰よりも理解できるわ」

余り現在の状況とは関係無いような気がしますが……

「あら？」

「どうしたの？咲夜」

「目の前に人影が見えますが……」

（お嬢様が言うには）元凶を目指して飛んでいると、目の前に二人の人影が見えてきた

「あれは……西行寺幽々子と魂魄妖夢ね」

「白玉楼のですか？何故こんなところに……」

「そんなことはどうだっていいわ、重要な事じゃない」

……何故か霧が出てきた気がしましたが……気のせいですかね？

「兎に角、アイツらから話を聞きに行くわよ！」

「あつ！お嬢様、お待ちください！」

私はすぐさま飛び出したお嬢様を追いかけた

「幽々子様？あちらから誰か来ますよ？」

「あら本当ねえ。あれはレミリアと咲夜みたいね」

「やっぱりお前たちだったか。お前たちも異変について調べてるクチか？」

「まあ、そんなところですよ」

レミリアが私たちに質問すると、妖夢が答えた

「ほら見てみなさい！ 咲夜！ 私のいった通りでしょう！」

「ただ単に勘が当たっただけのような気がします……」

「……………」

「……………まさか凶星ですか？」

「……………うー」

あらあら♪とても可愛らしい下段ガードねえ。ますます虐めなくなっちゃうわー

「れ、レミリアさんも異変について調べているんですか？」

「え、ええ！その通りよ！」

立ち直るのが早いわねえ。流石はカリスマってところかしらねえ♪

ドゴーン!!

私たちが話をしていると離れたところで爆発音が聞こえた

「あつちから聞こえたわね……じゃあ行きましようか♪」

「あつ！お待ちください！幽々子様！」

「私たちも行きましょう、お嬢様」

「ええ。そうね」



さて、何があつたのかしらねえ〜♪

「ねえお兄様。異変の解決って何すればいいの？」

「先ずは情報集めからですね。取り敢えず人里へ向かってみましょう」

私は今フランと共に異変解決をしている。初めは人里へ行き何か情報がないか調べることにした

「ん？」

「どうしたの？お兄様」

おかしい……。人里も見当たらなければ人の気配も全くしない

「……ここにあるはずの人里が無くなっています」

「え？それってどう言うこと？」

「無くなっている……と言うのは少し語弊があるように思えます。どちらかと言うと無かったこと〃にされていると言った方が正しいですかね」

「無かったこと？」

「こんなことが出来るのはおそらく……」

「待て」

「この声は……」

やはりあの方ですか……

「む？まさかシンジか？」

「やはり貴女でしたか……慧音さん」

「まさかシンジだったとはな。驚かせてすまなかつた」

「いえ。私は全然気にしてませんよ」

「お兄様の友達？」

フランが袖を引っ張りながら聞いてくる

「ああ、友達だよ。シンジの妹さんか？」

「あつ、いえ、私はこの子の執事をしているだけです」

「成る程。それで親しみを込めて愛称で呼んでいるわけか……」

「まあ、そんなところです」

「ところで、君達はどうしてここに？」

「えっとね。お兄様と一緒に異変解決してるの！」

慧音さんが私たちに疑問を尋ねるとフランがそれに答える

「異変か……どうりでな……」

「どうしたんですか？」

「最近周辺の妖怪たちの様子がおかしくてな。突然興奮しはじめたり、あげく共食いまでする輩も出始めた。皆、弱小妖怪だから軽い障気に当てられたのかも知れないな」

そんなことがあつたんですか……。ですがあの月からはそのような力は感じません。一体何故……

「だから私は人里の歴史を能力で『食べて』まもっているんだよ」  
「歴史を食べる？ どう言うこと？」

慧音さんの言ったことにフランは疑問符を浮かべる

「私の能力は『歴史を食べる程度の能力』。人里の歴史を食べ無かったことにしているんだ」

「でもそんなことしたら人里が無くなっちゃうんじゃないの？」

「いや、歴史と言うのは事実ではなく人個人個人の視点から見たものことではな？ 私は

皆の中にある人里と言う存在を消しただけで人里がある事実を完全に抹消したわけでは無いんだよ」

「???」

これはフランも理解できてませんね

「つまりは私たちの眼には今だけ見えなくなっているって事です」

「おく、成る程!」

仕方なく私は慧音さんの説明にフォローを入れた

「何故だ……何故私の説明では分かって貰えないんだ……」

「難しいから……じゃないですか?」

「グハッ!？」

「うん。けーねの話分かんない」

「ハグアツ!？」

フランがトドメの一撃を入れた瞬間、何かが慧音さんを貫いた音がしましたが……気のせいですかね？

「……ところで、何か異変の手がかりになりそうなものはありませんか？」

「う、うむ!」

あつ、二元に戻った

「実はあつちの竹林……迷いの竹林と呼ばれているのだが……」

迷いの竹林……そのまんまですね……

「私の親友が最近竹林の様子がおかしいと言っていた。行ってみる価値はあるかもしれない」

「……わかりました。行動をとらないと始まりませんので行ってみます」

「ああ、気を付けてな」

「またね〜♪」

私たちは慧音さんに別れを告げると、迷いの竹林と呼ばれる場所へと向かった



## 蘇る悪夢

皆さんこんにちは。魂魄妖夢です。私たちは現在爆発音のした場所へと来たところ  
です

「異変の元凶かと思っただけ……全然違ったみたいだな……」

「そうですね。まさかこの2人が争っているだけだったとわ……」

レミリアさんに続き咲夜さんも呆れた声を挙げる。それもそうでしょう。何せ私た  
ちの前にいるのは……

「つと、あつぶねえな！もう少して当たるところだったじゃねえか！霊夢！」

「うるさいわねえ。当てるつもりでやったんだから当たり前でしょ？魔理沙」

……霊夢さんと魔理沙さんだった

「紫、一体何があつたの？」

「鼻☆塩☆塩」

紫様……何か違うような気がしますが……

紫の回想

「霊夢？いる〜？」

「あら紫？アンタが来るなんて珍しいわね」

「貴女は相変わらずお茶を飲んでのんびりしてるのね……」

「そんなの私の勝手でしょ？」

「……まあいいわ。それよりも異変よ。早くいくわよ」

「アンタが自分から異変解決なんて珍しいわね。どう言う風の吹き回し？」

「何となく……よ」

「なんか胡散臭いわね……。でもまあいいわ。異変解決が私の役目だし付き合っ  
てあげるわ」

「ありがとう。じゃあ行きましようか」

こうして私と霊夢は共に異変解決をすることになった。そして……

「あそこかしらね……」

「今までの情報通りだと間違いはないわね」

私たちは異変の元凶がいると思われる竹林に辿り着いた。でも……

「おい、バトルしろよ」

「っ!?!この声は!?!」

突然聞き覚えのある声が聞こえ、霊夢が驚いた

「魔理沙!何であんたこんなところに!」

「おいおい、そんなこと言うなよ。私たちだって異変解決に来たんだぜ?」

「私は半ば強制的だけどね……」

後ろからは七色の人形遣い……アリス・マーガトロイドが現れた

「強制的って人聞きの悪いこと言うなよ。お前だって異変に興味があるなんて言ってたじゃないか」

「興味があるとは言ったけど異変解決に協力するなんて言っていないわよ」

「全く、薄情なヤツめ……」

「そっちの揉め事はいいわ。用件は何？」

「つと、そうだったな」

霊夢が疑問を尋ねると、魔理沙は思い出したようにこつちを見る

「霊夢！今回の異変は私が解決させてもらおうぜ！」

「……はっ？」

「いつもお前ばかり目立ってずるいんだよ！私だってたまには目立つくらいの活躍を  
したいんだ！」

「何を言い出すかと思えば……」

霊夢は呆れたようにため息をつく。私も内心では呆れている

「まあ、私としては変わりに異変を解決してくれるなら助かるわ。後は任せたわよ」

霊夢は面倒くさそうに立ち去ろうとする。しかし……

「まてまて！」

「……何よ？」

魔理沙が霊夢を呼び止めて指をさして告げた

「それでは私のプライドが許さない！私と弾幕ごっこだ！」

回想終了

「と、言うわけよ♪」

「いやいや、ウインクされても困ります。と言うか、紫様は何故止めなかったのですか？」

「それはね……面白そうだったからよ♪」

全く、この人は……

「私は正直どうでもいいわ。そんなことより早く家に帰って研究の続きがしたいわ……」

アリスさんは巻き込まれた側とはいえ、結構酷いこと言いますね……

「まあ何でもいいわ……。咲夜？そろそろ行くわよ？」

「畏まりました」

レミリアさんと咲夜さんが立ち去ろうとする。その瞬間……

ドゴーン!!

再び爆発音が聞こえた



「っ!? 今のは!？」

「向こうからだな……。何があつた」

「この嫌な感じ……。まさか!？」

レミリアアさんが何かを感じ取つたのか、物凄いスピードで向かつていった  
「お嬢様! お待ちください!」

咲夜さんもレミリアアさんを追いかけていく

「霊夢! ここは暫く休戦と行こうぜ」

「あんたから勝負を仕掛けてきたんでしょうが……。でも分かつたわ。私も少し気にな  
るし」

「……まさか」

「？紫様？どうしましたか？」

「……いえ、何でもないわ。私たちも早く行きましょう」

「はいはい♪」

「わ、分かりました」

「はあ、仕方ないわね」

紫様……どうしたんでしょうか……

「つと、あれが例の竹林ですね」

「そうみたいだね」

それにしてもスゴい竹の量ですね。迷いの竹林の名は伊達じゃないってところで  
しょうか……

「空から探しても何も見えないね？」

「そうですね。仕方ありません……降りて探しましょうか」

「はい」

私とフランは空からは探せないと判断し竹林の中に降りた

「これでは本当に迷ってしまいそうですね……」

中は見事に竹ばかり……。まるでかぐや姫でもいそうな雰囲気ですね

「ん？」

「どうしたの？お兄様」

「人の気配がしますね。隠れて様子を見ましようか」

私はフランを誘導して身を隠した

「ふう……後もう少しね」

女性？しかもあれは……うさ耳ですかね。でも何故こんなところに女の人……

「お兄様、あの人に聞いてみたら？ここにいて事はこの辺りに住んでる人かも知れないし」

成る程、その可能性は高いですね

「そうですね。一度聞いて見ましょうか」

私はフランの意見に賛同し、女性に尋ねてみることにした

「すみません。少しよろしいでしょうか」

「?何かしら………?」

女性の方は此方を見た瞬間に表情が変わった

「にん……げん……?」

?人間がそんなに珍しいんでしょうか

「っ!!? はあ!」

女性が少し距離を取った瞬間、突然彼女の眼が赤く光だした

「一体何を……!!? これは!!?」

「うっ!!? 何……この辺な感じ……」

この感覚は……まさか!!? ダメだ……意識が……

し、しまった……。人間だったからつい驚いちやって波長をずらしちゃった……。お  
師匠様にも止められてたのに……



「この気分久しぶりだよ。あの頃の感情が蘇ってくる……全てを壊したいと思う感情が！」

こつちの妖怪の子もヤバイ状態？ど、どうすれば……

「そーいやあフランさんよお。俺はまだお前と戦って無かったよなあ？どうだ？ここらで一発やつとくか？」

「いいね！私ももう一人のお兄様と戦って見たいって思ってたんだ！じゃあ全力で殺ろうか♪」

「クハハハハ！！？そーでなくてはつまらん！さあ、満足の行く戦いをしようぜ！」

――死魔『デッドエンド・ビックバン』

――禁弾『スターボウブレイク』



ド  
ゴ  
ー  
ン  
!!  
?

## 狂気の鎮静

「クハハハ!!?これだ、この感覚だ。やはり貴様は面白い!」

「私もだよお兄様!こんなに楽しい戦いは初めてだよ!」

——魔剣『ダーインスレイブ』

——禁忌『レーヴァテイン』

シンジとフランはお互いに自分のスペルを使いその武器を手を取った

「さあ、もつと楽しませろ!」

「それは私のセリフだよ!」

二人はすれ違うたびに互いの武器を交えた。それを見ていた一人の少女……鈴仙は、何もする事が出来ずにただ二人の戦う姿を見ているだけだった

「まだまだ行くよ!」

——禁忌『フォーオブアカインド』

フランがスペルを使うと、四人に分身した。しかし、どれか一人が本物ではなく、全てが本物のようだ

「ほう？こんなことまでできるのか。こいつは驚いた」

『これだけじゃないよ？』

——禁忌『クランベリートラップ』

——禁忌『カゴメカゴメ』

——禁忌『恋の迷路』

——禁弾『カタディオオプトリック』

四人のフランがそれぞれ別のスペルを発動した。一つ目は数カ所に魔法陣を設置し、それぞれの場所から弾幕を放った。二つ目は緑色の弾幕をシンジの周りに放ち、逃さないうように囲んでいる。三つ目は彼女の周囲に円を描くように弾幕が放たれている。そしてその弾幕には所々に隙間があり、名前の通り迷路のようだった。最後のはバラバラに放たれた弾幕が屈折するように跳ね返ってシンジ目掛けて飛んで行った

「クハハ、なるほどねえ。流石は吸血鬼、素晴らしい技だ。俺もどうやら手加減は出来ないうようだ！」

——幻符『ミラージュインクシオン』

シンジは弾幕を前方へと複数放つ。それはフランのスペルを次々と相殺していった『へえ、流石だね。あの数の弾幕をあつかりと消しちゃうなんて』

「お前に褒めて頂けるなんて嬉しいねえ。でも、油断はしないほうがいいぜえ？」  
「?っ!!?」

突然フランの後ろから先ほどのと同じ弾幕が現れた。あの弾幕は全てが本物では無く、幾つかは偽物……つまりは幻影だったのだ。フランはその弾幕をkarouじて避けたが、スペルによって現れた分身たちはやられてしまった

「まさか不意を突かれるなんてね。ますます楽しくなってきたよ」

「俺も避けられるとは思わなかったぜ。クハハ、段々楽しくなってきた……まだ簡単には終わらせないぜ?」

そして再び互いに武器を取り身構えた。そして同時に接近し斬りつけようとした。しかしその瞬間……

「うっ!!?」

「グハッ!!?」

2人は突然地面へと落ちた。どうやら眠ってるようだ

「と、突然どうしちゃったの？あれ？これは……」

鈴仙は恐る恐る近づいた。すると2人の首元には1本ずつ矢が刺さっていた。その矢の先端には睡眠薬が塗られているようだ

「これは……まさか!?」

「やれやれ、やっと見つけたわ」

竹林の奥からは1人の女性が弓を持って現れた

「し、師匠!?」

「全く、帰りが遅いから何があったのかと思つたら。こんなことに巻き込まれていたなんてね」

「す、すいません」

現れたのは鈴仙の師匠である八意永琳だった

「この二人はどうしたんですか？」

「騒がないように一時的に眠ってもらつただけよ。もうすぐ彼らの仲間達が来ると思うわ」

「仲間たち？」

「ええ、異変解決の為に……ね？」

私達は先程爆発が起きた地点の近くまで来た。そこは弾幕の流れ弾か何かで少し荒れていた

「一体何があつたんだ？」

「さあね。全く、面倒な被害を掛けてくれちゃって」

魔理沙と霊夢が言う。私は嫌な予感がしている。またあのシンジが闇にとらわれ暴れているのではないかと……

「この感覚……フランの狂気に似てるわ」

「しかしお嬢様。妹様は今では完全に狂気が消えているのでは？」

「確かに消えたわ。でももし……なんらかの状況で蘇ってしまったら……」

「再びあの惨劇が起こる……ですか……」

「もしそうならば一刻も早く止めなければならぬわ」

「……分かりました」

フレンドールも暴れている。これは一大事どころでは無いわね。なんとかしなければ、こんどこそ幻想郷が崩壊しかねないわ

「……とりあえず急ぎましょう。紫」

「……そうね」

私は幽々子に言われそれに返事をした。その後しばらくするとしたに2人の女性を見つけた。そしてその前にはシンジとフレンドールが倒れていた

「シンジ！フレンドール！」

レミリアはすぐさまシンジとフレンドールの元へと飛んで行った

「どうやら来たようね」

「あんた達……2人に何をした？」

「安心しなさい。只眠らせただけよ」

「貴女達は一体何者？」

「彼女たちは今回の異変の元凶……八意永琳と鈴仙・優曇華院・因幡よ」

咲夜の問いに私が答える。理由は私が彼女らと面識があるから……

「久しぶりね八雲紫。月面戦争以来かしら？」

「……そうね」

「ここで立ち話をするのも疲れるわ。私たちの住まい……永遠亭に案内するわ」

「……分かったわ」

永琳の提案に私は賛同した。シンジは私が、フランドールはレミリアが担いで行くことにした。でも……あのシンジには何か違和感を感じるわ

「クハハハ。面白いことになったじゃねえか」

ギリギリ矢が当たる直前に分身を造るのが間に合って助かったぜ。俺がそんな失態を晒すわけにはいかねえしな

「しかしあの永琳とか言う女……只者じゃねえな」



まあいいか。分身の居場所ならすぐに分かるし、暫くこの周囲をぶらつくか  
「しかし折角楽しい殺し合いをしてたのに邪魔が入ったな。後で強い奴のありかでも聞  
いてやるか」

クハハ、これからも楽しくなりそうだけ

## 疑問と眞実

さてと……この辺をブラブラするとは言ったものどうするかねえ……。特にこの辺りには強い奴も居そうにねえし、いるとしても兎ばかりか……。兎鍋でもするか？

「にしてもさつきから視線を感じるが……クハハ、少しおちよくつてやるか」

「よしよし♪そのままずっとすぐ行くのよ♪」

まさか鈴仙を待っていたら人間が来るとは思わなかったけど、この際は何でもいいわ！あの人間を私の仕掛けた罠にしかけてやるわ！

「ふふふ、さあ！罠に掛かるのよ！」

「ほう？誰を何に掛けるって？」

「そりゃあ勿論あの執事服を着た人間を私の仕掛けた落とし穴に落とすのよ」

「その人間つてのは今お前の後ろにいる奴か？」

「後ろ？ ああ、そうそう！ この服を着た人間……………」

「クハハハ……………面白いことを考えたじゃないか。ええ？ 子兔さんよお」

「……………ハハハハハ」

あれ？ これって私……………ヤバくない？

「では罠に掛かる前に元凶を叩くとするか」

「……………れれれれ冷静になれ」

「安心しろ、俺は冷静だ」

ふふふ……………私オワタ＼（ $\circ$ ）／

「我が生涯に一片の悔いなし！」ピチューン

あの紅眼の兎と同じ種類か？ まあ死ぬ様な事はしていない。軽く気絶させる程度の弾幕を撃っただけだ。どうせ直ぐ起きるだろう

「いったったった……ひどいなあ……何もそこまでする事ないじゃん」

「先に仕掛けたのは何処のどいつだ？またこれ以上の弾幕を喰らいたいのか？」

「も、もう勘弁して下さい……」

なんだ……少しは抵抗するとは思ったが……

「ところであんたは誰？」

「俺は八神シンジ。今回の異変を解決しに来た」

「八神シンジ？なんかどつかで聞いたような……。まあいいか。私は因幡てる。異変の事ならそこまで心配する事は無いと思うよ？」

「元より俺は異変の事など興味は無い。俺は楽しければそれでいい。一番の望みは強い奴と戦う事……それだけだ」

「ま、まさかの戦闘狂……。取り敢えず私の住んでる家に来る？」

「なんだ？俺を兎小屋に連れてく気か？」

「違うよ？？普通の家だからね？？」

この反応……クハハハ、虐めがいのある奴だなあ。まあ、家と言っても十中八九あの八意永琳とか言う奴の向かった場所だろう。分身から手に入れた情報によるともうそろそろ面白そうな話をするらしいし、案内してもらおうか

「さあ、ここが私達の家よ」

永琳とやらに案内された家は私の紅魔館とは全く違った作りの建物だった

「これは白玉楼に似ていますね……」

咲夜がいう。確か白玉楼は半霊の庭師と亡霊の住居だったか……

「さあウドンゲ、みんなを客間に案内させて。私はこの2人を休ませてくるから」  
「わかりました、お師匠様」

永琳はそう言うのと、シンジとフランを抱えて先に中へと入っていった  
「さあ、貴女達はこっちよ」

私達も兎について行き客間へと向かった

少女達移動中……

「ここが客間よ」

「今更だけどこの人数を一部屋に入れる事って出来るの？」

！  
靈夢が疑問に思ったことを言った。確かに私達8人に含めて鈴仙、永琳も入る事を考えると流石に入りそうな感じはしない。当然紅魔館ならこの位の人数は余裕だけどね

「大丈夫よ、10人くらいなら何とかなるわ」

「そう？ならいいわ」

靈夢は鈴仙の言うことに納得したようだ

「じゃあ開けるわよ」

鈴仙がそう言うのと扉を開けた

「意外と広いんだな」

「意外とは失礼ね。客間くらいは広くしてあるわよ」

魔理沙が呟き後ろから声が聞こえた

「ひ、姫様!?」

「姫様? 一体何者なんだ?」

鈴仙が驚いている中私が質問した。

「この方は蓬莱山輝夜様。月の世界のお姫様よ」

「輝夜姫……確か外の世界のおとぎ話に出てる人物と同じ名前ね」

アリスが言う。そう言えば私もそんな話をパチエの図書館で見た事があるわ

「……蓬萊山輝夜」

「貴女も来てたのね。八雲紫」

「ええ。相変わらずのようね。貴女も永琳も……」

「貴女も同じでしょ？ いや……貴女は変わったかもね……」

八雲紫と蓬萊山輝夜が話している。どうやら2人は知り合いらしい。私たちは意味が分からず頭に疑問符を浮かべている

「紫？ あなたの知り合いなの？」

幽々子が私達の疑問を紫に尋ねる。紫は一言だけ「昔に少しだけ……」つと言った

「私はあの時の事は全然気にしてないわよ？ 私は大して関わってなかったしね」

「そう……」

あの時？ そう言えば永琳と会った時も似たような事を言っていたわね。確か月面戦争がどうか……

「紫……あんた……」

霊夢は何か感ずいたのか何かを言いかける。それに対し紫は首を横に振った。

「貴女達が考えてる疑問は永琳が答えるわ。そしてもう一つの真実も……」

「真実……？」

一体なんだ？ 突然意味の分からない一言を輝夜は告げた。もう一つの真実……私達

の知らない事が何かあると言うのか？

「また人任せですか？ 姫様」

そして奥から永琳が戻って来た

「またとは失礼ね。私はそんなに人任せにした覚えは無いわよ？」

「そうですか？ 取り敢えずみんな客間に入って頂戴」

永琳はそう言うのとみんなを客間に誘導した

「それで？ 私たちの疑問ともう一つの真実つてのを教えてくれるかしら？」

咲夜が永琳に質問をする。正直私も気になっていた。なぜ私たちにそのもう一つの真実とやらを教えるのかを……

「……分かったわ。まず貴女たちの疑問について……。私たちと紫の関係……。月面戦争について答えるわ」

「月面戦争……。確か紫が仕掛けた月との戦争……。だったわよね？」

霊夢が答える。どうやら霊夢は月面戦争について多少知識があるみたいだ

「ええそうよ。私達はその時に知り合った。紫は幻想郷の勢力を引き連れて月へと攻めてきた」

「それで結果は？」

魔理沙が尋ねる



「結果は私達月の勢力が勝ったわ。でもそれは所詮結果論……私たちの勢力は多大なダメージを負ったわ」

「でも紫様は何故その様な事をなさったのですか？」

妖夢が紫に尋ねる

「……私の実力を試したかっただけよ」

「……………」

本当にそうなのか？紫は誰よりも幻想郷を大切に思っているはず……なら尚更幻想郷が危険な目に遭うであろう行為は控えるはずだ……。

「取り敢えず貴女たちの関係は分かったわ。だけど一番気になるのは……もう一つの真実という奴よ」

私は一番気になる事を問いかけた。そう……輝夜が意味深にもう一つの真実という言葉をしたという事は私達にも関係性があるからだろう。

「……そうね。もう一つの真実……それは……」

「……………八神シンジの前世よ」